
仮面ライダーベルゼブブ

THIS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーベルゼブブ

【Nコード】

N7280V

【作者名】

THIS

【あらすじ】

ミッドチルダに最近、一つの都市伝説ができた。それは黒い蠅の魔王が怪物を狩っていると云うもの。

凶悪化していく犯罪の裏で暗躍する、人を襲う謎の怪物シード。突然現れる機械兵器アーマード。人の恐怖をあり、死をもたらずゴースト。

これら三つの事件を追う時空管理局の二人の執務官と地上の捜査官達。

彼らは必然的に都市伝説の魔王と遭遇することになる。

これは一人の優しい魔王の物語。

一人ぼっちの魔王と彼と出会う人（物？）達の物語。

「お前に魔王という名の恐怖を味あわせてやる。冥土の土産にな！」

プロローグ 闇夜の大蜘蛛と暴食の魔王

魔法世界ミッドチルダ。

管理局の地上本部が置かれている首都では近年の犯罪の凶悪化の対応が問題となっていた。

改善を試みる動きがあり一時は減少の傾向を見せたのだが、ここ数カ月でまた急激に広がってしまった。

その原因は質量兵器の増加と・・・人が怪人、または怪物に変化して異常な戦闘力を発揮して暴れまわるとい信じられない原因なのだ。

人が怪人や怪物になった原因は不明。Sランクを確実に超える戦闘力を持つ故にその鎮圧のために高ランクの魔道士に出勤を余儀なくされる事態となっていた。

とあるビルの一角。紅の月が不気味な光を照らしている中。

そこで一人の女性が悲鳴をあげていた。

「きゃあああああ!!」

見上げる彼女の視線の上には先ほどまで傍に歩いていた男が血まみれになっている。

「かかかかかっ・・・おいしいねえ。人の恐怖と悲鳴というのは。」

血まみれの男の身体を持っているのは巨大なクモの怪物。牛すら簡単に飲み込めそうなほどの巨大なクモにその蜘蛛を人間化させたような怪人の上半身が頭の部位にくっついている。

巨大な蜘蛛の怪物がビルの空き地に自身の糸で巨大な巣を作っている。そこには血まれの男以外にも複数の人間の死体が糸にくるま

れていた。糸の隙間から見える肌は干からびてカサカサになってしまっている。

「いい糧を見つけた。いいリンカ コアも持っているようだし・・・。これでまた一つ・・・。」

女を見る怪物がゆっくりと彼女に迫る。

「私の力があがるわ・・・。」

「ひっ・・・くっ・・・。」

女性が悲鳴と恐怖を押し殺しに緑色のスフィアを四つ作り出し、それを怪物に放つ。

高速で放たれた魔力スフィアは怪物に命中、しかし、命中しただけであった。

「とっさに殺傷設定では放つ・・・いい判断。でも私に通用するかどうか話は別。」

スフィアは命中し、強い衝撃を怪物に与えたはずだった。だが、怪物は平然としている。

「あっ・・・ああ・・・。」

「普通の魔道士にはいいスフィアね。少し痛かったわ。でも・・・それだけよ。」

怪物は糸を吐き出し彼女を縛りあげ、其のまま引き揚げる。

そして値踏みするかのように彼女に近寄る。

「綺麗な顔・・・。これを食べる事ができるなんて・・・中々美容にもいいわね。」

怪物は満足そうに頷く。そして、その言葉を聞いた女性は恐怖のあまりに失神寸前になっている。

「あっ・・・ああ・・・あああ・・・。」

失禁もしており、もうまともに喋る事もできない。ただ・・・恐怖に全身を震わせるだけ。

怪物は口を広げる。スポイトのような口に、2本の牙。その牙から滴り落ちる唾液がア

スファルトに落ち、白い煙と共に音を立てて溶かす。

これを彼女の身体に流し込んで・・・内部から溶かして飲み干す。まさに蜘蛛の食事の

仕方をそのまま再現している。

「じゃあ・・・頂きます!!」

怪物が牙を付きたてようとした瞬間だった。

「ぐふっ?!」

怪物の顔面に衝撃が走り、大きくのけ反った。

そして、風切り音とともに女性を縛っていた糸が切れる。女性だけじゃない。

怪物が止まっていた蜘蛛の巣の糸もズタズタにされ、ちぎれてしまったのだ。

糸を切られ、落ちていく女性。しかし、不思議な浮遊感とともに彼女はゆっくりと地面に下ろされた。

彼女の目には無造作に地面に落下する死体と、怪物の巨体が映る。

「うっ・・・っ・・・誰じゃああああ!!・・・私の食事を邪魔するのは。」

食事を邪魔された上に巣までも破壊されたことに怒りをこみあげ怪物は接近してくる相

手が何者かを肌で感じるのが遅れてしまった。

「あっ・・・ああああ・・・。」

女性は真っ先にその存在を肌で感じていた。寒いわけでもないのに、身体の震えが止まらないのだ。

異常な空気に怪物も感じ取ったのか震えだす。

「・・・我は暴食を司る者。」

低く響き渡る男の声がゆっくりとした足音とともに聞こえてきた。

「・・・我は冥府を司る者。」

その足音が聞こえてくるたびに女性と怪物の震えが大きくなっていく。

「我が喰らうはこの世の毒。身勝手な欲と言う愚かしくも浅ましい物にまみれた罪と穢れ。」

怪物は焦ったかのようにあたりを見回す。

ビルの陰から・・・その者は姿を現す。

「さあ・・・今宵の毒は・・・いかがな味かな？」

現れしは人型の異形の怪物。

全身を黒い殻のような物で覆われている。頭には昆虫を思わせる銀のアンテナのような

二本の触角。目には紅く輝く大きな複眼。複眼の間にはガラス玉のような第三の目。口元

も鋭い虫を思わせる銀色の牙が付いている。両手の五本の指の先には短くも鋭い鋼の爪。

そして指には銀のシンプルな指輪がはめられていた。

全身に鎖が巻かれ、特に両腕と両足の脛にはまるで何かを封印するかのように暗い銀の

小手や足具の上から鎖が巻かれていた。

腰には鎖で封印された銀のベルトが付いており、中央で紅い宝玉が光を放つ

背中に蟲の羽を彷彿とさせる紅いマント。

「魔王・・・ベルゼブブ！」

怪物はその異形の姿を見て、声を震わせながら名を言う。

「そう・・・我は暴食と冥府を司る魔王・・・魔王ベルゼブブ。名を呼ばれた魔王・・・ベルゼブブは特に動じた様子も見せずに怪物に向けて指をさす。」

「・・・お前に、魔王と言う名の恐怖を味あわせてやる。」

それは宣告。それを受けた怪物と女性は震えあがる。

「・・・冥土の・・・土産にな。」

ゆっくりとした歩調で怪物にむかって再び歩き出すベルゼブブ。

縮まる距離を開けようと後退する怪物。実際の距離と精神的には追いつめられていた。

「くっ・・・こうなったら、お前の力も喰らってくれる!!」

追いつめられていた怪物は口から無数の糸を吐き出す。

「ハイバイブネイル・・・。クリムゾンスラッシュ。」

しかし、その糸を紅い光を纏った右手の爪がその糸をまとめて斬り払う。

糸を斬り払われて驚く怪物。その驚いた瞬間に ベルゼブブの拳はすでに怪物の顔面にめり込んでいた。

「がああ!?!」

「・・・ふん!」

突然の衝撃にのけ反る怪物を蹴る。

巨体を誇る怪物がふきとばされ、壁に叩きつけられる様を女性は啞然として見ている。

「ぐっ・・・くそ・・・。」

怪物は実力の差を思い知り、とっさにその場から逃れようと胴体からビルの屋上へと糸を飛ばす。

そして、その糸から素早く逃げようとした瞬間。

魔王は左腕から鎖を飛ばし、それを振り回して怪物に向けて叩きつけた。

「ぐぎゃ!?!」

地面に落ちて潰れるような悲鳴を上げる怪物。

その怪物に向けて、魔王はさらに鎖を振り回し怪物を何度も打ちすえる。

空を切る素早さとしなやかさは鞭のようだが、鈍器のような重い打撃を与える鎖の連撃は怪物に容赦のないダメージを与えていた。

「ぐっ・・・ぐおっ・・・ぐああ!?!」

遠心力のかかった鎖の振り下ろしに地に伏した怪物。

「くっ・・・くそおおおおおおおおお。」

怒りが頂点に達した怪物の姿が変わる。黒いオーラが全身から噴

き出し、目が紅く光り姿が変わっていく。

ももとの巨体がさらに二周りほど大きくなり、全身を黒い装甲が覆う。爪もながくなり、文字通りそれは・・変身だった。

それとともに全身に受けたダメージもたちまち消えてしまった。禍々しい力に、女性も身をすくませる。

「暴走……。これはまずいですね。」

魔王の傍に黒い魔道書が現れ、怪物の状態を見てため息をついた。「調子に乗るなああああああああ！！」

巨体を駆使して、先程から想像もできないくらいのスピードで魔王に襲いかかる怪物。

しかし、怪物の手は魔王を捉えることはなかった。

「ぐっ……。あっ……。。」

「……。つまらないな。」

突進をかまし怪物の手や足を縫う様に避け、カウンターと言う形で胴体に膝蹴りをくらわしている魔王。

怪物は己の突進から逆にダメージを受ける形となり、後ろによるける。

膝蹴りを受けた部位は亀裂が入り、その破壊力の大きさがうかがいしれる。

「ふん！」

その怪物を後ろ回し蹴りで吹き飛ばす。

「ぐっ……。ぐぐぐぐっ……。」

立ちあがる怪物だが、ダメージが大きいためその動きは鈍い。

「シードの暴走すら相手になりませんか。流石です。」

魔道書の賛辞に何も答えず、魔王は冷酷に告げる。

「……。終焉の時間だ。」

魔王の右足の下から紅い光を放つ魔法陣が現れる。

「戒めを解くは、黒き稲妻の鎚。」

その言葉と共に右足の拘束がはじけ飛び、脛の足甲がスライドして、開く。

足甲の中から現れたのは黒い稲妻を放つ三つの宝玉。

「ちっ……。」

怪物が逃げようとするが、地面から突然現れた鎖に縛られ、動きを止める。

「くっ……くそ……!!」

必死に戒めを解こうとする怪物。怪物の力をもつてすれば普通の鎖やバインド系の魔法など簡単に引きちぎれる。

「なんで……解けない?!力も……入らない……。」

だが、その鎖は引きちぎれもせず、怪物の身体を縛り続ける。

「おせっかいかもしれませんが、あなたの鎖を借りました。まあ、あの巨体なら必要もないはずですが、念の為です。」

「ふっ……。おかげで確実に仕留める。」

魔道書の心遣いに軽く笑みを漏らす魔王。

彼は闇夜の中、首のマフラーを虫の羽に変えて跳躍。

雲から出てきた紅い月を背に、空中で一回転。

そして、黒い稲妻を纏った右足から怪物に落下するように突撃。

戒めを受けた怪物を地面に縫い付けるように黒き稲妻の鉄槌は下された。

その衝撃は怪物の身体を突き抜け地面に巨大なクレーターを作っ

た位だ。

「がっ……ああっあ……。」

凄まじい衝撃と蝕む黒き雷と共に身体に刻まれた魔方陣。

魔王は怪物の身体を縫い付けた右足に力を込め、後ろへ宙返りをしながら飛び退く。

破壊された怪物の身体が必死に自己修復をかけようともがくが……すでに手遅れだった。

修復しかけた身体が次々と崩壊していくのだ。

「ちっ……ちくしょうおおおおおおお!!！」

怪物の身体に刻まれた魔方陣が輝く。

「あがきなどせず……逝け!!！」

魔王が空を切ると同時に怪物は派手な音を立て爆散する。

突然の爆発に女性は思わず目をかばう。
吹き荒れる爆風はすぐに止む。
怪物の姿はもちろんの事、魔王の姿もすでになかった。

あとがき

はじめまして。THISです。皆さんが書いているのを見て、私も自身が最初期に練っていたアイデアを魔法少女リリカルなのはの世界を利用して書かせてもらいました！！

時代系列はVivioのミッドです。原作キャラは今のところはユーノと捜査官役としてティアナとはやて、フェイトを出す予定ではありません。

皆さんに小説を見てもらうのは初めてで、誤字、脱字、至らない表現、など多々あると思います。

ですからこんな私でよければ、いろいろな意見を頂ければと思います。感想、アドバイス、批判でも結構です。よろしく願います。

プロローグ 闇夜の大蜘蛛と暴食の魔王（後書き）

あとがきはここでしたか!?

¥¥¥¥¥¥ hazukasidesu

今度からはここで書きます。よろしくです。

憤怒と暴走 前編（前書き）

さて…この小説の主人公である魔王であり仮面ライダーであるベ
ブゼブブ。

その正体を明かすのを今回は渋ってしまいました。

前編の中に出てくる人物の中にその正体があります。

読んでいただいてなんとなく予想している人もいるのかもしれない
せん。

中編ではその人物を中心に書いていきますので、わかっていくと
思います。

中、後編と三部で一話を構成する予定で、後編で正体は明かしま
す。

あまり面白みはないかもしれませんが、よろしくです！！

憤怒と暴走 前編

「・・・ここまでが、その人の証言や。」

地上本部のとある会議室で、八神はやてが捜査員達に報告する。

「みんなの知っている通り、これまでに起きた魔道士の連続失踪事件。その犯人・・・まあ、人と言うべきかどうかは微妙やけど、その犯人らしき相手に遭遇して、無事だった人の証言や。」

報告書を見た捜査員達から動揺が走る。

それはそうだろう。

女性が目撃した犯人が人語を話す巨大な蜘蛛の怪物である事。

その怪物の周りには干からびた犠牲者の死体があった事。

そして、その女性を助けたのは魔王と名乗る怪人で、女性の魔法にびくともしなかつた怪物をあつさり倒して姿を消したという事だ。

「怪物の死体は何も残っていない。でも、巨大なクレーター、怪物の出した糸と、行方不明だった魔道士達の死体がすべて見つかったことからしても、証言に矛盾はあらへん。」

「・・・・・・・・。」

捜査員一同この報告に言葉を失っている。

何しろ魔法を使う彼らからしても、信じられない話ばかりだったからだ。

「おそらくこの事件その物はこの時点で終わったと考えていいと思う。でもこれと似たような事件はあちこちで起こっている。」

画面が切り替わり、そこで地上本部の周りだけでなく、管理世界のあちこちで似たような怪物による殺人、傷害などの事件が起こっている。

しかし、その怪物はすぐに姿を消してしまう。その理由は定かではなかったのだが。

「そして、その正体不明の怪物を倒して回っている存在が・・・今回

の事件にも出てきた魔王の可能性が高いちゅうわけや。」

怪物の正体は判らず、対処方法も不明。そんな彼らをあっけなく倒す謎の怪人。

「謎の怪物の正体に、それを倒した怪人の捜査が今後の方針。これはあくまでも個人的な見解やけど、魔王と名乗ったその怪人が怪物についても何か事情を知っている可能性が高いと思てる。」

彼女の見解に反論する者はいない。何しろ皆も同じことを考えていたからだ。

「でも、捜査する時は最大限に慎重に行動する事。何しろ、怪物は武装隊の魔法に余裕で耐え、その怪物を簡単に倒した怪人を相手にするやからな。」

その一言を最後に、その日の捜査会議は終わった。

無限書庫。

そこはあらゆる書物が眠っている場所であったが、無限と言われる蔵書故、現在の司書長、ユーノ・スクライアが来るまで多くの知識が死蔵された状態になっていた。

現在、ユーノの活躍のおかげで、書物は整頓され、管理局の貴重な情報源となりつつある。

現在彼は、幼なじみでもある八神はやての依頼で、とある単語を検索していた。

「・・・魔王・・・ベルゼブブ。」

管理外第97世界のある神話に出てくる魔王。人間の七つの大罪の中の一つ、暴食を司る存在で、その姿は羽に髑髏が描かれた巨大な蠅とされている場合が多い。糞の山の王などのイメージから冥府を司る者としてもみられており、かなりの大物とされている。

ルシフェルと同じく墮天した天使だという意見もある。

もちろんこれは宗教に出てくる神話の中の話であって、実際に出てくるとなると話は別になってくる。

「……古代ベルカにも蠅の魔王の名は出てこない。魔王の名はでてくるけど……。」

古代ベルカの戦国時代には代表的な聖王を初め、霸王、冥王、雷帝など数々の有名な王が出てくる。その中に魔王と呼ばれる存在も一人だけいた。その名を持つだけあり、世界に絶対の恐怖を与え、一致団結した王達に打ち滅ぼされたとされる。その団結をきっかけに古代の戦国時代は終わりを迎えた。その魔王の名は……。

「ユーノさん!!」

探索魔法をかけている彼に多くの本を持ちながら話しかけてきたのは、彼の部下だった

歳の頃は二十歳前後だろうか。アッシュブランドの背中まで隠れる長い髪に、切れ味すらも感じるほど端正な顔。眉が黒い枝のようになっているのと耳がトがつているのがちょっとしたアクセントになっている。額にはバンダナが巻かれており、紅い瞳の上から細いフレームのメガネをかけている。その体は細身だが、引き締まっている上に、貧弱な印象はない。

「こちらの資料ここにおいておきますね。」

無限書庫司書　バーハルトは資料を置き、ユーノの探索魔法の結果のぞき見る。

「あっ……ああ。」

「ついでにコーヒーも入れておきます。いい茶菓子もあるので。」

「ありがとう。」

バーハルトの入れるコーヒー、お茶は大変評判がいい。人の好みや体調に会った分を作れるので、司書達の癒しになっている。

「ふう。」

「検索は順調ですか？」

「まあ……ね。でも有用な物の選別が中々ねえ。」

バ　ハルトの持ってきたのはカフェオレで、微かな眠気を覚え始めていたユーノにはちょうどよかった。

「……蠅の魔王ですか。」

「古代ベルカの魔王の事も調べたけど、これも伝承程度しか判らない。史実として、多次元を危機に陥れていたのは間違いないけど・・・。」

「・・・。」
途中までで出た検索結果を見ながら、バ ハルトも唸る。

「かなり時間がかかりそうですね。もう少し有用な単語があればいいんですけど。」

「そう・・・だね。」

ユーノは幼馴染の八神はやてからの依頼書を見してみる。

「・・・魔王に人を喰らう怪物か・・・。他に・・・ん？」

報告書の中に出てきた女性の声でしゃべる魔道書、それと鎖に目を止めるユーノ。

「相手と自身を拘束する鎖と・・・魔道書か・・・。」

バ ハルトは報告書の内容を見て、少し顔をひきつらせていた。

「・・・。結構内容は詳細ですね。」

「被害者であり、事件の目撃者でもある女性が、航空武装隊の人だったから。恐怖の中で見るべきところはしっかり見ていたみたいだ。」

「そっ・・・そうなんですか・・・。」

そう言いながら震える手で茶菓子に手を伸ばそうとしたバ ハルト。
ト。

そんな彼が突然吹き飛ばされ、書庫の本棚に突っ込む。

「・・・相変わらず見事なドロップキックだ。」

ユーノは吹っ飛ばされる一部始終を見て、平然としている。

「ティータイムなら私達を呼びなさい!!」

大柄に部類されるバ ハルトを吹っ飛ばすドロップキックをしたのは一見すると中学生に見えるくらい小柄で金色でラブラドルのようなふわふわとした髪の女性だった。

「アリスを止めないのか？」

「・・・止める価値があると思う?」

ドロップキックをかました少女　アリスの後から出てきたのは黒の短くぼさぼさした髪 of 強面の二十代後半の男　アガリア。二メートル近い背丈と広い肩幅。左目に切り傷があるので、強面がさらに酷くなっている。

アリスを止めないのかと言っていたのは二十代前半位の珍しい白い髪の女性　リース。綺麗だがクールで冷たい光と切れ味を誇る顔立ちと白衣の上からでも判る抜群のスタイル。妖艶さまで醸し出している彼女だが、その表情には呆れがあった。

「・・・お願いですから、二人ともアリスを止めてください。」

突っ込んで倒れた本棚から現れたバ　ハルトがため息をつきながらも立ち上がる。

「相変わらず、なんともないのか？」

「無限書庫の不思議の一つねえ。」

「・・・勝手に怪談の仲間入りにしないでください。」

「・・・つてこつちを無視するな!!」

順に、ドロップキックを喰らい、本棚に突っ込んだのにもかかわらず平然としているバ　ハルトに対して、呆れに近い感覚で驚くアガリア。

その不思議なまでの頑丈さにすでに不思議現象と認識しているリース。

それに突っ込みを入れるバ　ハルト。

そのやりとりにおいていかれてむくれるアリス。

「はい。ちゃんとみんなの分の紅茶とコーヒー。それに茶菓子を用意しているから。」

やれやれと言いたげに、アリスにカフェオレを渡すバ　ハルト。

「うつ・・・うん。判っていれば・・・よろしい。」

顔を赤らめ、小さくなりながらもカフェオレを受け取るアリス。それを口にして満足そうな笑みを浮かべる彼女。

それを微笑ましく思いながらもバ　ハルトはリースにレモンティ、アガリアにはブラックコーヒーを渡す。皆の好みをきちんと把握し

ているのがバ　ハルトだったりする。

彼らはお菓子を時に口にしながら、何気ない談笑をしている。

「・・・君達がいると退屈しないですむよ。おかげで眠気も吹っ飛ぶ。」

そんな彼らをのんびりと傍観しているユーノもその輪に入っていない。

これが無限書庫の日常であった。

それは暗い闇の中だった。

「・・・今回のシードもやられたようじゃのう。」

黒いローブで顔と全身を隠した老人が杖をつきながら、スーツを着た男に視線をやる。

どこかの営業と言っても差し支えない清潔感のある格好。このような場でなければ何も違和感などなかっただろう。

「・・・忌々しい。今回は「暴食」の傑作でもっと収穫できると思っただのに。」

「まあ・・・本家本元にやられたら世話ないわな。」

二人の会話に加わってきたのは作業着にヘルメットというどこかの工事現場で働く格好をした男。髭も茫々だった。

「それでも、最低限のクライムは収穫できた。もっと育ててもらったら暴走する力を隠せずに管理局に公になってしまふ事を考えたらあれでよかったと言えるが・・・。」

三人の足元の闇が光を放ち、蜘蛛の怪物と、それを倒した魔王ベルゼブブの姿が映っていた。

「あれはプロトタイプだったんだろ？俺のアーマードとじいさんのゴースト、兄ちゃんのシードを融合させようとした究極の失敗作にして最悪のロストナンバー。」

作業着の親父　メキスの言葉に老人　リッチも頷く。

「ああ。素晴らしい素体があったからそれで作ってみただけという

存在。いくつのロストロギアも使ったと言っのに基地をその世界ごとと消滅させたデータも残らぬ最悪の失敗作。」

「だが・・奴は生きていた。そして、我々が想定していなかったスペックを發揮している。」

スーツの男 カウタ は映像に背を向けて歩き出す。

「その秘密も探らないといけない。種はべつに奴にも仕込んであるそれを餌にする。」

「がんばっているわねえ。」

そんな三人にからかい交じりに話しかけてくるのは、黒い革のドレスに身を包んだ中学生くらいの黒髪の少女。三人の上の何も無いところに腰掛けて笑っていた。

「おいおい。リリースお前はそんなに気楽でいいのか？」

「失礼ね。私も仕事はキチンとしているわ。本格的に動けるように色々と手をまわしているんだから。」

黒髪の少女 アイは笑いながら下に降りる。

「・・・・あの方の復活はまだ遠い。その力の源であるクライムは何とか供給できているけど、根本的な解決にはならないわ。」

「・・・忌々しい。ベルカの魔王め・・。聖王、霸王よりも奴が一番・・。」

カウタ の手が震える。

「・・・気持ちは察する。我々の軍勢もまだ封じられている。力すらもな。」

カウタ の気持ちはこの場にいる他の三人も同じようだ。

「目指すは・・我々と主の完全な復活。そして・・。」
そこから四人の声は重なった。

『審判の時を必ず・・主のために!!』

四人は動き出す。一つの目的のために

「……………」

夜。暴走と言ってもいいほどの速度で走る車。その速度は暴音を伴ってあらゆる物を振り切るうとしていた。

そんな暴走車を追跡する二台のパトカーと二人の航空魔道士。

その逃走劇の先に一人の女が突っ立っている。

暴走車と、パトカー、そして航空魔道士達がそれに気づいた時にはすでに遅かった。

暴走車にはね飛ばされ、宙を舞う女。

「くっ……くそ……」

空を飛んでいた航空魔道士の一人とパトカーが一台止まり、地面に叩きつけられた女の元に駆け寄ろうとする。

「……あれ？」

しかし、倒れたはずの女が何事も無かったかのように立ちあがる。

「おっ……おい。大丈夫なの……か……はっ?!」

声をかけようとした魔道士に対する返答は身体を貫く女の獣の腕であった。

気をつける……化け物が……。

何も言えずに、微かな念話を送った魔道士。その念話が彼の……
遺言だった。

物言わぬただの物体となり果てた魔道士を見下ろしていたのは、
女ではなかった。

そこにいたのは異形の怪物。チーターの姿を模した獣人だった。

その光景を見ていたパトカーの中の管理局員。

その彼らにチーターの獣人は爪を向けていた。

逃走続けていた暴走車の前にも怪物が立ちふさがる。

それは身の丈二メートル後半はある牛の怪人。巨大な鋭い角。厚い毛皮の下にはす甘草意ほどに発達した筋肉。脚は巨大な蹄になっているが、手は人間のよう五本の指がある。

目を紅く光、高速で迫っている暴走車に殺気を振り向けている。

それに暴走車を運転していた人は恐怖を覚えたが、すでに遅かった。

「うおおおおおおおおおおお！！！」

牛の怪人が雄叫びをあげて突進。

高速で走る暴走車に衝突する怪人。

そして、暴走車がぐちゃぐちゃになりながらも強制的に止まる。

バンパーはもちろん、エンジン、車の前半分が運転席ごと抉られたかのように壊れている。突進した怪人はまったくの無傷で、ダメージを負った様子もない。

むしろ怒りが高まったのか眼がさらに赤く輝く。

「ぐおおおおおおおおおおお！！！」

角に刺さった車を、怪人は首の力だけで後ろに飛ばす。

まるで空き缶をなげるかのような軽い感触で飛んで行く車。

だが、宙を舞っているのは一トン近くある鉄の塊。

その事実を車が道路に落下した重い破砕音で認識させられる。

牛の怪物の目が今度はパトカーに向けられる。

そして、そのまま突進。パトカーを跳ね飛ばす。

怪物に目を向けられた瞬間に中にいた管理局員の二人はとっさに外に出たので無事ではあった。

だが、怪物の怒りの視線は降りてきた二人に向けられる。

「にげるおおおおお！！！」

そんな二人を助けるために上空にいた魔道士が砲撃魔法を放つ。

よけようとせずにもともに受ける怪物。

設定はもちろん殺傷。

だが、怪物はそれを受けたのにもかかわらず平然としている。

「・・・・・・・・くつ・・・・・・・・」

しかし、怪物の足は止まっている。

それを見たパトカーに乗っていた魔道士はとっさに魔法で応戦。

数発のスフィアを放っていた。

接近戦を得意と人もいたが、さすがに暴走する車に真正面から突

っ込んで無傷、なおかつそれを跳ね飛ばすほどの怪力を持つ相手にそれは危険なのは判っていたのだ。

だが、在りえないほどの頑丈さは遠距離での攻撃でも全く歯が立たない。

「ぐおおおおおおおおおおお。」

怪物が凄まじい雄叫びをあげた。

その雄叫びは声その物が圧となり、空を飛んでいた魔道士と、地上で戦っていた二人の魔道士を吹き飛ばした。

「ぐあ!？」

空中に落下し、全身を強く打ち気を失う航空魔道士。

地上にいた二人もあちこち打ちつけて意識がもうろうとしている。そんな三人に怪物は突進をしかけようと角を相手に向けて、足で地面を何度も蹴っている。

終わる……。辛うじて意識があつた一人がそう思った瞬間だった。

どこからともなく聞こえてきた銃声、それと怯む怪物の姿。そこままで……。彼の意識は途絶えた。

「ぐるおおおおおあつ!？」

横槍を入れられた怒りに怪物は銃弾が飛んできた方を見る。

「……。悲惨だ。」

その人物は路地裏から銃型のデバイスを手に出してきた。

闇に彼の姿は隠れていた。

彼の傍らには黒い表紙の魔道書が宙を舞っている。

「主……。あのシードは……。」

「判っている。あれは……。憤怒だな。」

魔道書の言葉に、冷静に応える男。

そんな彼に牛の怪物は突進をしてくる。

男は手にしたデバイスから銃弾を連射するが、それで突進は止ま

らない。

しかし、それに慌てることなく銃を打ちながら突進をかわす。路地裏のビルの壁を砕きながら、怪物は立ち止まり再び突進。

とつさに男は右手から鎖を出現、踏み出そうとした片足を鎖で打ちすえ、バランスを崩した怪物は派手に地面を削りながら転倒する。「……今回、結界は展開されていない。早めに決めた方がいいか。」

男は手にした銃のデバイスを消す。

男の腰に鎖で拘束されたベルトが現れる。

ベルトとともに彼の左手を上にかざすと頭の上に赤と青の魔道陣。

足元には白と黒の魔道陣が現れていた。

「変身。」

その一言と共にベルトの中央部を拘束していた二本の鎖がはじけ飛び、紅い光を放ち、

足元と頭の上の二つの魔方陣を紅い鎖でつなげ、牢獄を作る。

神父がするような片手での略式の祈りの仕草で目の前で左から右、次に上から下と顔を

隠すかのように十字を切る。

その仕草に合わせるかのように足元の魔方陣が上へあがり、頭上の物は下がる。

二つの魔道陣が重なり、すれ違った中から現れたのは黒い殻に覆われた異形の魔王の姿。

魔道陣が身体をすべて通り過ぎたと同時に左手の爪を右から左へと薙ぎ彼を閉じ込めて

いる牢獄を打ち砕く。

砕かれ、紅い粒子となって消えていく鎖の中、魔王が降臨する。

「・・・お前に、魔王と言う名の恐怖を味あわせてやる。・・・冥土の土産にな。」

その言葉と共に、魔王ベルゼブブは歩き出す。それを怪物は得意の突進で迎え撃つ。

憤怒と暴走 前編（後書き）

・・・うう。変身シーンが難しかった。

テーマとしては魔法陣、十字、解かれた戒め、鎖と牢獄です。

咎人をテーマとして変身を考えてのですが、いかがでしょうかね？

あと・・・魔王なのにあまり魔法はつかってませんね。

仮面ライダーでもあるので、某大魔王のような不死鳥を飛ばしたり、無数の爆発する光の球を投げるなどのあまり派手なもの考え物ですし・・・。

派手な魔法を入れるべきか、それは控えるのか…意見ください！！

憤怒と暴走 中編（前書き）

・予想以上に文章量が多くなりすぎました。
文章の量が多い割に・・・こっちは展開が遅いな。
予定していたよりも話の数が増えそうです。

憤怒と暴走 中編

突進してきた牛の怪人。その突進をベルゼブブは紙一重で交わす。
「ぐるおおお!!」

それにもめげず再び突進。

紅いマフラーをはためかせながらベルゼブブは紙一重で、しかし
余裕でかわす。

何度も突進するが、ベルゼブブの身体をその角が捉えることはな
い。

そして・・・。

「・・・いい加減に止める。」

懲りずに突進してきた牛の怪物を交わしながら、左足で鋭く足を
払う。

鋭い足払いに牛は再び転倒。自身の突進の勢いのまま地面を転が
る。

「さて・・・これで。」

「ぐるあつ!!」

「む?」

起き上がった牛の怪物が剛腕を振るう。

それを片手で受け止めるベルゼブブだが、見た目以上の力に押さ
れる。

「力だけはあるようだな。」

ベルゼブブはそう言って、力比べを瞬時に止める。

押し込んだ相手の力を腕を引く事で流れを逆に寄せ、そのままあ
いての凄まじいまでの勢いと力を殺すことなく、上空へと投げ飛ば
す。

巨体が宙に舞い、そのまま地面に落下。

その衝撃に地面は陥没。牛の怪物からも息が吐き出される。

「だが、力だけでは私は倒せ・・・ん?」

地面に叩きつけられた衝撃は怪物の巨体も合わさり、かなりの物
のはずだ。

だが・・・怪物は何事も無かったかのように立ちあがる。

「・・・効いていない？」

ベルゼブブはその事に疑念を思いながら、拳を振るう。

その拳は怪物の胸部に命中。だが、怪物は微動だにしない。

「ぐるおおおお！！」

怒りにまかせて腕をふるう怪物。それをかいくぐり、頭に、腹、
腕に素早く拳を繰り出すベルゼブブ。

それでも相手にそれがきいた様子はない。

大ぶりの一撃を飛びながらかわし、怪物の頭に飛び回し蹴りをく
らわせる。

まともに命中したはずなのに、怪物はベルゼブブの方に視線を固
定したままだ。

「なっ？」

蹴りを繰り出した足を無造作につかむ怪物。ベルゼブブはそれを
察し、とっさに腕つかまれた足に力を込め、もう片方の足を振り上
げる。そしてその足を踵から怪物の腕に叩きつける。

「!？」

怪物は足を離す。痛みは感じなくても、衝撃は伝わるのだろう。
その衝撃に足を手放してしまったのだ。

そしてベルゼブブは間合いを離す。彼の傍に魔道書が現れる。

「・・・気を付けてください。あれは・・・狂戦士ハイサーカーになっています。」

狂戦士。それは怒りのあまりに正気を失い、対象が完全に破壊さ
れるまで戦う狂いし戦士のことだ。厄介なのが正気を失っているが
ゆえに、見境いがない。そして痛みも感じなくなる上に、肉体のり
ミッタ も解除されているゆえに凄まじい力を発揮するという点だ。
まさに、破壊の為の戦士。それが狂戦士。

「・・・よほど、強い憤怒をもっていたのだな。」

そんな相手を前に、哀れみの視線を向ける魔王。その視線の先で

は怒り狂う怪物の姿。

「せめて……ここで終わらせる。」

そう言つて、彼が足元に魔道陣を展開させた瞬間だった。彼の眼前にチーターの怪物が迫つてきたのだ。

展開を中断し、その爪を腕で受け止めるベルゼブブ。

「……もう一体いたのか。」

動きを止めたチーターの怪物に拳を繰り出そうとするベルゼブブ。その瞬間、チーターの怪物の姿が消え、拳が虚しく空を切る。

そして、チ タ の怪物の爪がベルゼブブを襲う。

「ぐっ?」

素早く反応しきれなかったベルゼブブ。攻撃しようにも、された瞬間にはチーターの怪物はその場を離脱している。あまりも早い動きに翻弄される。

「……いい加減に……止まれ。」

だが、ベルゼブブの左足が白い風を吹き出し、ベルゼブブの目が紅く光る。

そしてチーターの怪物が目にもとまらぬ速度で接近するのに合わせて、白い風を纏つた風を振り抜く。

「ギヤア!？」

白い風に加速され、目にも止まらぬ速度を得た回し蹴り。それをカウンター気味にくらつたチーターの怪物は後ろに吹き飛ばされる。しかし、動きを止めていたベルゼブブを襲つたのは、凄まじい突

進だった。

「ぐおっ?」

「ぐるおああああああ!!」

後ろ怪物の凄まじいまでの突進。それに跳ね飛ばされるベルゼブブ。

ビルの壁に叩きつけられ、軽くうめき声が上げながら彼は立ち上がる。

改めて見てみるとチーターの怪物と牛の怪物が迫っていた。

「・・・こいつら、同じ憤怒を持っているのか。」

パワーとタフネスに優れた牛の怪物に、スピードと柔軟性に長けたチーターの怪物。この二体が組むのは敵から組むのは最悪に近い。

・・・仕方ない。少し派手なことになるが。

ベルゼブブが戦い方を切り替えようとしたときだった。

ベルゼブブの周りに無数の魔道陣が展開。その中から無数の人の形をした異形が浮かび上がるように出てきたのだ。

なんだ・・・こいつらは？

全身を鋼の色をした細身で、なおかつ無骨な装甲服のような物で身を包んでおり、頭は同じく無骨なヘルメットとバイザーが付いていた。手にはアサルトライフルのような火器を持っている。

現れた異形達は一斉にベルゼブブに向けて引き金を引く。

銃口から吐き出される無数の弾丸。

無数の銃口から一斉に吐き出されれば、それはまさに・・・弾丸の嵐と言うべき状態。

それがベルゼブブだけでなく、周りのアスファルトやビルの壁すらも削り、土ぼこりが舞い、その姿を隠す。

土埃であらかた見えなくなったところで異形達は撃つのをやめる。そして、その瞬間に彼は動き出していた。

突然飛んできた鎖が異形の内三体を薙ぎ払い、打ち砕いたのだ。

それに気づいた異形達が再び引き金を引くが、すでに土煙の中に彼はいなかった。

すでに彼らの目の前にいたのだから。

ベルゼブブの右手の爪が青い炎を上げる。

「ハイバイブネイル・・・ブルークラッシュュ!!」

青い炎による爪の一撃は爆発を伴い異形を六体、一撃で葬る。

そして、その異形の破片を見て、彼らの正体に軽く驚きをもらす。「命を感じなかったからおかしいと思っていたが・・・機械だったのか。」

爆発とともに飛び散る機械の部品。

仲間が二回の攻撃で半数近くやられた事に疑問も恐怖も覚えずに、
淡々と引き金を引く異形の機械。

弾丸の雨をかくぐり、手にした爪で残った数体の機械の異形を
切り裂いた。

目的はあいつらを逃がす事か。してやられた。

そして、牛の怪物とチーターの怪物はその場から姿を消していた。

仕方無い。この場合は・・・ん？

ベルゼブブは立ち去ろうとしたその時だった。彼の身体をオレン
ジ色の輪が巻きつき、その動きを封じた。

「うごかないで。」

それと同時に無数のオレンジのスフィアが彼の周りを囲む。

声の主が周りの風景から浮かび上がるように現れる。オレンジ色
の髪の女性は気の強そうな視線と銃型のデバイス　クロスミラー
ジユをベルゼブブへと向けていた。

彼女の名はティアナ・ランスタ。時空管理局の執務管であった。

カウタ　はビルの屋上にたため息をつきながら、隣に現れたメキ
スを見る。

「余計な真似とは言わないで置いてやる。」

カウタ　の後ろには牛の怪物とチーターの怪物の姿。

「それは光栄。こっちとしてもスレイブの性能を試してみたかった
からな。別に礼はいらねえが・・・。」

メキスはため息をつく。スレイブ達は確かにカウタ　の作ったシ
ードを逃がすための時間稼ぎにはなった。だが・・・それだけだ。

相手が悪いと言えばそれだけだが、あまりにもあっさりとやられ
ていた。

「こりゃ・・・改良しねえといけねえな。」

「あいつはこれまでの闘いから推測するに接近戦が得意だ。接近戦
対策に盾や近接武器、それに対応するソフトを用意すべきだと思っ
ぞ。」

カウタ もなんだかんだいって、その改良点をしてあげている。
「どうも。基本装備だけでなく、設計から考えなおさねと……」

「メキスは色々と改良を検討しながらその場から姿を消す。」

「……さて。仕切り直しだな。」

カウタ が牛の怪物とチーターの怪物がいた方を見る。

そこには一人の大柄な男 ミノスと、パンクスーツを着た女性

ヘイスがいた。

男の眼には理性がなく、息が激しいがその場でじっとしている。

「ようやく五人目。まだ……まだいるわ。」

女性の方も理性こそはあるが、そこに言い知れぬ狂気がこもっている。

「今夜は一人で十分だろ？まだ……お前らの憤怒は始まったばかりだ。ゆっくりと、解放していけ。」

「ええ。そうさせてもらうわ。」

ヘイスの答えと共に、カウタ その場から去っていく。

「……私達の憤怒は……まだこれからよ。」

「ぐおおおおおおお……」

帰宅途中だったティアナは地上局員の悲鳴の混じった無線にいち早く駆けつけていた。

いや、正確にはかけつけようとして、魔王と遭遇したと言った方がいい。

バイクを静かに止め、得意の幻術にてステルス状態になり怪物達の戦いの一部始終を見ていたのだ。

牛の怪物を投げ飛ばすベルゼブブ。そこに乱入してくるチーターの怪物。

そこに乱入してきた謎のロボット軍団。

それを難なく蹴散らしたベルゼブブ。

二体の怪物が逃げていた事を確かめ、気を抜いた瞬間に、彼女は動いた。

バインドで腕と手首、腿と脛と四重のバインドをかけ、動きを完全に封じたのだ。

「あなたが・・・都市伝説で有名な魔王なのね。」

彼女自身が想像していた以上に恐ろしい姿をした異形。

「あなたが私達と同じく言葉をしゃべるのは判っているわ。だから聞きたいの。最近あちこちで事件を起こしているあの怪物は何なの？そして、あなたがその怪物と戦う理由はなんなの？」

拘束したとはいえ、相手の力がどれほどの物かまったく判らない状況で、執務管として、事件の真相に迫ろうとするティアナ。

その問いに、軽く首を横に振るベルゼブ。

「・・・・・・これは私の気まぐれから来る忠告だ。」

異形から聞こえてくる声は、人の声その物。

「シードにかかわるのは止めた方がいい。あれは人の罪の根源のよくなものだ。あれをかかわる事すなわち・・・人の深い業とかかわることになるぞ。」

「シード？あの怪物のこと？人の業って・・・。」

問い直そうとした彼女だったが、彼を縛っていたバインドがいつの間にか消えている事に気づく。

あれをどうやって？

自由を取り戻すベルゼブは言葉を続ける。

「人の業。すなわち、神の定めし七つの大罪。あれは・・・その中の憤怒。」

拘束を解いたベルゼブはティアナの方へ足を一步踏み出す。

周りのスフィアなど全く気にする様子も無い。

「本来なら・・・この事を忘れてもらうはずだったがこちらの決断が一步遅れたか。」

ベルゼブの姿が蜃気楼のようにおぼろに消えていく。

「えっ？」

「先ほどは見事だった。気を抜いていたとはいえ、拘束されるまで気付かなかつたぞ。先ほどの言葉はその研ぎ澄まされた幻術の冴えに対するこちらからの返礼。受け取るがいい。」

そんな言葉を残し、ベルゼブブは姿を消す。

まさか幻影！？

あちこちを見回すが、音一つすら立っていない。

「・・・サーチも無駄ね。」

クロスミラーージュによるエリアサーチにも引つかからない。

「・・・ふう。仕方ないか・・・。」

ベルゼブブが姿を消すとともに、空から航空魔道士。道からパトカーがかけつけていた。

「報告は以上です。」

二時間後。

ティアナは地上本部で、先ほどの事件について彼女が魔王と遭遇した時の事を話していた。

「・・・七つの大罪・・・その中の憤怒ねえ。」

話を聞いて頷くのははやともう一人、フェイト・T・ハラオウン執務管だった。

「魔王も・・・案外おしゃべりやな。」

「・・・まあ、私の拘束した方法に深く感心したからです。幻術だと見破った時点で今度は同じ手がきくとは思えませんがね。」

ティアナは対峙した相手の実力の底知れなさに軽く身震いしていた。

今にして思えば、拘束されていたのにもかかわらず動揺しなかったのは置かれた状況にたいする自身の実力をよく判っていたからだろう。

大した脅威にならない。そのように魔王は判断したのだ。

「・・・でも、憤怒の怪物というその忠告、信憑性あるかもしれない。」

「フェイトはそう言いながら、ある映像を出す。そこには事件の被害者の写真。」

「襲われた車なんだけど・・・地上局員達が追っていた違法改造された車だったの。乗っていたのは、暴走族グループ・マッドマツハズ。このミッドでも五本の指に入るほどの巨大なギャンググループで、犯罪組織との関係も噂されています。」

「治安の悪化が問題となっているミッドチルダ。その一因としてこのギャングと犯罪組織が手を結び、抗争などが凶悪化しているというものもある。」

「そして、その中の幹部の内、四人が昨日までに何者かの襲撃によって殺害されています。」

「現れるのは殺害された四人と、その現場の映像。」

「いずれも車ごと真正面から押しつぶす、または鋭い爪のような物で身体を貫かれたり、切り裂かれたりすると言う手段で殺されている。」

「そして、目撃者は誰もいない。」

「その理由は簡単だった。」

「殺害現場にいた四人と一緒にいた仲間、通行人すらも一緒に殺されているのだ。」

「殺された人間は軽く二十は超えている。」

「・・・これは・・・むごいですね。」

「・・・まっつてえな。この殺され方は・・・。」

「殺害方法を見たはやてがその殺され方と今回の事件との共通点を見る。」

「ええ。今鑑識に診てもらっていますが、おそらく・・・。」

「この惨殺の犯人。それはティアナが目撃したという二体の怪物の可能性が高い。」

「ティアナがベルゼブブと戦っている二体の怪物の映像を出す。」

「今回の事件も、109隊がマッドマツハズの幹部一人を逮捕し

ようと追いかけていた矢先だったそうです。」

「逮捕？」

「ええ。一か月前、彼らは一人の少女を殺しています。」

彼女は憤怒というキーワードから、事件の真相にたどり着こうとしていた。

憤怒と暴走 中編（後書き）

むう。今回は超シリアス。そして・・・管理局が警察役になってる！！

まるでアギトやクウガのような展開だのう。

個人的にはコメディ好きですが、なかなか書けない！！

テーマが重すぎたのかもしれない。

まあ・・・この事件の後に、ほのぼのとした日常を書くとしまじょうか。

あと、中編、後編にする予定でしたが、あまりにも増えてしまったので、後編から終結編へと一話増量します。

もっとコンパクトに、簡潔にしたほうがいいのかもしい。

意見があつたら、どんどん書いてください。

憤怒と暴走 後編（前書き）

ハイペースで書いてます!!

アイデアがわくわく。

書きたい話などがたくさんあるおかげですかね。

さて…今回も皆さんに楽しんでいただければ幸いです。

憤怒と暴走 後編

彼女は昼の街を歩いていた。

「・・・どこにいるの・・・。」

彼女の心を染めているのは憎しみと憤怒。

そしてその対象である人間達を探していた。

彼女の脳裏に浮かぶのは変わり果てた彼女の妹の姿。

それをやった犯人が誰か判っていた

でも・・・管理局はそれを逮捕することができなかったのだ。

彼女達は必死に彼らに詰め寄った。

愛しい妹をそんな目にあわせた奴らがのうのうとしている。

それが許せなかった。

でも・・・彼らは動かなかった。

あんな事をしでかした奴らは我がもの顔で暴走している。

それに・・・彼女達は憤怒した。

その憤怒が彼女に歩く力を与えていた。まるでろうそくのように命を憤怒の炎で燃やして力に変えている。

「どこに。」

彼女　ヘイズは街をさまよう。

獲物を狙う猫のような危険な目をサングラスで隠しながら。

そんな屍のように歩く彼女が誰かとぶつかり、彼女は倒れる。

「すつ・・・すみません。」

ぶつかつた男は急いで彼女に駆け寄り、手を伸ばす。だが、彼女はその手を払い、何事も無かつたかのように立ちあがり、歩き出す。

「・・・あつ・・・あの？」

そんな彼女を見て、慌てて彼は追いかける。

「大丈夫・・・ですか？」

そして、男は話を駆ける。

「・・・・・・・・。」

「？怪我とかは？」

「何にか変な物でも？」

「・・・・・・・・。」

「ああ。そうか。こつちを無視しているのか。でもそれなら反応が返ってこないのは？」

「・・・・・・・・。」

「見えてますか？私の事見えてますか??」

「・・・・・・・・いつ・・・・・・・・。」

「あっ・・・やつと反応。」

「いい加減にせんかああああああああああ！！！」

男のしつこさにヘイズが切れる。

「いい加減もうしつこくしつこく・・・・・・・・。」

そんなヘイズの反応を・・・。

「すみませんでした。」

「いまさら謝って・・・・・・・・。」

「いや、今のと先ほどの含めてです。」

男の無茶苦茶な論理に頭を痛めるヘイズ。

「・・・・・・・・大体・・・・・・・・。」

そう言ったヘイズの言葉が止まったのはお腹の虫が鳴った身体。

そう言えば・・・最近・・・何も食べていない・・・。

それを自覚した瞬間、先ほどまで恐ろしいまでに浮かび上がっていた力が抜け、彼女はよろめき倒れそうになる、

そして、それをとっさに支えた男が笑顔で話しかける。

「ぶっかつたお詫びと、失礼な振る舞いのお詫びを兼ねて・・・一緒にお昼でもどうですか？もちろん、こつちが奢りますので。」

そうやってきたのは銀色の長い髪にメガネをかけた男。

そしてヘイズはあいにく持ち合わせはなかった。

「あんだ・・・名前は？」

「バ ハルトです。できればそつちも名前を・・・。」
柔らかな笑みでの彼の問いに、ヘイズはぶつきらばつに自分の名前を言った。

「・・・カオスだ。」

女性 ヘイズを食事に誘ったバ ハルトは思わずそつつぶやいてしまった。

彼女はまるでむさぼるように食事と喰い散らかしている。

無我夢中で食べ続ける彼女はよほど飢えていたのだろう。

あまりにがさつですごい勢いの食べっぷりに周りの人達も引いている。

すでに、食器の数は十を超えている。

2人がいるのはバーハルトの行きつけの店。

古く小さな食堂ではあるが、彼はそこが大変お気に入りだった。

「はしたないくらいに・・・食べるねえ？」

そう声をかけたバーハルトに対して・・・ヘイズは食を止めて・・・きつい視線を送る。

「・・・はしたなくなかったら・・・そんなに食べていいの？」

彼女の視線の先には床に綺麗に重ねられた食器。彼女が食べた量の三倍以上はある。

それを食べた人物は・・・言わなくてもいいだろう。

「まあ・・・これでもまだ八分目にもなっていない。」

食べた本人バ ハルトは平然と言つてのける。

「・・・もう何も突つ込まないわ。」

ちなみに彼女が出された食事にがつついているのを確認してから、彼は食事を始めていた。

横目で見ると綺麗に食べているように見える。そのはずなのだが・・・いざ蓋を開けてみると恐ろしい量を食べているのだ。

どのような食事の取り方をしているのか全くの不明だった。

「・・・まあ・・・ごちそうさま。」

食事をいただき、少し顔色のよくなった彼女を見て微笑むバルト。

この食堂がお気に入りなのは、おいしいのはもちろん、値段も手ごろなうえに量も多いので、それほど財布が痛まないのだ。

「・・・あんた結構高給なのね。」

「そうなのかな？」

食堂の人から来たらお得様なのは違いないのだが・・・それでも彼が来ると忙しい。それ故に彼は来ると決めた前日に時間も指定した上で電話しているのだ。

そうすれば、仕入れも十分に行える。

大食いを超え、巷の飲食街からは「暴食の君」と呼ばれる猛者になっっているのだが、その気配りはかなり細やかなので、飲食街からも大切なお得意様となって人気なのだ。

会計を済ませて店を出る二人。

その金額にヘイズが顔をひきつらせていたのは仕方のないことだ。

「ありがとう。またこのお返しはするわ。」

そう言いながら彼を別れようとするヘイズ。

そんな彼女の背に向けて彼は言った。

「まだ・・・間に合うよ。」

その言葉に、ヘイズは立ち止まってしまった。

「間にあうって・・・何が？」

少し固くなってしまった声。あまりの固さに声が震えてしまっている。

「それはあなた自身が良く判っている事だよ。」

話しかけてきた時と同じ柔らかい笑みのバルト。

だが、その言葉の重みは段違いだった。

「まだ・・・人であるあなたなら、まだ間に合う。」

「・・・」

「じゃあ・・・また会おう。」

そう言っただけでハルトが去ろうとした。

今度はその背中に向けて彼女は問う。

「間にあうって・・・それっていつまで・・・？」

その言葉に彼は振り向きもせずに応える。

「あなたが・・・人である限り。後悔して、苦しむ事が出来る理性と心を持っている限りいくらでもやり直せるよ。」

その言葉を最後に彼は人ごみの中に姿を消していく。

「・・・あいつ・・・もしかして私のことを？」

彼女の問いに応える者はその場にはもう誰もいなかった。

「・・・行こうか。」

そう言っただけでその場から去ろうとした彼女。

その彼女の目の前に柄の悪い男がいた。

「あんた・・・ヘイズだな？」

「だとしたら？」

彼女の後ろに彼の仲間と思われる男が二人。ヨコからも二人。

彼女は五人の男に囲まれていた。

港の打ち捨てられた倉庫。管理者のいなくなったそこはギャング達の格好の隠れ家になっていた。

そして、そのギャング達にマッドマツハズも例外ではなかった。

そこに五十人以上ものメンバーが集まっている。

「・・・やべえよ。」

集まっていたメンバーの一人が身体を震わせていた。

彼らの仲間、それもリーダー格である幹部とその仲間が無残に殺されているのだ。

その動揺は他の皆にも伝わっていく。

「びびってんじゃねえよ。」

そのボスである白髪の男　　ガイが皆を叱咤する。

歳は二十前後。黒い革のジャケットとスラリとしながらも蛇や豹を思わせる筋肉質の身体。顔に小さな裂傷が付いているのが何よりの特徴だろう。

「あの事件の呪いだとぬかしている連中もいるようだな？」

彼の一睨みに周りのメンバーも静まりかえる。

「・・・あんな物はまやかした。今、こっちもコネを使ってこんなふざけた事をしている野郎どもを探している。大体・・・犯人の目星も付いているからな。そいつらを捕まえたら・・・。」

そこまで言って彼が何をしたいのかよく判っていた。

「お前らはせいぜい、復讐されないように気をつけておけ。」

気だるさまで感じるそのふてふてしい態度。

「はい！！」

そこまで言って彼らのアジトに入ってくる者がいた。

「・・・あん？誰だあんた？」

入ってくるのはオレンジ色の髪をした気の強そうな女性　　ティ

アナ。

その周りには二十名程の武装局員もいる。

「・・・管理局か。」

「ええ。私の名前はティアナ・ランスタ。執務管よ。」

その名を来たガイがおかしそうに声をあげて笑う。

「おやおや。執務管様がわざわざこっちに来るなんて。でかい組織にしたとは思っていたが、ココまでとはな。」

「・・・アリガ・コースネット。」

ティアナの口から出た名前にメンバーの中の数人が動揺する。

「この名前に聞き覚え・・・あるわよね？ガイ・スコ　ディオーン。」

「・・・さてな。」

ガイはその名前に特別な因縁がないようにふるまう。

それでも、ティアナは続ける。

「一か月前。彼女の死体が発見されたわ。無茶苦茶に凌辱された上

に、縄にぐるぐるに巻かれて引きずりまわされたという無残な姿でね。」

その声に微かだが怒りが含まれている。

「ほう。犯人は見つかったのか？」

「・・・・・・・・・・。」

悔しげにティアナはガイを睨みつける。

「だよな。このままだと、迷宮入りになってしまつよなあ。」

ガイは不敵な笑みでティアナを睨みつける。

絶対逮捕されないって自信あるみたいね。

ガイは管理局の上層部とコネがある。そのためにこの事件の首謀者だと思われても一執務管では捜査妨害などを受け、ヘタに手を出せない状態にある。

理不尽だと叫びたいところを堪え、彼女は要件を手短に伝える。

「私がここに来たのは張り込みのためよ。」

「張り込みだあ？」

「あなたを狙う犯人を捕まえるために。」

その話を聞いたガイはまた声をあげて笑った。

「がはははあはっ、それなら心配に及ばねえよ。ふざけた事をしてる相手に心当たりがあるんでな。こつちもメンバーの何人をそこに送っている。しかし・・。」

ガイはティアナが連れてきた武装局員の数に眉をひそめる。

「張り込みにしては・・。やけに大人数だな。」

「あなたの保護も兼ねているから。」

これでも不十分よとティアナが不満を漏らす。

「保護だ？なんで俺が保護されないと・・・・・・・・。」

ガイがそこまで言っ言葉を止めたのには理由があった。

「やっと・・見つけたわ。」

歩いてきたのはヘイズ・コースネット。

その後ろには巨大な袋を担いだミノス・コースネットがいた。

「……嫌な予感がしていた。」

はい。あなたの虫の知らせは……一種の予知に近いくらいにあたりますから。

黒いローブを纏った男が闇の街を走る。

ビルの上から上へ飛び越え、多少の差など飛び超えていた。

希少技能として、登録されてもいいのではないのでしょうか？

「シャレにならないぞ。」

その姿は闇に紛れ、誰も見えない。

「空を飛べるのならもつと速いのだが……間にあつか……。」

彼の向う先は……港であった。

「さがしていた野郎どもがやってくるとはいい度胸だな。」

ガイの合図で、周りのメンバーがパイプや魔法、違法とされる拳銃などを構える。

その中で、ティアナまでもがデバイスを構えていた。

「……なんで手が血まみれなの？」

ヘイズの手が血で汚れていたのだ。怪我をしている様子はない。

それに異質な物を敏感に察したのだ。

「簡単よ。」

そう言った彼女にメンバーの一人が鉄パイプで殴りかかる。

「ちよっ？」

鉄パイプは彼女の頭を寸分たがわず捉えた。

あたりに響く鈍い音。

「……もう、手遅れなのかもしれないわね。」

しかし、帰ってきたのは悲しみの声。

鉄パイプをまともに頭に受けて……彼女は無傷だったのだ。防御系の魔法を一切使っていないのにもかかわらず。

「ぐおおおおおおおおおおお！！！」

ミノスが巨大な袋を放り投げ、雄叫びをあげる。

無造作に投げられた袋から現れたのは……五人の死体だった。

「なっ……に？」

それはガイが報復として送ったメンバーの中でも手だれの五人。

「ミノス……もう我慢の限界なのね。いいわ。」

その言葉と共に、ミノスは姿を変える。

牛の怪物へと。

「なっ……なななな……。」

「人が……怪物に！？くっ……。」

動揺する中、ティアナは己の予想が悪い意味であたっていた事に辟易していた。

ミノスへ一斉の攻撃を開始する皆。

だが……その程度でミノスは怯みもしない。

「ぐおおおおおおお！！！」

ミノスが駆けだす。

それが……虐殺の合図になってしまった。武装局員とメンバーがそろって対抗するにも、彼を倒せない。それどころか次々と。

「……なんで……怒りがわいてこないのかしらね。」

一方、ヘイズの方は怪物の物へと変化した手を見て悲しみを浮かべていた。

目の前でミノスが起こす暴力。

それを見て喜悦の感情が出ない。

しかし、身体は反応する。

クロスミラージュをダガ モードにしたティアナと対峙したからだ。

あの人……管理局員？しかも……執務官。

ティアナの胸に光るバッチそれは彼女がかつて訴えたときに対応した人と同じバッチを左胸に着けていたのだ。

「……………」

無言でヘイズも自身の姿をチーターの怪物へと変える。

飛んでくる無数のスフィアを避け、あるいは爪で切り落とし、瞬時にティアナに肉薄し、その爪で彼女を捉える。

だが・・・その爪は見事な空振り。彼女の姿が消えたのだ。

「・・・嗅覚で捉えるタイプではなくてよかったわ。」

姿を現すティアナ。さっきのは幻影。つまりおとりだったのだ。

「甘いわ。」

しかし、突き付けられた魔力刃をヘイズは素手でつかんで封じる。

「えっ？」

力を込めてもびくともしない。

「くっ・・・くっ・・・。」

「・・・なんで。」

焦るティアナの耳にヘイズの声が届く。

「なんで・・・あいつを逮捕してくれなかったの？」

ヘイズは涙を流していた。流しながら・・・人の姿にもどっていった。

「なんで・・・あいつは私達の妹を殺しておいて・・・酷い事をして・

・平然とのさばっているのよ!!」

その言葉はまさに被害者の叫び。

「・・・ごめんなさい。」

ティアナはその叫びを・・・ただ受けることしかできなかった。

「やはり・・・あなたがこの事件の犯人だったのですね。」

危機的状況、ヘイズの爪がその気になれば一瞬でティアナを切り

裂けると言う中だ。

ティアナはヘイズと向き合っていた。

「・・・ごめんなさい。私達の力が・・・及ばなくて・・・」

「いまさら謝られてももう・・・遅いわ。私・・・もう・・・化け物になつてしまったから。」

悲しそうに変身させた自分の爪を見るヘイズ。それはもう人からかけ離れている。

「もう・・・遅いのよ!!」

爪を振るうヘイズ。

それは吸い込まれるようにティアナの身体を切り裂くはずだった。でも、爪は彼女の身体に触れる直前で止まっていた。

「・・・なんで・・・よ。」

真つ直ぐにヘイズと向き合うティアナ。

その眼はとても澄んでいた。真つ直ぐ己のふがいなさを受け止めていた。

そして・・・涙を流していた。

「なんで・・・そんなに真つ直ぐに私を見れるのよ!!」

泣き崩れるヘイズ。

そんな彼女にティアナはクロスミラージユを引き、ティアナは言いきった。

「まだ・・・手遅れじゃない!」

その言葉はまっすぐだった。

真つ直ぐ過ぎてまぶしいくらいだった。

「だって・・・あなた・・・泣いているじゃない。涙を流せるじゃない!心が痛いつて叫べるじゃない!!苦しむことができるじゃない!」

その言葉に顔を上げるヘイズ。それは涙でぐちゃぐちゃになったとても人間らしい彼女の素顔がある。

そんな彼女に向けて手を差し伸べるティアナ。

その手を取ろうとしたヘイズ。

だが、ヘイズの表情がすぐに驚愕に彩られる。

そして、いきなり彼女を突き飛ばしたのだ。

「えっ?」

驚くティアナの耳に入ってくるのは風を切る音。

そして・・・何か柔らかい物が貫かれたような嫌な破裂音。

「がっ・・・はっ・・・。」

起き上がったティアナが目にしたのは大人の腕ほどの太さがある

巨大なモリのような物で身体を貫かれ、そのまま壁に縫い付けられたヘイズの姿だった。

「……さすがに効いたか。」

してやったりの表情をしているのはガイ。

その隣には巨大なモリを発射する機械を持つロボットのような物がいた。

「自衛のためにアーマードってやつを買って正解だったぜ。」

「あんた……。」

「ぐうぐうぐうぐう……。」

腹を貫かれながらも必死にもがくヘイズ。

「まだ死んでなかったのかよ化け物。」

その言葉と共に再び放たれるモリ。

それが彼女の右胸を貫く。

「がっ……あああああ……。」

それを見て……激昂したのが、ティアナだった。

三発目を放とうとしたガイの手に向けてスフィアを放ったのだ。

「……いい加減にしなさい！」

「なんだ？化け物をかばうっていうのか？」

ヘイズを化け物と言いきった彼に再び魔法を放とうとして、ティ

アナは二人の男に背後から捕まった。

「なっ……。」

「いいから大人しくしとけ。」

そう言っただけになったヘイズを見る。

口から血を吐き出し、傷口からおびただし血を流しながらも、ガイを睨みつける。

一人の人として強い光が宿った目。

「気に食わない目だ。失せろ化け物。」

彼の合図と共に放たれる巨大なモリ。

それが、彼女の左胸。つまり心臓を貫く。

派手な血しぶきが吹きあがる。

そして・・・それで彼女は力なく沈黙してしまった。

「流石に死んでくれたか。安心安心。」

そしてガイの視線はティアナに向けられる。

「さて・・・あなたをどうするか・・・このまま嗅ぎまわられるのも困るしな・・・。」

ガイが眼ざわりと判断したティアナをどうしようか考える。

怪物騒ぎはごまかせねえ。だが、これを逆に利用して始末するのが常套・・・。

ロクでもない事を考えていると思えばティアナは密かにスフィアを出して、拘束している二人を倒そうとしていた。

「ヘイズズズズズズウウウツツ!!」

そんな時、雄叫びをあげながら壁をぶち破って現れるミノス。

理性を無くしたはずの彼の眼に映ったのは三本のモリによって身体を貫かれ、壁に力なく縫い付けられているヘイズの姿。

それが何を意味しているのか・・・彼は判ってしまった。

「うおおおおおおおおおおお!!」

判ってしまったから・・・最後の一線を越えてしまった。

「やかましい。あいつも片づける!!」

ミノスに向かってモリを数発連続で放つ。

そのモリは怪物と化したミノスに刺さる。だが・・・刺さっただけだった。

「なっ?」

「うおおおおおおおおお!!」

雄叫びと共に全身に刺さったモリが飛び抜ける。

そして怪物と化したミノスの身体がさらに変わる。

身体の筋肉が膨張、そして黒く変色するとともに固くなっていく。眼は紅い光を放ち角も大きさを増している。

「やべえ。」

とっさにその場から逃げるガイ。

そのあとを追うミノスに向けて放たれるモリ。

しかし、そのモリはミノスに当たっては弾かれる。そのままその突進でモリを放っているアーマードを跳ね飛ばす。跳ね飛ばされたアーマードはそのまま動かなくなる。

彼の怒り狂った眼は逃げるガイに向けられていた。

「まずい。あんなのが街に来たら・・・。」

逃げまどうマッドマツハズをよそにティアナはミノスを追う。

彼の暴走を止めるために。

壁に縫い付けられたままのヘイズを見て・・・ごめんと一言つぶやきながら。

誰もいなくなった部屋。

ヘイズはまだ意識があった。

でも、もう長くはない。そんな自覚もあつたのだ。

これも・・・天罰なのかな。

地面に横たわる事も無くそのまま消えようとしていた彼女の命。しかし、彼女の身体が独りでに浮く。

あつ・・・えつ？

すでに痛みや感覚すらも失った身体。視界だけが彼女の身体が地面に横たわった事を教えてくれる。

「・・・遅かったか・・・。」

彼女の視界に映つたのは黒いローブをまとった見知った男。

「あんだ・・・なんでここにいるの？」

「虫の知らせってやつだ。でも・・・間に合わない事も多い。」

ローブをとって、男は素顔を見せた。

銀色の髪に黒い枝のような眉毛をしたメガネの男　　バ　ハルト
だつた。

彼は優しい笑みで今際のヘイズを見ていた。

「・・・もう・・・手遅れだった。私は・・・化け物。」

「そうなのか？俺にはそうは見えない。」

部屋の状況を見る。

大きな血を流しているのは彼女だけだったのだ。

「遅れてしまったけど・・・手遅れってわけではなかったよ。」

「そう・・・なの？」

「君は怪物じゃない。憎しみと怒りに支配された怪物じゃない。君は・・・人間だ。」

その言葉が彼女の心の中に入り込んでいく。乾いて干からびてひび割れた心に降り注ぐ恵みの雨のごとく、彼女の心に沁み込み、潤していく。

「ありが・・・とう。ありが・・・とう。」

その潤いは涙となって彼女の頬を伝う。

そんな二人のやりとりは無粋な真似をしようとする者がいた。

先ほどミノスに弾き飛ばされたアーマードだ。

壊れているらしく、あちこち破損しながらモリを二人に向けていたのだ。

それを見たヘイズは表情を懸命に危険を訴えようとする。力が全く入らない、すでに命尽きかけている身体で助けようとする。

でも、その必要はなかった。

バ ハルトが右腕を振るうと同時に、蒼い炎に包まれた鎖が延ばされそのままアーマードを打ちすえたのだ。

凄まじい衝撃にアーマードは完全に壊れてしまい、爆発する。

ヘイズはバ ハルトの出した鎖を見て軽く驚く。

そして・・・同時に納得もする。

「そうか・・・あなたが魔王だったんだ・・・。」
すべて納得した。

彼はすべて知っていた。彼女が怪物で、誰を狙っていたというのもすべて。

その上で食事に誘って警告してくれたのだ。

「・・・食事はおいしかったか。」

「ええ。眼がさめるくらいにおいしかったわ。曇っていた心が綺麗

に晴れるくらいに。」

「それはよかった。」

そう言つて、彼は表情を引き締める。

「あなたの弟は私が責任を持つて終わらせる。もう・・・それしか。」
そんな彼にヘイズは微笑みと共に軽く首を横に振るう。

「わかった。だから・・・安心して眠つてくれ。」

「ええ・・・。ゆっくり・・・寝させてもらうわ。ゆっくり・・・と。」

そう言つて・・・彼女は眼を閉じる。安らかな笑みで。

そんな彼女を悲しそうな笑みで見送り彼は立ち上がる。

彼の腰に出現するベルト。

そして・・・上下に魔道陣が展開した。

「・・・変身。」

ベルトの封印が解け、魔道陣が紅い鎖につながれ引き寄せられる。

中から現れるのは黒の異形の魔王ベルゼブブ。

十字を切ると同時に、彼の身体を囲っていた牢獄は破壊される。

彼の赤い複眼はヘイズを見ていた。

「せめて・・・人として安らかに眠つてくれ。怪物の相手は・・・怪物が引き受ける。」

異形の魔王が今・・・動き出す。

憤怒と暴走 後編（後書き）

さて・・・予想通りだと思いますがようやくライダーの正体を公開です。

プロローグに当たること話がかかなり長くなってしまったのが反省です。

次でこの事件は幕を閉じます。

この事件のテーマにもあるようにこの話と通した敵やライダーのテーマは二つ。一つは異形の怪物となった身と心、または魂。もうひとつが・・・罪です。

かなり重いテーマです。

今回は事件の悲惨さも相まって・・・結構シリアスになってしまいました。

ですが・・・もう少しお付き合いください。

終わった後に少しはコミカルな日常編を挟もうと思いますので。

あと、執務官ツて弁護士や検察のようなバッチをつけているものなんでしょうか？もしそうでしたら・・・教えてください。修正をかけますので。

憤怒と暴走 完結編（前書き）

・・・勢いで書きました。

悲しい事件・・・ここにて完結させようと思います。

憤怒と暴走 完結編

ガイは車で逃走していた。

「くっ・・・あんな化け物・・・相手にしてられるか!!」

その速度は決して遅くない。

そのはずなのだが・・・。

「ぐがおおおおおおおお!!」

怪物と化したミノスの突進の速度はその車に迫る勢いだっただ。

怪物の怒りは完全にガイに向けられている。

邪魔する者を全部吹き飛ばしながら、ガイを追っている。

それがごみ箱だけでなく、車すらも跳ね飛ばして・・・。

そのミノスの後を追っているのはティアナ。

愛用のバイクにまたがり、ミノスを追っていた。

「・・・なんて速さ。これじゃあ・・・まずい。」

ミノスの突進はさながら道で装甲列車が暴走しているようなものだった。

彼女の後を追って、武装隊員も空を飛んでいる。

その数が半分以上に減っている。

すみません・・・負傷者がたくさんいます。

マッドマツハズのアジトでの戦闘で、メンバーの多数をミノスは殺害している。

あらかじめミノスと言う怪物の特徴を聞き、対応を考えていた武装局員達も命までは落としていないが、負傷した者が多数出てしまったのだ。

しかたないわよ。この場合は生きているだけでもうけ物と考えるべきだわ。アジトの現場引き継ぎを誰かに・・・

緊急事態!!

ティアナ達の念話に割り込むのはアジトに残った武装局員の姿。

第三の怪物がアジトに出現。そっちに向かって飛んで行き

ました。

第三の怪物。その存在に心当たりあるのかティアナがその特徴を問う。

はい……。報告にあつた黒い蟲のような怪物。通称 魔王と呼ばれている。

そこまで、ティアナは気付いた。

すべてを薙ぎ払い暴走を続けるミノスの背中に向けて上空から突進してくる黒い影。

「嘘……。」

そして、その影がミノスの背中を踏みつけるように蹴りを放つ。

「ぐおおお！？」

突進のために前かがみになっていたミノスはその勢いそのままのめりに転ぶ。そして突進の勢いそのままに道路を激しく削りながら滑っていく。そのミノスの背中の上には蹴りを放った黒い影が乗っており、さながらスケートボードのようにその勢いを殺すようにミノスを横滑りにする。

そして、止まる直前に両手から鎖を出し、それを左右の壁に打ち付け、軽く上に飛んでミノスの上から降りる。

「……派手な……登場ね。」

あまりに派手な登場に、ティアナ達は立ち止まって啞然となる。

「我は暴食を司る者。」

鎖をしまいながら黒き影はミノスを見据えていた。

「我は冥府を司る者」

ミノスは怒りと共に起き上がる。

「我喰らうはこの世の毒。身勝手な欲と言う名の愚かしくも浅ましい物にまみれた罪と穢れ。そして……今宵は止まらぬ憤怒をいただくでしょう。」

ミノスは激しい怒りを向け、赤く光っている瞳で……涙が光っていた。

そして黒い影は……その怒りを真っ直ぐに受け止めていた。

「今宵の毒は……かなり苦い味がするようだな。」

黒い影の言葉に皆は聞き入っていた。

「我は……魔王……ベブゼブブ。お前の憤怒を喰らう者。魔王の名乗り。」

「さあ……お前に魔王と言う名の恐怖を味あわせてやる。」

それ共に発せられる威圧にミノスは少したじろぐ。

「冥土の……土産にな。」

そう言って、ミノスにゆっくりと迫るベブゼブブ。

それを見てミノスは突進を繰り返す。

前回よりもさらに威力とスピードが増した突進。

「封を解くは蒼き魔炎の斧。」

それを迎え撃つのは魔王の右拳。

彼の右手の鎖が解き放たれ、右拳が斧となる。

蒼い炎を纏った右拳の斧を突進に合わせてミノスに叩き込む。

「ぐるおっ!？」

蒼い爆発共に吹き飛ばされるミノス。斧の一撃に、胸のところに大きな裂傷ができ、そこから血が噴き出している。

「流石にこれくらいでは倒れないか。」

ミノスが怒りと共に大地を踏む。

それと共に大地に亀裂を走らせながら衝撃が走ってきた。

「……深紅の血盾。」

その衝撃を受けとめたのは左手に出現した赤い血のような巨大な盾。

その盾に向かって殴りかかるミノス。

「砕。」

しかし、砕けた盾がまるでガラスのように鋭い破片となってミノスに襲いかかる。

「があああああああ!」

全身を切り刻まれながらも、ミノスは止まらない。

「……白き衝撃。」

その彼の足を止めるのは白い暴風のような衝撃。

立ち止まった彼に左拳を赤く染めながら素早く迫るベルゼブブ。

ミノスもそれに応じて殴りかかるが、その姿が一瞬にして消える。素早く上に飛んだベルゼブブは左拳を繰り出し、ミノスをよるめかせ、右、左とに二連続の飛び回し蹴りを叩き込む。

よるよると後退するミノス。その間に右手には蒼い炎が集束。

「蒼い砲牙。」

そこに追い打ちとして、素早く接近右手の蒼い炎を開放、斜め上気味に砲撃として放つ。

ミノスを宙に浮かせながらその巨体を全部飲み込む程の太さの蒼い炎の砲撃。

射程その物は短くしてあるのか、百メートルまでで炎が止まる。

砲撃は五秒ほどで終わり、打ち上げられたミノスが地面に落ちる。

「ぐっ……があああああああああ……。」

全身を焦がしながらも立ち上がるうとするミノス。肉体の破損が大きく、動きがぎこちないはずなのだが、その怒りはまだ……おさまらない。

「……そろそろ……終焉の時間だ。」

ベルゼブブの言葉と共に彼の右足から黒い電撃が走る。

「せめてもの手向けだ。本気の一撃で終わらせる。」

彼の言葉と共にミノスの身体を地面から出た無数の鎖が拘束する。

「ぐあああああああ！！」

それを無理やり引きちぎろうとするミノス。あまりの力に鎖が一本ちぎれてしまう。

「戒めを解くは黒き稲妻の槌。」

ベルゼブブの右足の拘束が解け、左右にスライドする。

スライドした中から現れるのは黒い稲妻を放つ三つの宝玉。

彼の足元には赤ではなく黒い魔道陣が現れる。

「我が右足に宿る鎚はすべてを打ち砕く物。」

その言葉と共にミノスの上空に現れる黒い魔道陣。

同時にミノスの身体を重圧が襲いかかる。

「うがあああああああ！!?」

その重さにミノスの身体が道路に陥没、結果として大地に縫い付けられる格好になる。

「無限に増す重さと、その硬さ、蝕む黒き雷にてすべてを打ち砕く。魔神殺しの鉄鎚。」

動きを封じられたミノス。そのミノスに向かって魔王は言った。

「その一撃を・・・受けるがいい。」

魔王はマフラーを蟲の羽に変えて飛ぶ。

そして・・・黒い電撃に覆われ、魔神殺しの鎚とかした右足を軸にして宙を舞う。

赤く染まった月を背に、重さを増して右足から突撃していく魔王。

その一撃はミノスに重圧をかけていた黒い魔道陣を貫き、ミノスの身体を地面に縫い付け、その衝撃は地面にも伝わり、その余波で地面が大きく抉れた。

「が・・・はっ・・・！！?」

地面にできた巨大なクレーター。その大きさは四車線の道路すべてに広がり、一番深い所で巨体を誇るミノスが完全に隠れるほどの深さがある。

そして、破壊されたミノス身体に現れる黒い魔道陣。

ベルゼブブは後ろに飛び退き、クレーターの外からミノスを見据える。

「ミヨツルミル・クラッシュ。これがお前を葬った技の名前だ。我が名と共に覚えておけ。」

怒りがまだ冷めないのか、声も出せぬほどに破壊された身体で涙を流しながら懸命にもがくミノス。だが・黒い魔道陣から上がる稲妻がミノスの身体を蝕み、最後の時を告げる。

その姿に言葉を少し詰まらせながら、魔王は告げる。最後の言葉を。

「もう・いい。お前の憤怒はもう終わりだ。後はこっちが引き受ける。だから・無駄なあがきなどせず・・・もう・眠れ・」

魔王が背を向けると同時に、ミノスの身体が爆発。その爆発はクレターの全てを覆い隠す程の巨大な物だった。

あまりに圧倒的で・そして、悲しい戦いだった。

ティアナがベルゼブブの戦いを見て思った素直な感想がそれだ。

「・・・」

黙ってたたずむベルゼブブ。その体がある方を見る。

「・・・助かったぜ。」

そこには爆発を見て引き返してきたガイの姿があった。

今回の事件の発端となった人物。その人間がのうのうとしている。ティアナがそれに憤りを隠せない。

だが、それはどうも魔王もおなじようだった。

ガイに向かって歩き出すベルゼブブ。

「えっ？なっ・・・なんだこいつ？」

その眼は・・・紅く光っていた。

まさか・・・怒っている？

全身から凄まじい怒気を隠そうともせずあらわにしているベルゼブブ。

その怒気にティアナだけでなく、周りの人間全てが身体を震わせていた。

慌てて逃げようとするガイ。

だが、その車は動かない。

「くっ・・・鎖？」

地面から現れた鎖がガイの車を拘束し、動けないようにしていたのだ。

車が駄目だと悟り、走って逃げようとするガイ。

その体をベルゼブブの右指から飛ばした鎖が捉えた。

「えっ・・・ちよっ・・・うああああああ。」

ベルゼブブの方へと引き寄せられるガイ。

そして、凄まじい怒気を発しているベルゼブブとガイが対峙する事になった。

「ガイと言つた名だったな。あいつ　ミノスの最後を・・・お前は

見たか？」

「・・・・・・。」

「人は・・・誰しもが罪を犯す。大なり小なりな。それは・・・生きている上で仕方のない事だ。心で思ってしまう事は仕方ない事同じくな。」

ベルゼブブの手がガイの身体をつかみその身を軽々と持ち上げる。

「だが・・・お前がしたのは・・・大罪以上の罪。己の欲のままに奪い、壊し、心を、絆を踏みにじつた。許しがたい罪を・・・お前は悦楽として行った。今回の事件はお前の自業自得としか言えない。

何しろお前が巻いた憤怒の種だからな。」

「ひっ・・・ひ・・・ひ・・・。」

「あまりに外道。お前を殺してやりたいところだが・・・我は罪深き存在。この場でお前を殺してしまえば、あの二人を止めた意味がなくなる。それに外道を手にかけるほど落ちぶれた手をしていないのでな。」

そして、ベルゼブブはガイをゴミのようにその場に放り出す。

「だが・・・今度そんな真似をしてみる・・・我が直々にお前の罪を・・・喰らいに行くぞ!!!」

その言葉と共に地面に叩きつけられた右手の鎖は大きく道路を打ち砕き、大きな亀裂を起こしていた。そんな物を叩きつけられた日には人間など・・・原型も留めていない。

「ひっ・・・ひいい・・・。」

あまりの恐怖に失禁しながらへたり込むガイ。

「・・・願うは、お前が自身の罪と向き合う事を・・・。」

そう言つて、その場から黙つて去ろうとする魔王。

「待つて!」

その背に声をかけたのはティアナだった。

ゆっくりと振り向く魔王に声をかけたのはいいが、どうすればいいのか分からなくなっているティアナ。

そんな彼女にベルゼブブは告げる。

「・・・お前に頼みがある。ヘイズを・・・彼女を人として・・・葬つてくれ。」

「えっ?」

「あいつは人として死ねた。だから・・・人として・・・。我のような怪物ではなく、人として静かに葬つてくれ。弟は・・・もう遺骸はない故に・・・な。」

その言葉に頷くティアナに満足したのか、魔王　ベルゼブブはその場を去る。

「頼むぞ。」

それをその場にいた誰もが追おうとはしなかった。ただ・・・その背中を見送るだけだった。

街を見回せるビルの上・・・そこにバ　ハルトは変身を解いて座っていた。

彼の眼には広がるミッドチルダの大都市の明かりがある。

「なあ・・・ヘル。」

「なんででしょうか？」

ヘルと呼ばれし魔道書は主の言葉に応える。

「人は・・・なぜこんなにも罪深い。」

「・・・。。。」

バ　ハルトの言葉にヘルも答えられない。

「この事件の発端となったあの人の罪・・・想像以上に重すぎる。」

「・・・まさか、右指の鎖の力で？」

彼の右指の鎖。それには相手の記憶を読み取る力が備わっている。そして、それは人だけでなくパソコンなどのデータ　も読み取れ、そして書き換える力もあるのだ。

「でも・・・罪を犯すのが人なら・・・それを止めるのも、赦すのも人です。それ故に、主も止めたのでしょ？あの二人を・・・。」

「・・・ああ。」

バ　ハルトは立ち上がる。

「最近、奴らの動きが派手になっている。おかげで管理局も無視できないくらいに。」

「今回の事件・・・かなりの被害がでてしまいましたからね。」
「彼らはいくまでも闇から彼らを狩っていた。管理局にもばれることなく密かに。」

だが、もうそれはできない。彼らもシードと呼ばれる怪物、そして魔王　ベルゼブブの存在を認知してしまったからだ。

「・・・やることは変わらない。だが・・・どうなっていくのかは全く判らないな。」

「ええ。私も心配しております。」
深々とため息をついたバーハルトは言う。

「・・・カオスだ。」
その嘆きは誰にも届かず、都市の暗い闇に消えていった。

シードと呼ばれし怪物。その被害は絶大なものだった。
管理局の中で初めて公開された映像は彼らの脅威を知らしめるのに十分だった。

そして、それきつかけとして水面下で計画されていた二つの計画が本格的に動き出す。

一つはパラディン計画。

もう一つが・・・エンジェル計画。

そして・・・エンジェル計画の中に一人の名前が挙がっていた。

その名はガイ・スコ デイオン。その計画の装着者の一人として選ばれていた。

バ ハルトの言った混沌がミッドチルダで吹き荒れようとしていた。

憤怒と暴走 完結編（後書き）

・・・ガイというキャラはなかなかヒールとして使いやすそうとして・・・今後も話に絡ませてもらうことにしました！！

私も書いていてかなり腹の立つキャラだと思いましたが、ゆえに使いやすい。

賛否両論があると思いますが、また意見をいただければ幸いです。次は魔王の日常と、新キャラを登場させようと思います。

そのあと・・・また大事件を起こそうと思いますのでよろしく願いします！

暴食の魔王達の日常（前書き）

魔王がなぜ複数形か？

その理由は読んでみればわかります。

まあ・・タイトルがうまく合えばいいのですがね。

暴食の魔王達の日常

眩い朝の中・・・銀色の髪の男はすやすやと眠りに入っていた。頭の左右には角。額には第三の目がある異形の姿だ。

目覚ましが鳴るが・・・そんなの無視して一向に眠り続けている。「主・・・。起きてください。」

そんな彼に向って起こしに来たのは一冊の魔道書。本の身で必死に彼を揺さぶっているのは中々シユールだ。

「・・・まあ、こんなので起きてくれたら苦労しませんか。」
魔道書　ヘルはいつもの事ゆえに慌てない。

「さて・・・今回のメニューは何にしましょうかね。」
彼女の前で幾つかの選択肢が示される。

「うん。今度は新しい趣向にしましょう。」
そして、先ほど思い付いた叩き起こしメニューを実行。

それは・・・。

某世界の馬鹿達の投稿ビデオに出てきた物でロシアの学生による荒いドツキリの中の一つを参考にしたので。

バーハルドの耳にヘッドホンを装着。

音量の設定はもちろん最大。

流す音楽は・・・ヘビーメタル!! いや・・・ある意味デスメタルと言ってもいい!!

「ミュージック・・・スタート?!」

『 』
『 !! !! 』
『 !! !! ? j をええ!! !! !! !! ? 』

いたずら目いたヘルの事共に激しいという言葉では物足りなくらいの破壊的な音楽が最大音量、しかもバ　ハルトの耳元で炸裂する。

「ぐああらねVべえれ!？」

訳も判らない声とけいれんを起こしながら飛び起きるバ　ハルト。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・。」

その息はとつても荒い。

「いや・・・やっと起きました。おはようございます主さ・・・ま？」

そして、彼は無言でヘルをつかむ。

彼の目からハイライトが消えている。

「何度も・・・何度もいうがな・・・。」

軽く怒りをあらわにしている男。

「もつと普通に起こせというてるだろうが!このたわけもののがあ

あああああああああつああああ!!」

この家の主であるバ　ハルトの朝は毎日このように始まっている。

「・・・おかげで一発で目が覚めわ。危うく、永遠の眠りになるところだったがな。」

「あれくらいいしないと・・・主さま眼をさましませんよ。」

「・・・むう・・・そんなに目を覚まさないのか？」

少し不機嫌ながらもヘルからトーストを受けるバ　ハルト。

「もつと焼きますか？」

「そうだな・・・。まあ・・・今日はこんな物にしておくよ。」

そう言つてトーストを口にするバ　ハルト。本日・・・厚切り三十枚目である。

「いつもより十枚少ないですね？」

「・・・新しいマーガリンが予想以上にこつてりしたからな。こんな物で十分だ。」

そう言つてトーストを食べ終え、牛乳（一リットル紙パックにして四本目）を飲み干す。

「サラダもかなり食べたし・・・まあお昼は二口分で十分だろう。」

空になったサラダボール（レタス一玉、トマト大三つ、玉ねぎ三つ・ゆで卵十個など・・・）

「サンドイッチはつくっているのですね。」

「ああ。その方が楽だからな。」

二口分のお昼のサンドイッチ、六四十×十五センチほどの長さのパンにレタス、厚みのあるベーコン、チーズなどの具がびっしり

「ごちそうさまです。」

「お粗末さまですって、主が作っているのですから問題はないですよね。」

バ ハルトはそう言いながら、バンダナを額に巻く。すると彼の左右の角が無くなっていく。

「そうだな。じゃあ、いつてくる。」

そう言って、バ ハルトは今日も出勤する。彼が住んでいるのはミッドチルダ郊外の森の中にある。古びた大きな屋敷。部屋ならいくらでも余っているありさまだ。

ちなみに朝食、および持っていく昼食について突っ込んでくれる者は誰もいない。

ティアナは一つの墓の前にいた。

「……ごめんなさい。あなたの無念……まだ晴らせていないわ。」

そこに書かれている名前はヘイズ。そしてミノスとアリガの名前もある。

「でも……あの魔王が少しは晴らしてくれた。そして、その魔王が私にあなたをこうやって人として弔ってくれって。まあ……弟さんの全てとはいかないけど……折れた角みたいのはあったから、それを遺骨代わりにして妹と一緒にしたわ。」

ティアナが花を手向け、冥福をささげる。

彼女は事件の被害者として埋葬されている。人として弔うための措置。

シードとしてのサンプルとしていくつか持っていくことは止めら

れなかったが、それでもこうやって弔う事が出来たのだ。

「・・・じゃあね。私もがんばる。」

ティアナは執務管になってから色々な凶悪事件にかかわってきた。その中には相棒に裏切られるという手痛い思いもしている。

でも、それらをすべて力に変えて彼女は前に進んでいる。

墓地から出たら、彼女の親友がそこにはいた。

「ティア、もう終わった？」

彼女の名前はスバル・ナカジマ。

訓練校から機動六課まで一緒にいた相棒にして、今でも付き合いのある彼女の親友。

「うん。」

現在スバルはレスキュー隊に所属しており、ミッドで起きた怪物騒ぎも知っていた。

「悲しい事件だったわ。今回は私も止められなかった。」

「止めたのって・・・噂の魔王？」

ティアナはその言葉に頷く。

「多分・・・優しい魔王。」

「優しい・・・魔王？」

「私の個人的な見解だけどね。」

優しい魔王なんているのだろうか？スバルの疑問に苦笑いを浮かべるしかないティアナ。

「それより今日ご飯食べにいこ。」

「うん。そう言えば一緒に来るって言っていたあなたの後輩は？」

「・・・ええと・・・」

今回は彼女達2人だけではない。お別れ会を兼ねて、異動する親しい後輩をスバルが誘っていたのだ。

スバルがその後輩の姿を探していた時だった。

道路を横切る猫。

それを男の子が追いかけていたのだ。

そして・・・それに気づかずトラックが突き進む。

「あれって・・・不味いじゃないの!？」

ティアナの言葉と同時にスバルは走り出していた。相棒であるスケートローラー型のデバイス、マツハキャリバーを出しながら。

でも・・・間に合うかどうか判らない。

何しろトラックは一向にスピードを落としていなかったからだ。

トラックに気付き立ち止まってしまふ男の子と猫。

トラックがようやく子供に気付き、あまりにも遅すぎるブレーキを踏むと同時だった。

トラックの前を横切るように何かが通り過ぎ、子供と猫を助けたのだ。

「えっ？」

その光景に啞然となるティアナ。

スバルの方は安堵のため息をつきながらその彼を見る。

「ディーノ君！遅刻の上に危ない真似をしない!!」

その彼は癖の強いぼさぼさの黒髪に野性味と同時に人懐っこい笑みをした少し小柄な十代後半の青年。まるで人懐っこいラブラドルなどの大型犬を思わせる彼だ。

「すみませんでした!!でも・・・要救助者は無事です!!」

サムスアップをするディーノの腕には啞然としている子供と猫がいた。

彼は子供と猫を下ろし、よく言ってい聞かせる。

「危ない真似はするなよ。ちゃんと道を渡るときは左右確認して無事だと確認するようにね、出ないとほら・・・トラックを運転していたおじさんも心配してこっちに来ちゃった。」

その言葉に子供と猫はそろってトラックを見る。そして同時に納得したようにそろって頷く。

トラックを止め、慌ててかけよる運転手。

その彼にもディーノはため息をつきながら色々と注意を言っかす。

その時栄養ドリンクとコーヒーを渡してあげた時には運転手は涙を流していたようだ。

場所は変わって、ティアナはディーノがスバルの仲のいい後輩であるという理由をまざまざと見せつけられていた。

「そう言えば・・・いつも一緒にいる相棒はどうしたの？」

「この地区のみんなにあいさつ回りがしたいって言うてな。出払っているんだ。」

「・・・相棒ってデバイスじゃないの？」

ティアナは顔をひきつらせながら質問する。

「いんや。アギトやラインみたいな可愛い妖精だよ。」

「妖精って・・・まさか融合騎？っていうか・・・一つ言ってもいい？」

「何？」

2人は声を綺麗にそろえる。

「あんたら・・・どんだけ食うのよ!」

ティアナはスバルがたくさん食べるのは知っていた。長い付き合いなので、もうその光景にもなれたはずだった。

だが・・・その後輩までもが同じくらいの食欲を誇っているとしたら話はべつだろう。

すでに二人で、五十人分くらいは食べている。

ティアナが厨房を見ると・・・色が抜け、真っ白になったコックたちの哀れな姿。

この二人の無茶苦茶な量に振り回され、悲鳴を上げ、弄ばれた哀れな姿。

さすがにティアナもこれにはひきつった。

「じゃあ今度はこれをもう十人前頼みましょうか!? これもおいしかったです・・・全部頼んじゃえ?」

「おう。ガンガン行くぜ!!」

その言葉に死の宣告を受けたかのように悲痛な表情を受ける真っ白なコック達。もう・彼らの笑いは乾き切っており、感情は愚か、魂も、力も残っていない。

「あんたらしい加減にやめなさい!!」

ティアナがストップをかけたのは、当然のことであった。

『まだ腹八分目にも鳴っていないのに!!』

二人のその返答に絶叫しなくなったティアナがいたのはまた別の話である。

バ ハルトもそのころお昼をとっていた。

特大のサンドイッチを味わいながら、ゆっくりと・なのになり早く食べ終わる。

「はっ・はははははっ・」

その光景に、ユーノも顔をひきつらせる。

他の司書仲間もだ。

「相変わらず健啖家。」

それを見たバ ハルトは顔を赤らめる。

「いえ・。お恥ずかしい限りで。」

「まあ・君が子供のころからそうだったし。」

ユーノの言葉にバ ハルトも懐かしそうに目を細める。

「記憶喪失の私を拾ってくれた事・今でも感謝しています。」

「それはスクライア部族全員にも言っしてほしいよ。」

2人は初めて出会った時の事を思い出していた。

久しぶりに部族の元をおとずれたユーノは記憶喪失の少年と出会った。

銀色の髪と変わった眉毛。彼の頭の両脇には角が生えており、そして・額には三つ目の眼を持っていた。

「我の名前・覚えていない。」

彼が見つかったとされる遺跡のカプセル。そこに刻まれたBAと

アルファベット。そこから先はユーノがスキャンをしてもその部分ごと削られており判らなかつた。

だから・・ユーノはそのアルファベットから名前を付けたのだ。

バ ハルトと。

姓は孤児であつたユーノと同じくアルファベットに

「額の眼と角は・・相変わらずバンダナで隠しているのか。」

「はい。ばれたら色々と不都合ですから。」

「いつも付けているバンダナをとると、そこには何も無い額。だが・

・
・
魔方陣と共に戒めが解かれるとそこには三つ目の眼が存在していた。

頭の左右には角も出ている。

「・・・隠すの大変だね。」

角と額の眼はふだんはバンダナで封印している。生まれつき備わつた異形の物だが、それをみんなに見せて驚かせるわけにはいかないのだ。

「角そのものは出し入れができるんですよ。でも・・まあ、万が一の事がありますので。」

バンダナ無しで角を消して見せる彼。

「ユーノさんには感謝しています。司書としての仕事を紹介してください。」

「いいよ。元々君は僕よりも頭が良かったし、僕からしたらいい人材をコネで獲得できたと思つているくらいだよ。」

その眼の力に関してユーノはよくわかつていない。ただ・・彼自身が見つかつた遺跡が古代ベルカの墜落した船の中だったというのが不確定要素。

そこから、彼がどこかの国の王族・・または戦争の為に生み出された存在と言う可能性が高いとみている。

その一端なのかもしれないが、彼の魔力は・・途方も無く高い。戦いを好まないバ　ハルトから、計測は断られているが、軽く見てもオーバースはくだらない。

「ユーノさんちよつと・・ってうわっ!？」

そんな二人に話しかけようとしたアガリアがバ　ハルトを見て驚く。

「って・・頼むから全開の状態は止めてくれ。」

「ああ・・すまない。でも・・この姿もいい加減見慣れただろ？」

「まあ・・何度見ても驚いてしまうのは・・申し訳なく思うが・・。

「ちなみに司書仲間と一人の少女には彼のその角と眼は受け入れられている。」

最初はかなり驚かれたのだが、皆受け入れてくれている。

「いつ来客が着てもおかしくないのだぞ。普段からきちんと・・・隠しておけ。」

それどころか他の皆にばれないように心配してくれる始末だ。管理局内では彼らだけの秘密となっているが、それ故に団結にも一役買っている。

魔法世界は多少の異形は問題ないという事だ。犬耳の使い魔や小人サイズの融合騎など色々な者たちがいる。まあ・・それをよく思わない人もいるのも変わらない。

だからこそ、バ　ハルトもここで自分の姿を認めてもらえることを嬉しく思っていた。

まあ・・もう一つの姿を見たら・・話は別だろうがな。

そして、彼の抱えている秘密はその異形よりもさらに深い。その事を知る者は不幸なのか、ある意味では幸いなのか無限書庫にもいない。

「さっそくの来客だな。まあ・・あいつは問題ないがな。」

「お邪魔します!！」

やってきたのは金色の髪に赤と翡翠のオッドアイをした十歳の少

女。

名前を高町ヴィヴィオと言う。

彼女の肩にはそのデバイスであるウサギのマスコット・・セイグ
リットハートが座っている。

「あつ・・バ ハルトさん、角と眼を全開にしている。」

彼女が彼の角と額の目を知っている唯一の少女。

「・・・前々から聞こうと思ってだったが、何故角と眼を出している
状態を・・・全開というのだ？」

「・・・さあ？」

ヴィヴィオが可愛らしく首をかしげるのを見て、その視線をアガ
リアと向ける。

「・・・明らかにあなたの言い方を真似しましたね。」

「リースの奴のせいだ。ほら社会の窓だって全開になっていると言
うじゃねえか。」

「私の角と眼は社会の乱れ、または露出と同じ意味合いですか。」

その説明に頭を軽く抱えるバ ハルト。

「ああつと、それよりも探している本があるんだ。」

ヴィヴィオは無限書庫司書の資格を持っている程の本が好きで、
調べたい事があれば欲この無限書庫に足を運んでいる。

「何？」

「古代ベルカの戦争、聖王、霸王について調べ物を・・・。」

「この前言っていた霸王の子のために？」

「うん。だいぶ仲良くなっただけど・・・もつと知らないといけな
い事があるんだなって思ってた。」

ヴィヴィオの生まれに関しては、バ ハルトもユーノと共に聞い
ている。

それを聞いたバ ハルトも自らの目と角、そして記憶を失って遺
跡で発見された事を教えたのだ。

「わかった。私が探そう。」

バ ハルトの検索魔法。彼の魔力光は金 光輝く綺麗な魔力で、

検索の魔方陣を無限書庫のど真ん中に出現させる。

スクライア一族から最初に教えてもらった魔法を、彼は想像できないほどの規模で行う。

無限書庫一室でも万を下らない数の書物がある。それを彼は同時に、検索する。

それは大規模な魔力だけでなく、繊細な制御と並はずれた情報処理能力も必要になる。

その三つを彼は兼ね備えており、無限書庫の中で一番のスピードと一番の正確な検索を行う。

検索が終わった後、バ ハルトは十冊ほどの本を取り出し、ヴィオの処に持っていく。

「これとこれだな。まだ部屋がいくつがあるが……。」
「十分だよ。ありがとう。」

ヴィヴィオは笑顔でお礼を言う。
「どういたしまして。」

その笑みに笑顔で応えるバ ハルト。口調こそ、どこかの王族のような偉そうなところがあるが、彼は基本的に笑顔を好む。

「そうだ。ついでにいい茶菓子がある。少しお茶にしようか。」
「うん。」

笑顔でその誘いに乗るヴィヴィオ。
「……先お昼食べたばかりなのに、もう茶菓子ですか？」

そのやりとりにユーノは突っ込みを入れながら、一緒にお茶をいただく事になった。

バ ハルトが入れるお茶やコーヒーは本当においしいからだ。

一通り食事やゲームなどを楽しんだあと、ティアナ達は改めてデイーノを紹介してもらった。

「一応スバルさんの下で働いていたですが……なんか適性があるっ

て言われて突然異動になったんすよ。」

「ディーノは少々大雑把なところがあり、そそかつしい。だが、野性味もある無邪気さも同時に兼ね備え、憎めない。それに・・・基本的にいい奴だ。」

「適性？」

「最近怪物騒ぎが頻繁にでているでしょ？その対策として、ある計画が持ち上がったの。」

「ああ・・・例の強化ユニットの話しか。確かに・・・必要かもしれないわね。」

「ティアナの耳にもシードの出現が表面化と事件の被害の深刻さを受け、二つの人体強化ユニットのプロジェクトの話を目にしていた。実は・・・ディーノ君がその中の一つ「パラディン計画」の装着者に選ばれたんだ。」

「ええっ!？」

「耳にしていたプロジェクトの中心と言ってもいい人物に出会える事になるとはティアナも思ってもみなかった。」

「俺だって不思議です。自慢じゃないけど魔道士ランクFなのになあ？」

「らっ・・・ランクFで・・・選ばれた？」

「魔道士ランク最低ランクのF。微かな魔力がある程度の非常に低いランクの彼が選ばれたのだ。」

「あれ？私はべつに不思議じゃないと思うけど・・・。」

「驚くティアナをよそにスバルはむしろ納得していた。」

「何度も聞きますけど、なんでっすか？なんで選ばれた事に納得を・・・？」

「悪いけど・・・それは教えない。自分で気付きなさい。」
「そう言っつて可愛い笑みを見せるスバル。」

「それに・・・ディーノは顔を真っ赤にしていた。」

「うっ・・・いつ・・・いじわるっす。」

「あらら・・・。」

執務管として、かなり聡いティアナは彼の反応を見てすぐに理解する。

これから異動するスバルの可愛い後輩は色々と彼女に振り回されている。心を完全に掴まれ、どうしようもないくらいに。

「なら……こつちも打ち合わせのために頻繁に顔を合わせることになりそうね。」

「えっ？なんで……。」

「ティア、この事件の担当執務管になったから。まあ……正確には魔王の担当といったほういいかな？」

ティアナは事件の報告の後、シード関連の事件を追いかける事になった。特にその事件でシードを倒して回る魔王を中心に追う事を決めている。

「……別に魔王を追っているわけではないわ。でも……彼は事件の重要参考人なのは間違いない。だから……彼を知る必要があるって思ったわけよ。」

「魔王……ですか。」

ティーノはその名を聞いて少し考える。

「その魔王にあつた事あるっすよね？」

「ええ。」

「魔王って……強いですか。」

ティーノの問いにティアナはしばし考えていった。

それは彼が魔王と対峙する可能性が高いからこそ出た質問。

だからこそ。彼女は彼女が感じたままの魔王を言った。

「圧倒的に強いわ。しかも、まだ実力も底知れない。それに恐ろしい存在だと……思う。彼の怒りを見た時、私でさえまったく動けなかった。」

思い出すだけでティアナの手は震えだす。先の事件で見せた彼の怒りは大気を震わせたど錯覚するくらいに圧倒的な威圧を周りに与えていたのだ。

「でも……それと同じくらい……深い悲しみを抱えた奴だと思う。」

そんなに、悪い奴じゃないとも思っし。まあ、これは私の偏見だけどね。」

その言葉を2人は深く、心に刻みつけた。

「ただいま。」

我が家である屋敷に返ってきたバ ハルト。

「お帰りなさい。主。」

出迎えるのは魔道書のヘル。

「晩御飯の買い物もしてきた。」

バ ハルトが指を鳴らすと、魔方陣とともに大量の食材が召喚される。

「さっそく料理して・・・。」

そこまで言っつて、彼は言葉を止め、額を抑える。

「・・・まさか主？」

「無粋な・・・。また現れたようだ。」

バンドナをとった彼の額に赤く光を放つ三つ目の眼。

「・・・地下の冷蔵庫と、冷凍庫に食材を転送しておいてくれ。」

角を生やしながらヘルに買ってきた食材の保存を頼む。

「・・・今回は転送できそうですか？」

額の目に意識を集中させるバ ハルトは軽く笑う。

「・・・ああ。知っている道だ。問題ない。」

「判りました。私も食材の転送が終わり次第すぐに後を追います。」

「・・・それまでには終わらせるさ。」

そう言いながら、彼の腰に現れるベルト。それと共に足元に白と黒、頭上に赤と青の魔方陣が現れる。

「変身。」

解き放たれたベルトから伸びる鎖で、スライドする魔道陣。その中から魔王ベルゼブブの姿が現れる。

「・・・行ってくる。」

「お早いお帰りを。」

家の中から消えるベルゼブブ。

そして、今宵　暴食の魔王がまた街に降り立った。

暴食の魔王達の日常（後書き）

さて・・・やってしまいました。彼の日常におけるもう一つの秘密。バンダナをしていたのはこういった理由です。まあ、ミッドチルダはある程度こういった異形には理解ある可能性があるので、何人かにはれているという設定にしていますが。

主人公のモデルは言わずもがなですかね。某大魔王です。関係があるかどうかは・・・お楽しみということにします。

ちなみに主人公の日常は至つてのんびりでなおかつマイペースです。だからこそ・・・ティアナのような突っ込みがほしいのです！！そして、新キャラをついに登場させました。しかし・・・大食いキャラが多い物語になりそうだ。

暴食の君以外にあの二人にふさわしい大食いの二つ名があればぜひお願いします。

かろうじて今回は一日で投稿できましたが、今度はどうなることやら・・・。

魔王の視察（前書き）

さて・・・今回も魔王ははっちゃけます。

暴食というのはネタとして非常に使いやすい。

バ ハルト「何故こんなことに・・・。」

はやて「なんでやあああああああああ！？」

さて・・・どうして彼と彼女がそんな嘆きを漏らすのでしょうかね？

ちなみにそれぞれ理由は別です。

8 / 30 タイトルを変更しました。

魔王の視察

夜の公園で結界を展開させて戦う異形が二体。
一体はカエルの異形。全身から粘膜を分泌させて、打撃を滑らせる。

「・・・今度は嫉妬か。」

カエルの口から伸びる棍棒のような舌をかわすもう一体は・・・黒い蟲の異形。

魔王ベブゼブ。

舌の一撃で粉々に破壊される遊具。

「今回は結界も張ってある故に、被害はそれほど気にしなくてもいいな。」

「・・・なぜ・・・振り向いてくれない。」

カエルの異形は悲しみをこめて、憎しみに苦しみすらも込めて言葉を発する。

「なぜ・・・こっちをみてくれないんだああああああああ！！！」

彼の後ろには変わり果てた姿の一組の男女。

対するカエルの異形は血まみれだ。

それだけでベブゼブは察した。

彼の嫉妬が何かで、その嫉妬が何をもたらしたのか。

「・・・そうか。お主・・・。」

「うあああああああああ！！！」

嫉妬に狂った異形がベブゼブに飛びかかる。

「この・・・馬鹿ものがあああああああ！！！」

それをあえて容赦なく殴る。振りかぶるような拳に、飛びかかったカエルは地面にめり込む程に強く地面に叩きつけられる。

「なんで・・・なんで・・・。」

カエルの異形は力なく立ちあがり、変わり果てたものたちを見る。しかし、二人は何も答えない。

「もう、お主は答えを出せぬよ。答えを・・・出せなくしてしまったのだ。お主自らの手で。」

ベブゼブブは異形の方へと歩き出す。

「なぜだあああああああああああああつあああああつあ！！！」

「さあ・・・終焉の時間だ。」

カエルの怪物が全身から粘液の球を飛ばすがそれを怪物ごと鎖で弾き飛ばす。

「解き放つは蒼き炎の斧。」

その言葉と共にベルゼブブの右の鎖が解き放たれ、右の手甲がスライド。右手が斧とかす。

「我が右手に宿る斧は断罪の斧。」

その言葉と共にベブゼブブの足元に発生する蒼い魔方陣。

「ぐあああああああああつあ！！？」

そして、カエルの怪物の全身から炎が噴き出し動けなくなる。

「全てを燃やす蒼き炎、割れぬ、欠けぬ強き刃を持って、運命すらも断つ、これ・・・終焉の一撃。」

魔方陣の力を全て斧にこめ、炎と高熱を纏った右手を振りかぶりながら、ベルゼブブは駆ける。

そして・・・カエルの怪物にその手斧を振り下ろす。

カエルの怪物の全身を止めていた炎が消え、辺りを静寂が支配する。

そしてベルゼブブは振り下ろした手を元に戻し、踵を返してその場から去る。

「バニッシャー・エンド。」

その言葉共にカエルの怪物の身体が中心を境に左右にずれる。しかし、ずれていたのは彼の身体だけではない。

彼の後ろの風景すらも必殺技の切断面を境にずれたのだ。

「……後ろの境界ごと空間を断ってしまったか。この技も強力過ぎて使いづらい。」

「があああああああああ！！！」

切断面から蒼い炎を吹き出しながら絶叫するカエルの怪物。その体の中央に上がる蒼い魔方陣。

「……無駄なあがきなどせず……逝け！！！」

その言葉と共に、爆散するカエルの怪物。

その光景を一部始終取っているカメラがあった。

「……無粋な。」

そのカメラを苛立ち交じりに鎖で瞬時に叩き落される。

そこまでで、映像が途切れていた。

「いつ……以上が……最新の……魔王……ベブゼブブの映像です。報告していたはずの人間ですら、言葉を失うほどものがあつた。それを始めてみる皆など、言わないでも判ってもらえるだろう。」

「……まさに、生体ロストロギアと言うべき存在だな。」

「
提督クロノ・ハラオンの言葉に皆は頷かないわけにはいかなかった。」

何しろ今回の戦いで彼は空間切断を伴う必殺技を放ったのだ。

一生命体が単独でそれを行える事自体が脅威なのだ。

「少ないデータですが、推測されるスペックは以下の通りです。」

身体スペック

パンチ力・・・六トン

キック力・・・十二トン

ジャンプ力・・・150メートル

ダッシュ力・・・100メートルを四秒

魔力光・・・未確認。しかし、蒼い炎、赤い水晶体、白い風、黒い雷と言った複数の変換資質を確認。これらは普通の変換資質と違う可能性が高い。

追記

1、全身に纏わせている鎖は彼の意思で自在に動き、怪物すらも簡単に拘束、動きを封じる。他にも移動手段、攻撃手段にも。構成物質は判らないが、高い強度は確実。

2、幻術、結界展開の力も持っている。他にも推定ランクS以上の砲撃魔法も使える事から魔道士としても、一流以上は確実。

3、重力制御、空間切断の能力を確認。

4、極めて高い格闘技能者であること。

5、先の事件で彼の右足から放たれたキックの破壊力は測定・二百トン以上。小型隕石の衝突と同等のエネルギーがあると考えられる。受ければ戦艦一隻は確実に沈む。

「・・・なんだ、これは・・・」

人間大の生命体としてもあまりに異常な戦闘能力。

「これなら単独で次元振を起こしてもおかしくないわね。」

「しかし、先の怪物はこの隕石衝突と同等の威力のキックを受けても自ら爆発するまでは原型と息があつたのも異常だな。」

「これが・・・元は人間だつたというのが驚きですな。」

議題の中心が、先に巷で騒がしている怪物・・・シードに向けられる。

最新の映像でカエルの怪物とかした人物はすでに特定されている。未だに・・・どうして人間がシードになるのか不明です。ですが、彼らは人間の七つの大罪のいずれかに強く反応して怪物になるようです。前回の二体が憤怒。おそらく今回は・・・事件の動機からして嫉妬だと思われます。」

その報告をしているのは執務管・・・ティアナ。

「とりあえず・・・判っている事は二つだ。」

会議の議長　アーン・スコ　ディオンは戸惑う皆を抑える。

「街中に封印すべき第一級の生体ロストロギアがいるということと、このシードと呼ばれる怪物の対策が必要ということだ。」

その言葉に待ったを入れたのはやて捜査官だつた。

「ちよつと待つてください。ベルゼブブを封印対象にするつもりですか？あれはシードを退治しています。それに、私達と話ができることなどを考えても・・・あれは・・・」

「だが、あれは危険すぎる。正体不明で行動目的も不明。他にどのような危険な力を秘めているのか判らない。そんな存在を野放しにできるか？」

それに反論できる者はいない。

ただ・・・一人を除いて。

「・・・ヘタに刺激するのはもつと危険だと思います。」

ティアナがその考えに忠告を入れる。

「私はあの存在に二度遭遇しています。そしてその中で・・・彼の怒りを見ました。あれは・・・魔王の怒りです。そして・・・怒りの時のスペック確か測定不能でしたね。」

「えっ・・・ええ。」

眼を赤らめ、鎖を地面に叩きつけた時の破壊力。それは計測できなかった。

その事を分析スタッフも認めている。

「ヘタな事をして・・・彼の怒りを買うようなまねはしないほうがいいと思います。どんなものが飛び出すか・・・判りませんから。」

ティアナの言葉は、現場にいて彼と二度遭遇したからこそ説得力がある。

そして・・・管理局本部での緊急の会議はしばらく議論と持ちあがった対策の了承と協力体制の構築を示されて終幕していく。

その中心となったのが、パラディン計画とエンジェル計画。

しかし、彼らはティアナの警告を無視するか、考慮するかでその明暗が分かることをまだ知らないでいた。

それから一週間後のことだった。

バ ハルトはユーノから地上本部のはやて捜査官へ資料を届けるように頼まれていた。

「・・・ここがそうか。」

バ ハルトはこの地上本部に来るのは初めてだった。一応無限書

庫司書として働いているのだが、自身の事に対する後ろめたさもあり訪れるのを避けていた。

ロビーで、建物の中の把握と、どこに向かえばいいのかわかり、そこへとエレベーターで向かう。

「さて・・・用事をさっさと終わらせて帰るとしよう。」
入場許可書を下げながら堂々と本部局の中を歩いていくバハルト。
ト。

流石に色々な機密が多そうだが・・・。

色々と辺りを見回すバハルト。本人はさりげなくを装っている
ので、周りから見ても怪しまれない。

・・・好奇心が出てしまうのう。むう・・・早く帰らないと危ないと言っのに・・・。

心が軽く弾むのを止められない。

そんな彼の鼻が捉える。

あつ・・・いい匂い。この先は・・・食堂か・・・。

おいしそうな匂いに一瞬だけだが気を取られてしまった。

その状態で曲がり角に差し掛かり。

「きゃあ!？」

誰かにぶつかってしまったのだ。

「あつ・・・。」

転びそうになる人の手をとっさに取り、支える。

我も・・・まだまだだのう。

「すまない。大丈夫・・・か・・・？」

そしてぶつかった女性を見て、彼は不覚にも動揺してしまった。

「まあ・・・なんとか？」

彼がぶつかってしまった女性。

その名は・・・ティアナ・ランスタ　と言っ。

何故・・・彼女と今一緒に歩いているのだ？

バーハルト・スクライア。今の状況に心の中でだが軽く頭を抱えていた。

「へえ……。ユーノさんの部下なのですね。」

「ああ。この資料をはやてさんに渡すように言われて。初めてなので少し迷ってしまったのですよ。」

ぶつかったティアナは、動揺する彼を見て、不審者だと思つて色々聞いた。そして、彼が無限書庫の人間で八神はやてのいるオフィスへ向かっている事を説明。証明書も確認して、せっかくなので案内しますと言ってくれたのだ。

少し怪しまれたか。しまったな。

どうしてこのような事態になつてしまったのかバ　ハルトも一応把握していた。

一方のティアナもさりげなく彼を観察していた。

クロスミラージュに頼んで調べてもらったけど、一応シロミたい。でも……。

執務管として優秀な彼女は思いがけない彼の動揺に違和感を覚えていた。

なんで……思いがけない知り合いに出会つてしまったみたいな顔をしたのかしら？

そんな疑問が、彼への興味となつて同行につながる。

でも、さすがにティアナも事件の中心人物となつている魔王が自分の隣にいるとは思つてもいないようだ。

「ここですよ。」

目的のオフィスの前まで来た2人。

「ありがとう。お礼にまた……お茶でもごちそうますよ。」

「……まあ……機会があればと言う事で。」

少し固い口調でお茶の誘いを断るティアナ。

もちろんこれはバーハルトは判つた上で言つたのだ。

断られるような誘いをしておいて、足早に自分から遠ざかるように仕向けたのだ。

現に、その場を去るティアナの足は心なしか速い。

やれやれ。何とかなったな。まさか変身していない時に出会ってしまうとは。互いの名も知ってしまった事だし・・・、他人から知り合いになってしまったか。

去っていくティアナの後ろ姿を見て、皮肉な笑みを浮かべる。

ヘイズ達の墓の事・・・聞いたかったが、今回は無理だな。怪しまれる。

彼がドアノブに手をやった瞬間だった。

緊急放送、第三取り調べ室にいたいた容疑者が逃走。

現在第五エリアにいると思われる職員のみなさんは注意を！

「・・・とんでもない事態だな。しかし・第五エリアって確か・・・」

廊下の向こうでナイフを手にした男が彼の方に向かってきた。

「・・・ここだったか。」

ドアノブに手をかけたまま気付いていないふりをしながらため息をつくバ　ハルト。

なんで・・・こうトラブル続きなのだ。

「そのあなた！逃げなさい！」

犯人に気付いたティアナがクロスミラージュを手に駆けだす。

「くっ・・・まずい。」

犯人を追いかけているのは桃色の髪をした背の高い女性。手には抜き放った片刃の剣。

犯人は挟み撃ちにされた事をする。そうすると我を人質にするか、我を傷つけた上でこの先のオフィスに逃げ込むか・・・。完全に・・・巻き込まれてしまったか。

どうあがいても興奮した男が危害を加えることは確定的だ。

「はあ・・・カオスだ。」

そうつぶやきながら、いまさらながらに気付いた用に男に向かってゆっくりと振り向く。

仕方ない。偶然を装う事にしよう。

彼が振り返ると同時に・・・犯人はナイフを取り落とし、逃げてきていた勢いそのままに顔面から転倒。そして・・・そのまま気を失った。

「へっ？なっ・・・何？」

そして、今更にバ　ハルトは状況を理解しきれていないように装う。

独りでに犯人が転んで気を失ったようにはたから見えた光景で、本部内で起こった騒動はあっけなく幕を下ろした。

「いや〜悪いな。わざわざ資料を届けてくれた上に身内の恥に付き合う事になるなんてな。」

「いえ。こっちは何とも。」

気さくに話しかけてくる八神はやてにあえて言葉の数を少なく応える。

「しかし・・・結構肝太いんやね。全然驚いていないやん。」

「・・・気づくのが遅れただけで、まだ・・・全然実感していないのですよ。」

はやてに資料を渡しながら、彼は足早にその場から去ろうとしていた。

「では・・・私は仕事がありますのでこれで・・・。」

これ以上のトラブルは御免被る。

「ちよつとまってや。これから面白いもんが見れるんや。私らのお詫びを兼ねて一緒に見ていかないか？」

しかし、その願いとは裏腹に彼は引き止められる。

「お誘いは嬉しいのですが・・・仕事が・・・。」

「安心してや。ちゃんとあんたの上司には許可もろてる。」

いつの間に根回しを？

逃げ道を封じられた凶のバ　ハルト。

ユーノさんにはやてさんがどのように聞いていたが・・・これほどとは。

聞いた印象は幼馴染らしく判りやすい。

まさに狸か。うまくはめられた。なんでわざわざ引き止められる？

追い打ちをかけるように彼のお腹が鳴る。

それを見た、はやてが引き止める材料をもう一つ見つけたと笑顔を見せる。

「あらら。まあ・・・今回はお昼はおごってあげるわ。ここの食堂、結構おいしいで。」

いい匂いだとおもっていた場所に行ける。これは彼からしても大変魅力的だった。

乗る価値は・・・十分にあった。

「・・・いくらでも食べていいのか？」

「うん。いいよ。」

背に・・・腹は代えられんか・・・。

そう思いながらにやりと笑みを浮かべるバ　ハルト。

「では・・・ヘタな遠慮はむしろ失礼ですので、思う存分いただきに行きます。」

「うん。私も後で食堂にいくさかいに。」

「はい。堪能させてもらいます。」

はやてはしてやったりと笑みを浮かべる。己の最大の過ちに気付かないままに。

部屋をでようとしたところで、ノックと共に桃色の髪の剣士

シグナムが入ってきた。

「お疲れ様です。」

バ　ハルトの言葉に、シグナムは軽く会釈をする。そして、バハルトは部屋を出る。

「さて・・・シグナム。あんたの言うとおり、彼を引きとめておいたけど？」

「すみません主。」

シグナムは主であるはやてに取り逃がしていた犯人の経過を一通

り説明したあと、お願いしてまで、バ　ハルトを引きとめた理由を説明していた。

「・・・そんなにすごいんか？」

「はたから見たら、ただ転んで気絶したようにしかみえないはずで
す。私でさえ、目を疑いました。」

シグナムは犯人が気絶する一部始終を見切っていた。

振り返りながらナイフを突き立てた手に斜め前へと右手の手刀を
叩き込み、犯人がナイフを落としながら、前のめりになる。

そして、それ同時に体勢の崩れた犯人の足を振り返った右足でひ
つかける。

この二つを同時におこなったために、犯人はナイフを取り落とし
ながらころんでしまったのだ。

そして、追い打ちとして　転ぶ直前に、素早く首筋に手刀を当て
て気を失わせた。

あまりに鋭いために、相手は痛みすらもかんじていないだろう。

「・・・偶然では・・・ないな。」

「おそらくあの男の外傷は転んだ時の物以外は見つからないはず。
達人でもあんな見事なことできませんよ。」

これは剣に長けたシグナムだからこそ、見切れた。

「・・・ユーノ君にあの男の事色々と聞いておかないとな。」

のんびりとバ　ハルトの事を考えていた二人に、激しいノックと
共に部屋に飛び込んできた者がいた。

「どうしたティアアナ騒々しいぞ？」

荒い息のまま入ってきたティアアナをたしなめるシグナムだが、今
のティアアナには余裕がない。

「あっ・・・あの・・・はやてさん？バ　ハルトさんに食事をおごって
いるって本当ですか？」

「そうやけど？」

のんびりと茶をすするはやては余裕を持って答える。

「だったら、早く彼を止めてください！！彼・・・食堂の食材を喰い

「尽くす勢いで食べまくっています!!」

「・・・なんやて?」

「とんでもない事を来たようにはやてはティアナに聞き返す。」

「だから・・・バ　ハルトさん、遠慮無くっていつて、食堂の食材が全部なくなる勢いで食べまくってます!!もう・・・無くなっているかも。」

「信じられない出来事に固まってしまったはやての手から・・・湯のみがこぼれおちた。」

その頃食堂では・・・混沌が巻き起こっていた。

「すまないが追加注文を頼む。これとこれ・・・これに・・・これ・・・そしてこれとこれだ。」

「はっ・・・はいいいいいっ!!」

その注文に悲鳴じみた声を上げる食堂のおばちゃん達。

バーハルトはそう言いながら、さらに食べ続ける。

その席の隣には・・・この食堂の食器の大半が置かれていた。

「いや・・・あんた良く食べるよな。」

彼の前には同じくかなりの量を食べているディーノがいた。

「こつちも普段はそんなにはな。今回はやけ食いだ。色々とトラブルがあつて疲れているのだ。」

「やけ食い・・・恐ろしいな。」

その量と速度は同じ大食いであるディーノですら戦慄させるものがある。

「料理長!食器がなくなりました!」

「急いであそこから回収して洗え!もう・・・食器は三周目だぞ。」

あまりの速度の食欲に料理長ですら音をあげている。

それを尻目にバ　ハルトは食べる、食べる・・・さらに食べる!!それを見た皆は流石に引いていた。

「おいおい・・・スバル以上だぞ?ティーノもさすがにあんなに喰わ

ないだろ？おまけに礼儀正しくたべているのに何だあの速度は？」

それを見ていた守護騎士・ヴィ　夕は呆れて何も言えない。

「食材の残りは……。」

「すみません今ので……もう……。」

「嘘だろ！！急いで注文を……！！！」

「あの……次はつて……食材はもうないのか……。むう、やけ食いは終わりと言うわけか。」

食材がないと言うのを耳にしていた彼はそこで終わりを察する。

「はあ……はあ……。」

そして、食事終了と共にはやてが食堂にかけつける。

「……えっ？」

食材が無くなったという現実。

途方もなく積み上げられた食器の数々。

「嘘やる……？」

ヴィ　夕からその食器は実際には三倍だという言葉を聞き……はやては膝から崩れ落ちたという。

すべては……もう手遅れという重い現実。

後に彼女は語る。

人生でこれ以上絶望した事は……多分ないと。

追記……食いつくした食事の大半はすでにバ　ハルトは支払っており、残り十人前程をおごってもらうように最初から計画していたことを知るの、彼女が色々な葛藤を乗り越え、涙も乾き、悲壮な決意でようやく立ち上がったからのことであった。

魔王の視察（後書き）

魔王に謀をしようとしたら・・・こうなります。

彼の逆襲は・・・少々やりすぎだったのかもしれない。

一応・・・フォロー入れていますのでご安心を。

今回はバ　ハルトとディアナのある意味初顔合わせです。四人のヒロイン候補の中の一人。ここからガンガン絡ませる予定です。

そして混沌の中ディーノとも顔を合わせています。本格的な絡みはこれからですのでよろしくおねがいますね。

そろそろ、ライダーのスペックなども書かないといけませんかね。

話の中でスペックはある程度出しましたが、当然ほんの氷山の一角にすぎないですからね。

この話が落ち着いたら人物紹介といっしょに出そうと思います。

聖騎士と蒼竜 起（前書き）

かなり苦戦しましたが・・なんとか出せます。

今回は起承転結の四つでこの事件を書こうと思います。

承編までは終わりそうなのですぐに投稿します。

・・・なかなか・・重い話になってしまった。

聖騎士と蒼竜 起

それは二か月前の話になる。

「おっさん!!」

そこは管理局のとある研究所。

そこにあまりも元気良すぎる声が響き渡る。

「・・・だから、何度おっさん言うなと言えば・・・。」

パソコンを打つ手を止めて、ため息交じりに呼び方の訂正を求めるおっさんと呼ばれた研究者　マルガ。ぼさぼさの髪に無精ひげにメガネとかなり研究所にこもっていたのが判るような状態だが、人のいい優しげな顔立ちは変わらない。

彼は元気良すぎる声の発信源　ディーノの方を見る。

「だって・・・おっさんはおっさんだろ？」

「・・・このやりとり、何度かわしたのやら。」

ため息をつきながらマルガはディーノの方を見る。ディーノの目にはパソコンの画面に映っていた二体の強化服の姿があった。

「あれ？それっておっさんが言っていた。」

「・・・ああ。そうだ。まあ・・・そのプロトタイプと言った方がいいがな。」

「完成した量産型とは違うのか？」

「・・・まあ・・・な。」

そんなマルガの元に一人の男の子がやってくる。

「お父さん!!それにディーノ兄ちゃんも？」

彼はマルガの息子　アギア。優しく、整った顔立ち。銀色の髪も長く艶やか。どこからどう見ても快活な美しい女の子にしか見えない十歳の男の子。

「おっ。アギア。」

「今日お仕事休みなの？」

「ああ。可愛い妹分・・・いや弟分に会いに来たぜ。おっさんに親

友にもな。」

アギアがあいさつ代わりに拳を繰り出す。
それを笑いながらディーノは受け止める。

「コーチ今日もお願いします！」

「ああ。先に軽く身体を鳴らしてストレッチをしておけ。こっちはすでにやっているから。」

「はい！」

元氣そうに研究所の外に出ていくアギア。

「……いつも済まないな。こっちが中々かまっていられないのに。」

「文武両道という教育方針に間違わない程度にはな。まあ……女の子に見えるのを逆手に取っている節もあるし、女の子の服を平気で着て女装すると言う変な部分もある。可愛い性格もあるから、女の子にしか……見えねえな。おっさんのリクエスト通りにそれなりの男らしさも見せてくれと言っリクエストに応えてはいるが……。」

「そこまで言いかけてディーノはため息をつく。
「悪い。逆にいい美容になっている。ますます綺麗になっているぜ。」

「……強さと美しさを同時に磨いているのか……。無きあいつが美人過ぎたのか……悔まれる。」

マルガの惚気にも似た深い後悔の念に、ディーノはため息をつきながらフォローをする。

「まあ……気にするな。あんたの息子は変わっているし、可愛らしいけど、とつてもいい子だ。おっさんも忙しいのに必ず食事は一緒に取ろうとしているし、一緒に時間を作ろうとしているから……立派に父親しているぜ。」

「その息子がいつも朝も夜、夜食。そして昼の弁当まで用意してくれるのだがな。おまけに……家事まで完璧……。これだと……いつ嫁に行っても心配はないわな。」

「……心配ないわりには……おもつきり声のトーンが低いぜ。」

いつも忙しいマルガの代わりに休みのたびにアギアの相手をして
いる。

「ディーノじゃないか。今日もアギアの？」

そこにやってきたのはマルガの部下でディーノの友である男
ジュエル。

二十歳くらいで紫のウエーブのかかった髪を肩まで伸ばし、黄色
の瞳を優しげにこっちを見る。

見た目は・・・かつてミッドを震撼させたジェイル・スカルエツ
ディに瓜二つ。

しかし、職員はもちろん。ディーノもそれを全く気にしていない。
「しっかし・・・なんですかこれ？」

ディーノの視線はマルガの作った三体のパラディンの設計図があ
った。

「量産型とはまた違う・・・プロトタイプにして・・・カスタム機。
分類で言うのならインテリジェンスデバイスタイプ・・・いやユニゾ
ンデバイスに近いな。」

マルガの設計した三体のパラディン。

「・・・扱いが難しいのでは？」

「その通りだ。システムその物に自我があるようにしているから制
御は何とかなるが、彼らが認めない限り装着はまず無理だ。量産型
でも十分と思っていたが・・・最近の失踪事件があるだろ？念の為に
・・・」

マルガとジュエルの視線がガラス越しに安置されているある物に、
向けられる。

ガラスケースに安置されている三つのベルト。蒼、紅、黄。

蒼のベルト　蒼海の龍騎士ガロヴィント。蒼い龍を模したレリ
ーフになっている。

紅のベルト　紅地の戦魔人ベリガル　赤い六手、三顔の鬼
を模したレリーフ。

黄のベルト 黄金の守護者アーメイズ。 黄金の獅子を模した
レリーフ。

「君にだけ教えるけど・・・このシステムの最大の特徴はね・・・。」
2人から聞いたマルガが作った三つのベルトの最大の特長を聞いた
デイーノは呆れるしかなかった。

「・・・すごすぎますよ。でも・・・どうしてそんな強力な物をわざ
わざ。」

デイーノの問い。しかし、その問いをマルガはその問いを聞き直
してきた。

「その前にこつちからも一つ聞きたい。どうして・・・君は人を助け
る仕事についている？格闘技者としての技能も高いし、武装隊など
もつとその力を生かせる場所があったはずなのに。」

その問いに、デイーノはため息をつく。
「。。。」

その問いに当たり前の用にある答えを告げるデイーノ。
「すみません。アギアが待っているのです。またお昼の時でも！！」
研究室から出ていくデイーノ。当たり前のように応える質問に二
人はポカンと呆ける。

「・・・流石・・・デイーノ君だ。」

その背を見ていたマルガが何かを決意したかのようにパソコンに
向かう。

「・・・それが答えですか？」

ジュエルはそれを見て、呆れた声をあげる。

「希望の種はまいておきたい。いや・・・あれはすでに苗だな。」
「芽吹き、育ちつつある希望ですか。エンジェルシステムの方もそ
うなればいいのですが。」

ジュエルの言葉に心当たりがあるのか。マルガは視線で問う。
それにジュエルは沈痛な面持ちで頷く。

「・・・ディオンの状態だっただか。」

「あつちがロストロギアが絡んでいますから。エンジェルシステムの元がもと・・・。」

「そこまで言いかけてジュエルは言葉をマルガに言葉を止められる。周囲を油断なく見回す2人。どこに耳があるのか判らない状況に彼らは追い込まれていた。」

「・・・すみません。」

「気にするな。それより・・・私の身に何かあったら・・・このシステムの運用、改良などを全て君に任せたい。」

「何かって・・・そんなこと。」

「・・・多分・・・そう遠くないうちに起こる。私が開発してしまったのはそう言う物だからな。それに対する責任は・・・取るつもりだ。」

一人の科学者として、彼は決意していた。

「まあ・・・いくら同じ物を作れと言われても作れないのも事実だが。」

「・・・確かに、あれを作れたのは奇跡に近いものがあります。」

開発に携わったジュエルも、この三つをもう一度作るのは無理だと断言していた。

「私より優秀な君が断言するのなら安心だよ。」

「そんな・・・。私はマルガさんがいなければ・・・今頃・・・実験体として命はありませんでした。あなたは私の命の恩人です。まだ恩すらも返せていないのに!!」

その言葉にマルガはゆっくりと肩をたたく。

「もう一人の息子よ。頼むぞ。私の・・・アギアの事も含めてな・・・。そうだ。ディーノ達と一緒に昼を食べよう誘っておいてくれ。」

訓練風景録画してくれれば・・・嬉しい。」

「・・・わかりました。でも、その何かが起こらない事を・・・切に願っています。」

そう言っつてその場から去るジュエル。

「・・・優しい奴だ。科学者の良心をもっているからこそ・・・託せる。」

そう言っつて、マルガは再びパソコンと向き合う。

そして、そこから約二カ月後。コンペの一週間前。

科学者マルガ・スワローネは何者かに殺害される。

開発中の三つのベルトはなくなっており、彼の息子アギア・スワローネも・・・行方不明になっていた。

そして・・・コンペ会場当日に戻る。

コンペ会場に向かうバ ハルト達。

こっ・・・この男・・・かなりできる。私がこんなにも弄ばれてしまうなんて。

はやては眼前にいる男 バ ハルトについての評価を改めた。

根回しをして逃げられなくて、彼がどういった男か見極めようとしたのだが、それに対する返事が・・・強烈過ぎた。

相当な役者やねえ。まさに・・・王。手段を考えればまさに暴食の魔王やね。・・・追っているあれも暴食を司るって言っつたし・・・変な縁や。

流星のはやてもバ ハルトが魔王だとは気付かない。それだけの判断材料がないからというのがもっともな理由なのだが。

「・・・へえ。新しいプロジェクトか。」

その頃、バ ハルトはディーノと話し込んでいた。

同じ大食い同士。話のきっかけはそこから始まり、食堂のお勧め

メニューがどんなものなのかを説明し、すっかり意気投合していたのだ。

「そうか。ならまた訪れないといけないな。」

「そうですね、その時は一緒に。」

「ああ。今度は加減して二十人前くらいでやめておこう。」

「でも、・・・バ　ハルトさんが来たら、料理長卒倒しますよ。」

「それはそれで楽しみだ。」

その言葉にはやて達はぞっとする。

疲労困憊の料理長達の姿。そのうらみがましい視線をはやては一心に受けていた。

バ　ハルトに向けられないのは・・・あまりの食欲のすごさに畏怖してしまっただからだ。

そんなはやての反応を察したのか、彼は振り返る。

「安心してください。今度訪れる時は前日にお知らせをしてから、予約と言う形で行きますので。・・・そうだ。そのための電話番号も教えてもらえたら・・・。」

「は・・・うっ・・・うん。教える。きちんと教えるさかいに、もうあれは勘忍して・・・。」

はやての可愛らしい反応に満足するバ　ハルト。

この時点で、二人の力関係が完全に確立してしまった。

「バ　ハルトさん！はやてさんを弄らないでください。」

それを見かねたティアナがバ　ハルトを止める。彼女も付いてきたのだ。

バ　ハルトと言う人間の謎について、興味を持ったのが大きい。

「すまない。私も・・・意地の悪いところがあるようだ。」

怪しいところがあるが、先の騒動でティアナもバ　ハルトの人となり何となく判ってきて、容赦がなくなってきた。

「それより・・・どんなものか見せてもらおうぞ。」

「ええ。遠慮なく。見て減る物でないしな。」

会場に入る前にディーノが立ちふさがる。

「俺はここで。そろそろ準備に入りますので。」

「そうか……。楽しみにしているぞ。お前の晴れの時を」

「……はい。」

その言葉に少しトーンの落ちた返事を返す。

……ん？

それを目ざとく察するバ ハルト。

「派手にやりますので、是非見てくださいね!!」

つぎの瞬間、別れ際の言葉こそ元気だった。

……あいつ……何があったのか？

バ ハルトはディーノとは今日あったばかりで、人を知っているわけではない。

だが、それでも引つ掛かるものがあつた。

「……何かあつたん？」

「……いや。何でもない。」

はやての言葉にそう言いながら、バ ハルト達はコンペの会場に入る。

そこは巨大な模擬演習場。

上はドームのようになっており開閉が自在にできるようになっている。

中の空間も広く、単独でサッカーの試合なら二試合を同時に行える広さがあつた。

その観客席にバ ハルト達は座る。

流石に……それなりの地位にいる者達も多いな。

バ ハルトの目には地位が高いと思われる者達が次々とあらかじめ用意されている席に座る。

このプロジェクトの期待がうかがえる。

「……偶然とはいえ。見に来て正解だった。」

魔王として、遭遇する可能性が高い彼らを目にできるのはある意味幸運と言えた。

ガラス張りの観客席には管理局の三人の提督を初めとする重鎮が
ならんでおり、その中に、アーロン・スコ デイオンの姿もあった。
「来てくださったのですか？」

その隣に座ったのはゲンヤ・ナカジマ。

「そちらのパラディン計画・・・楽しみにしていますよ。こっちのエ
ンジェル計画は・・・今回はお披露目しないので。」

「まあ・・・責任者と言うわけじゃねえが・・・楽しみにしてくれや。」

そこにはそれぞれの計画に携わった二人の男がいた。

さて。この計画がうまくいけば・・・。

アーロンの不敵な笑み。

これが俺達の希望になればいいんだが。

ゲンヤの期待。

この二つがこのお披露目の席で交差していた。

一方、控室では装着者が各々ストレッチをするなど準備をしてい
る中ディーノがバ ハルト達には見せなかつた沈痛な表情を浮かべ
ながら座り込んでいた。

「やあ。」

そんな彼に話しかけてきたのはジュエルだった。

「おう。お前がどうして？」

「パラディン開発者代表代行としてね。」

「・・・そうか。」

代行。

その理由は簡単なことで、開発者代表が帰らぬ人になったからだ。
マルガの事件以降、2人が会うのはこれが初めてだった。

「・・・おっさん、この事予期していたのか？」

「・・・ある程度は・・・ごめん。」

狙われている事を黙っていた。それに対してディーノは力なく首を振るう。

「お前があやまることじゃねえよ。俺まで巻き込まれないように・・・だろ?」

だが・・・それでもディーノは憤りが晴れない。

「だが・・・なんでアギアが巻き込まれねえといけない!？」

可愛い弟分であったアギアが行方不明。それはディーノの心を痛める理由としては十分すぎる出来事だった。

捜査は全力で行われているが、行方はまだ判っていない。

「・・・・・」

その言葉に力なく黙っていることしかできないジュエル。

「・・・・・そうか。すまん。」

ジュエルの瞳には涙があふれていたのだ。悔しくて・・・仕方ないと言いたげに。

「おっさんが俺を選んでくれたのは・・身内の贖罪ではないのか?」

「それは断じてない。でも、君を高く評価していたのは事実だ。マルガさんの評価に僕もその通りだと思っている。」

「・・・そうか。魔力なんてほとんどねえから、足手まといかもしれねえが。」

「そんなこと・・ないよ。しっかりしてよ!」

ジュエルはそう言って彼の肩を強く叩き激励する。

「ああ。」

そう言って彼は立ち上がる。そして会場に向かおうとして足を止める。

「・・・・・そうだ。言い忘れていたが、お前しかいねえと思うぜ。」

「えっ?」

「おっさんの意思を継ぐのはよ。」

「・・・・・ディーノ。」

振り返った彼は笑顔だった。

お前は何のために力を欲し、そして戦う?

「えっ？」

突然ディーノの頭の中に聞こえてきた問い。

立ち止まるがその問いをしてきた相手はいない。

「どうかしたのか？」

「・・・いや、行つてくるぜ。」

ディーノは歩き出す。その背を一匹の蒼い影が見ていた。

そして・・・お披露目が始まる。

それは一斉に地を駆けていた。

全身鎧のような物々しい装甲に覆われ、黒を基調とするボディに虫を思わせる二つの赤い複眼と二本の触角のあるヘルメット。

腰には赤のラインが入ったカプセルのようなベルトが装着されている。

右太もみにジョイントしているのはサブマシンガン程の大きさのある大型の拳銃のような銃器。

足はローラースケートのようになっていて、ただでなく、足の後ろに自在に稼働する別の車輪が付いており、素早く方向転換、あらゆる地形の走る事を考えられている。

ローラーを駆使した機動はレースに出るような車が出す高速のスピードとローラースケートの様な小回りを両立させていた。

それは壁をそのまま駆けることすらも可能とされていた。場を問わ

ない圧倒的な走行性能。

彼らがある地点で一斉に並ぶようにして止まる。

足のローラースケートは折りたたまれるように消え、彼らは一斉に観客席の方を見る・

そして・・・敬礼。

ミッドチルダの科学の粋を集めて作り上げた強化スーツ。
パラデイン。

皆を守る守護者達が最新の鎧を纏った姿だった。

その勇士に、皆が惜しめない拍手を送った。

「・・・やれやれ。人間共も生意気なことを・・・」

それを映像越しに見ていたカウタ　が憤慨する・。

「一体でも並のシードなら対抗できる程度の性能はあるな。」

メギスは技術者として、力の程を的確にとらえている。

「クライムを集める邪魔されるのは勘忍してほしい。」

「ほほほっ。・・・だったらこっちから挨拶をすればよい。」

後ろからリツチが現れる。

「・・・仕込みは終わったのですか？」

「ああ。あれはいいゴーストだ。最高のシヨ　になるじゃろう。」

「そうですね。だったら・・・こっちも作品のお披露目と行こうか。

映像を全世界に配信もして、顧客へのデモンストレーション兼ねてな。それと・・・メッセンジャーも用意している。」

メギスの言葉と共に、彼の背後に銀色の人形が現れる。

「2人は存分に楽しんでくれ。こちらは次のシードの仕込みとクラ

イムの回収をしてくる。」

カウナーはそう言って、その場から去る。

『さあ・・シヨアの始まりだ。』

メギスとリツチの声が重なる。それと共に・・会場でそれは起きた。

会場の中心に突然その人は現れていた。

「オマエタチノスキニハサセナイ。」

それは血まみれの白衣を着ていた。

それは・・青白い顔で言葉を発していた。

「オマエタチガ・・オマエタチガ・・。。」

男の周りの異様な空気に会場が固まっている。

「おい。どうやってここに入った？」

そんな彼を止めようと局員が駆けよったが、それに対する答えは・
・局員の身体を貫く男の手だった。

「ぐおっ・・。おお・・。あ・・。。」

糸が切れた様に倒れていく男。その光景に会場から悲鳴が上がる。

「ハカイスル・・ハカイ・・スル・・ハカイ・・。。」

・。
」

うつろな彼の目に光が宿る。

それは理性から来るものではなく・・狂惜しさから来る・・破滅
から来る。

「なんで・・なんだ・・？」

それを見ていたディーノがパラディンの待機状態であるベルトを
装着した状態で駆けだす。ジュエルの制止は間にあわなかった。

「ディーノ!？」

「なんで・・おっさんがここにいる!？」

血まみれの白衣の男・・。それは一週間前に殺されたはずのマル
ガ・スワローネに違いなかった。

聖騎士と蒼竜 起（後書き）

新しいライダーの登場のために派手な戦いになるように仕向けました。

・・・管理局、しかも地上本部内部での戦闘は・・・我ながらさすがにいい度胸ですかね。

パラディンは二つを参考にしました。

一つはライダーファンならわかると思いますが・・・もう一つわかる人がいたらCLAMPとサンライズのコラボを楽しんだということになりますね。

聖騎士と蒼竜 承（前書き）

・・・文章大丈夫か不安です。

バーハルト「今回私の出番がないのう・・・。」

THIS「安心してください。そんな心配はしないでください。お願いですから・・・変身して私を鎖で縛らないで・・・あつゝ足元の感覚が・・・ってああああ落ちるうううう!!！」

主人公が誰なのか忘れないようにしないとその主人公に怒られそうです。

それは一週間前の夜のことだった。

「ぐっ……はっ……。」

マルガの体はバインドで拘束されていた。

身体のうちここにあざができ、血も流れている。

「いい加減……あのベルトのロックを外せよ。」

彼をいたぶっている覆面の男が見下すようにマルガを見る。

「……お前ら……あのベルトがどれだけの力を秘めているの

か……判っているのか？ぐっふ！？」

「判っているからこそ……欲しがっている。」

その言葉をふさぐように腹に蹴りを入れたのは別の男がため息をつく。

「おいおい。お前はえげつないな。」

「いたぶるのは趣味なんだ。こうして、他の連中を従えて来たし。」

彼は倒れたままのマルガを胸倉をつかみ上げ、そのまま片手で持ち上げる。

「……さあ大人しく渡せ。そうしないとお前の可愛い娘……いや息子はどうなってしまうかな？」

その言葉にマルガの目が見開く。

「お前……アギアに何を……？」

「安心しろ……しかるべきところに嚴重に保護している。協力しなければ……。」

緊急事態だ。ルシフェルシステムとミカエルシステムが姿を消した。

「何、ルシフェルとミカエルが？おいおい。せつかくこっちの人質を研究施設にぶち込んだというのに……。」

「なん……だと？」

「しかるべきところっていったはずだぜ。色々いい素材だったからな。実験体としては申し分ないはずだ。まあ・・しかるべきお上への奉公と思えばいいだろう。」

そこまで言って男は残忍な笑みを浮かべる。

絶望に打ちひしがれるマルガ。

「・・許さない・・よくも・・アギアを。」

深い憎しみを向けるマルガを平然と受け流す男。

「ロック・外れたぞ。」

別の男の言葉。

それと同時にアギアの腹部に殺傷設定の魔力の刃が刺さる。

「ぐほっ・・。」

腹部を貫通するそれは間違いなく致命傷だった。

「へっ・・そうかい。まあ・・もうすぐ部屋のロックは外せそうだし、後はデータももらえればお前には用はなくなった。残念だったな。お前の息子にはもう・・逢えねえぜ。」

男の不敵な笑みにマルガも笑みを返す。

「・・それは・・どうかな？」

その言葉の意味を知る前に彼は言葉を紡ぐ。

「さあ・・神獣たちよ・・旅立ちの時だ。」

まるで詩のような一節。

その一節とともに、部屋が爆発。

「ぬお!？」

それと共に、部屋から現れる三体の神獣。

炎と雷を携えし蒼い神龍、八本の手と三つの顔を持つ紅の鬼神、そして一角の角を持つ黄金の獅子。

父上!!

三体の獣は男を吹き飛ばし、瀕死のマルガに駆けよる。

「・・・やっど・・目覚めたか・・。」

気を確かに!!父上。

「・・・やっど・・ごうやって触れられるっていうのによ!!

・・・

・・・

・・・

・・・せつかく・・・みんなと遊べると思ったのに・・・。
「・・・すまないな。やっと自由なのに・・・こんな事になってしま
った・・・。だが・・・お前達に託した願い・・・覚えているな。」

はい!!!

三体の神獣は一致して頷く。

「頼む。それと・・・もしよければだが・・・私の息子を・・・助
けて・・・く・・・れ・・・。」

父上!!!

事切れるマルガ。

「くつ・・・何だあいつらは？」

「あれは・・・ベルトと関係が？」

覆面をつけた男が剣とカードを手にし、カードを剣の持ち手にあ
る読み込みにスライドさせる。

フアランクス・シフト。

カードが消え、男の周りに全部で五十以上はあろう、魔力弾が瞬
時に発生する。

こいつらが・・・父上を!!!

よくも・・・やってくれたな。

怒りに震える鬼と獅子。

それを止めたのは龍であった。

落ち着け。我々はまだ・・・主がない。この状態では・・・

・・・

だがよ!!!

父上の願いを忘れたわけじゃないだろ!ここで倒れたら・・・

。。

龍の言葉に悔しげに頷く二体。

「何だから知らねえが・・・こつちから行くぞ・・・って？」

そう言っつて、一斉に魔法を放とうとした瞬間だった。

三体はまるで霞のように消えたのだ。

「なっ・・・何？」

忽然と消えた三体。

おい。研究室のほうだぞ。

突然の静寂に無数の足音と話声が近付いてくる。

「・・・派手にやり過ぎたようだな。」

「・・・チィ。仕方ねえか。」

展開された魔法を消し、二人は手にした剣にカードを二枚リロードさせる。

ステルス。ディープダイブ。

カードが消えたと同時に2人はその場から忽然と姿を消す。

そして・・・部屋に入ってくる人達は血まみれで死んでいるマルガを見つけたのだった。。。

そして・・・一週間後。

死んだマルガは亡霊となって現れた。

ローラースピナ

機械の音声と共にベルトから部品が出現、足に追加で装着される形で一瞬で組みあがり、そのままローラースケートのようになる。

足のローラーを起動させ、スレイブに守られたマルガの方へと向かう。

しかし、スレイブがそれに気づき銃をディイーノの方へと向ける。

ワイドシールド。

そのベルトから出た部品が組み合わせ、左手にて盾となって装着される。

盾はスレイブの弾丸を防ぐ。その盾ごとスレイブ達の列に突撃しようとしたのだが。

「やつ・・・やべえ!？」

そのディイーノに向けて、身の丈程の砲身と人の頭が入る程の大きさの砲口をした大砲が向けられていた。

放たれる砲撃。あまりの反動に放ったスレイブも後ろに大きく後退する。

そしてその砲撃はディーノの盾に直撃。

あまりの威力に盾は崩壊。そのままディーノは吹き飛ばされる。

「ぐっああああああああ。」

吹き飛ばされたディーノに向けて大砲を向ける。しかし、そのスレイブの大砲に向けて一発の銃弾が撃ち込まれ、大砲が破壊される。

A班は盾で銃撃を防ぎながら徐々に接近。B班は銃器でA班と共に攻撃。特に盾を破壊できる大砲は優先して破壊してくれ。C、D班は観客席にて撤退の護衛。今は避難を優先しつつ、避難完了とともに反撃に映る。

その指示は・・ジュエルの物だった。片手にライフルを持ちながらパラディン達に的確な指示を出している。

ワイドシールドを構えたパラディン達の後ろ。

ガトリングユニット。

バスターユニット。

巨大なガトリング砲や、大砲を手にしたパラディン達が一斉にスレイブに向けて銃撃を放つ。

放っているのは半物質化した魔力素の弾。魔力弾と質量弾の両方の特性を持っており、それを圧縮した魔力が入ったカードリッジから放っている。

少ない魔力消費でAMFフィールドに干渉されない上に質量弾よりも高い威力の銃撃ができ、その上に弾は圧縮された魔力なので弾薬の持ち運びは極めてコンパクトに、そして軽くなったという利点がある。

その威力にスレイブは次々と倒れていく。

大丈夫か？

「あつ・・ああ。済まない。突っ走ってしまつて。」

聞こえてきた念話はジュエルの物だった。

いや、結果的にディーノに狙いが全て向いたおかげで観客

に被害はない。助かったよ。

「よかった。だが・あれは？」

マルガさんは死んだはずだ。それは・・僕がじかに確認している。

死人が現れた謎に関してはジュエルも動揺しているようだ。だが・それに振り回されずに的確な指示を部隊に出している。

研究者としてだけでなく、彼は司令官としても優秀のようだ。

とにかく、君はもとのE班にもどって。E班は高速移動しつつ、白兵戦をしかける。一気に片付ける。

「オツケイ。」

アームブレイド。

シールドナツクル。

デイーノの右手に巨大な刃を持った剣。左手には手の甲が小型のシールドになっているナツクルが装着される。

足のローラースピナ を起動させ、突撃班と合流するデイーノ。一つの班は四人から五人。

突撃班はデイーノを含めて五人。

「まったく、無茶する新人だな。」

その隊長は合流するデイーノを軽くたしなめる。

「気持ちは判るが、今は冷静になれ。・・その熱さは俺達が突撃した後にとっておけ。」

「・・・はい。」

デイーノはスレイブに守られているマルガを見る。

「・・・行くぞ！」

隊長の号令と共に、ローラースピナ を起動させデイーノ達五人は突撃する。

飛び交う弾丸の雨を縫うようにしてスレイブに接近するデイーノ達。多少弾丸は纏っている装甲と盾で防げる。

「うおおおおおおおおお。」

左手のナツクルで殴りかかるデイーノ。蒼色の魔力の纏った一撃

でスレイブが一撃で碎かれる。

とつさに別の二体が銃器から電気の放つバトンに持ち替え、ディーノを上からたたきつぶすように襲いかかる。それを見たディーノがとつた手段。

それはさらなる加速。

スピードを上げ、一回転させながらスレイブ二体の攻撃が通過する前に通り過ぎる。

通り過ぎる前に身体を回し、剣で二体を斬り払いながら。

「・・・本当にすごい新人だよな。」

数秒で三体のスレイブを倒して見せたディーノを見て隊長達や他の班のメンバーも軽く驚く。

「だが・・・突っ走り過ぎるかもしれん。みんなディーノのフォローを。」

ディーノを先頭に、他の四人が左右、後ろを固める図。ディーノの突破力でスレイブを次々となぎ倒しながら、マルガに迫る。

「うおおおおおおお！！！」

そして、ディーノがマルガへ手を伸ばせば届きそうな距離まで着た瞬間だった。

銀色の影がディーノを吹き飛ばした。

その衝撃で装備していたナックルと、ブレードが消える。

「ぐあああああ！？」

「・・・すごい執念だなスレイブどもがこんなにやられるとは。」

「システム・・・侮れんな。」

現れたのは細身で流線型の全身鎧のようなボディに刃で出来たような翼を一对背負ったアーマードと、筋肉をイメージしたような鎧に、雄牛のような角が頭から生えているアーマード。右手には牛の角のようなラムが付いている。

「なんだ・・・こいつら。」

いきなり現れた二体のアーマード。それはスレイブとは明らかに違う。

「俺たちは・・・グラディエーター。スレイブの上に立つ者 我の名はエッジ。」

「・・・ホーンだ。」

刃の翼をもつアーマード エッジ。

雄牛の角のアーマード ホーンがデイーノ達の前に立ちふさが
る。

「・・・そこをどけ!!」

デイーノはホーンに殴りかかる。

スーツの力を持って強化された一撃。

「・・・この程度か。」

しかし、その拳をまともに受けてびくともしない。

「ふん!」

ホーンが裏拳で無造作にデイーノを殴り飛ばす。

腕力だけの無造作な一撃なのにもかかわらず、デイーノは大きく
吹き飛ばされる。

「デイーノ!」

それを見た隊長が二人の部下と一緒にガトリングを展開。

それを一斉に放つ。

「ぐっ・・・ぬっ?」

ガトリングの連射される弾丸に怯むホーン。

しかし、それを阻んだのは目にもとまらぬスピードだった。

「させませんよ!」

目にも止まらぬスピードで駆け、隊長達を斬り飛ばす。

火花を上げながら倒れる三人。

そこに剛腕を誇るホーンが迫る。

「隊長!!」

デイーノが再びシールドナックルを展開させながら、右拳で殴る。
拳ではびくともしなかったホーンが強化された拳に怯む。

「良い一撃。」

ホーンが右手を振るう。

「大ぶりだ！」

その一撃をディーノはシールドナツクルでうまく滑らせて防ぐ。そしてそのまま左太ももに連結していた銃を左手に持ち、ホーンに向けて、連射する。

「ぐっ……ぬぬぬ……。」

火花と衝撃にホーンは怯む。

「これならどうだ。」

しかし、ホーンは左手をディーノに向ける。

「!?!」

左手から放たれる赤い衝撃波。シールドナツクルのシールドで防ごうとするが、防ぎきれずに飲み込まれ、吹き飛ばされる。

「ぐっ……。」

火花を上げるディーノのパラディン。ダメージが大きいのだ。

「俺もだが、そっちもかなり頑丈だな。」

それを見たホーンが呆れたようにディーノを蹴り飛ばす。

ディーノを助けるためにかけよろうとする隊長達をいたぶるエッジ。一撃を加えて素早く空に逃げるので彼らも苦戦を強いられる。

空を駆けるその速さはディーノの目にも追いきれない。

「まだ本気のスピードじゃないよ。」

瞬間的に、目にもとまらぬ速度で駆け隊長のスーツに腕から展開させた刃で切り飛ばす。

「だが……捕まえた！」

しかし、その瞬間を隊長は待っていた。刃を受け止めていたのは展開させていたワイヤーの放つアーム。そのワイヤーがエッジの腕に巻きつく。

「しっ……しま……ぐあっ!?!」

動きを止めたエッジに殴りかかる隊長。そして、エッジに弾丸を浴びせる部下達。

「おのれ……。」

ホーンが左手を向けようとして……。

「させるか!!」

それをディーノが腕に飛びかかる事で妨害される。

「なっ……貴様……。」

「今の内……一発かませ!!」

「おう!!」

ディーノの言葉共にチームの一人が展開させた巨大な大砲から砲弾ホーンに向けて放つ。

「ぐおっ!?!」

まともに命中したホーンが怯む。

「ぬう……。いい加減にあいつらを使えエッジ!!」

ホーンはエッジに向けて撃を飛ばす。

「……もう間もなくだ。」

その言葉にいつの間にかエッジが現れる。

「なっ?」

捕まえたはずのエッジがいつの間にかスレイブと入れ替わっていたのだ。

エッジはマルガの傍によると、その額に手を当てる。

「ぐおおおおおおおおアギアアアアアアアアア!!」

その雄たけびと共にマルガの身体が変わる。身体が骨のような白い外骨格と黒い闇に覆われながら巨大化。

黒い闇に白い骨が包んでいるような格好の高さ四メートルほどの骨の巨人がそこにはいた。

「ようやくゴーストの第二段階ですね。」

巨大な骨の巨人に呼応するかのように追加で出現するスレイブ。

その数は百を超えようとしている。

「あいつら……まだ……。」

避難その物は終わりつつあるが、予想外の増援に数で圧倒的に劣るディーノ達が押されそうになっていた。

その上……。骨の巨人とかしたマルガの力が半端ではない。

爪が伸び、パラディンの一人がそれに貫かれる。装甲を突き破り中の人体に達する一撃。

その一撃に倒れ伏す。破壊された装甲から血が出ている。

「ぐっ……。」

倒れた仲間をかばうように他のメンバーがマルガに向けて銃撃。

弾膜に足を止めるマルガ。その全身から黒い霧が噴き出す。

その霧に触れた地面が溶解しはじめる。それを見てパラディン達も後退を余儀なくされるが、その行く手をスレイブが阻む。

「こいつらだけじゃねえ。いでよ・メガビースト!!」

その言葉と共に地面を突き破って巨大な物が現れる。

それは巨大な鋼の獣。

小学校の水泳用プールよりも大きな甲羅から、頑丈な四つの手足、長い尻尾と長い首、首の先には嘴の様な口がついた頭。

その口が開かれ、光が集束。

集束された光が解放される。

光は地面をとかし。そのまま演習場の壁を粉々に粉碎した。

あまりの破壊力に唖然となる皆。

皆の動揺など気にする様子もなく、巨大な亀は再び口を開け光を集束していく。

しかし、それに対して真っ先に行動をした者がいた。

「うおおおおお!!」

ジェットナックル! ジェットブーツ。

その亀の頭をブーストが肘のあたりに付いた巨大な拳で殴り上げる。

肘のブーストと両足のブーストを同時に開放させた拳はトータスの頭を大きくのけぞらせる。

その反動で集束された光が上へと解放。ドームの天井に巨大な穴があく。

殴ったのはディーノである。

「……味な真似を……。トータス!」

エッジの命令にトータスの長い尾が、空中に上がり無防備になったディーノを容赦なく叩き落とす。

地面に落ちたディーノをトータスの巨大な足が容赦なく踏みつける。

「ぐっおおおおぬうっ。。。」

重い質量に悲鳴を上げるパラディンの鎧。

全身に日々の入った装甲。

それを用やなくトータスは蹴飛ばした。

「ぐああああああ！！」

バラバラに破壊されていく装甲。

ヘルメットは完全に破壊され、腕や足も一部露出してしまっている。

ダメージは大きく、ディーノは気を失っていた。

「。。。始末してあげなさい。」

エッジの言葉にトータスは再び口から光を集束。

それをディーノに向けていた。

「ディーノ！！」

「させない。」

ディーノを助けようとする仲間の前に立ちはだかったのはホーン。左手を地面にたたきつけると同時に紅い波動を放つ。

その波動は津波や突風のように彼らに襲いかかり、その足を止める。

「ぐっ。。。。。」

ようやく気がついたディーノは集束される光を見ていた。

破壊され、機能を失った鎧の重みと身体に受けた怪我が動きを阻害する。

その光を止めようと砲撃も放たれる。

放たれるガトリングの強力な弾に、大砲から放たれる砲弾。

それはすべてトータスの頭に命中している。

ディーノ！！しっかりしろ！！

ジュエルも必死に念話を飛ばしながらライフル型のデバイスから高速の魔力弾を放つ。

だが・・・トータスはそれらの攻撃に意に返さない。砲弾の衝撃は受けているようで、軽くのけぞるが、それだけだ。光の集束終わり、今まさにその光をディーノに向けて放とうとしていた。

「無駄ですよ。メガビーストシリーズ・・・トータスの装甲は戦艦を超える厚み。その上に全身をエネルギーでコーティングして、要塞並みの防御力になっています。その程度の攻撃なんてないも同然です。」

エッジが無駄な努力と皆をあざ笑う。

そして・・・光が解放しようと亀が大きくのけぞったその時だった。

凄まじい衝撃と共にトータスの背中に黒い稲妻を纏った何かが落下したのはい。

厚い装甲を誇り、エネルギーで覆われて強度が高められたトータスの背中を粉々に打ち砕き、そのまま、その巨体を地面に縫い付けたのだ。

衝撃は巨体を砕きながら地面に伝わり、地面と大気を派手に震わせながら巨大なクレーターを作っていた。

完全に破壊されたトータスの背中には落下してきた異形が立っていた。

「・・・魂無きものに名乗る名はない・・・逝け！」

その言葉と共に爆発を起こすトータス。その爆発はそのまま異形

を飲み込む。

まき散らされる破片と吹き荒れる爆風に、皆は足を止め、思わず堪える。

「・・・我は暴食を司る者。」

爆発の中その異形の声が聞こえる。

「我は冥府を司る者。」

異形は爆炎の中にいた。

「我喰らうはこの世の毒。身勝手な欲と言つ名の浅ましくも愚かしい罪と穢れ。」

爆炎の中、紅い目を光らせながら、平然と歩いていた。

「今宵は、亡者の狂おしい怨みを浅ましい穢れ達が彩っているようだ。その罪と怨みを堪能させてもらおう。」

爆炎から出てきた異形の身体を・・・赤いマントが守っていた。

「魔王・・・ベブゼブブ・・・。」

その姿を見たディーノから異形の名が呼ばれる。それと共に異形は紅いマントを消しながら、応じる。

「そう。我は魔王ベブゼブブ。暴食と冥府を司る魔王なり。」

彼の言葉に場が支配されていた。

「さあ……お前達に魔王と言う名の恐怖を味あわせてやる。」

魔王の手に現れる一丁の銃。それをスレイブに向ける。

「冥土の土産にな。」

その言葉と共に引き金。

亡者と鉄の怪物が蹂躪しようとしていた戦場に今……魔王が降り立つ。

魔王様には想定していた以上の派手な登場をさせてしまいました。今回は・・・かなり苦戦しています。少しかなと思っていました。が、新しいライダーを書くに至って苦戦をしています。

魔王に関してはこちらの願望もあるので書きやすいのですが、こっちが考えている関係上新しいライダーを出すのは必然なので・・・もっとしっかりイメージしないと。

あと・・・書いて見て思ったのですが、黒に赤いマントは合わないかもしれないですね。イメージしてみると・・・少し違和感が。

皆さんはどう思いますか？

意見次第では・・・訂正してみたいと思いますが？

またの意見、感想をお待ちしております。

小説をさらに面白くしたいのでよろしく願います。

聖騎士と蒼龍 転(前書き)

タイトル変更をしました。

やっとできた。

かなり長くなってしまったし、展開が唐突かもしれない。

この話を書くに至って、竜騎を思い浮かんだのはなぜでしょうかね？

では・・・よければお楽しみください。

???「俺は・・・お前の心を救って見せる！」

???「さあ・・・裁きの時間だ。」

魔王の乱入に二つの陣営は啞然としていた。

何しろディーノ達からしたら最大の脅威で、エッジ達アーマードからしたら止めの兵器となるトータスが唐突に倒されてしまったのだ。

「あれが・・・魔王。」

ディーノ達を初めとする管理局員の多くもその姿をみて畏怖の念を隠せない。

魔王ベルゼブブ。管理局上層部が、第一級封印指定の生体ロストロギアと認定して排除に乗り出そうとしている危険な存在。

報告だけで管理局員たちは実際に彼を見たわけではないので、しつくりとこなかった者も多かった。

だが・・・彼の登場で皆はそろって納得していた。

確かにあれは・・・危険な存在だと。

鋼鉄すら貫通するパラディンの弾丸による攻撃をものとしなかった程の装甲とパワーを誇るトータス。

彼はそれを問答無用の一撃で完全に破壊したのだ。その余波で地面には巨大なクレータ と共に地面も空気も大きく震えた。・

放たれたのは黒の電撃と超重力を纏わせた右足のキック。

技の名前はミヨッルミル・クラッシュ。ある神話で最強と言われた戦神の武器であった鎚の名を使った蹴り。

古きベルカの時代にあつた多くの質量兵器にも、一撃でこれだけの破壊を可能とする物はそうはないはずだ。

その一撃を放ち、爆発の中から名乗りを上げながら出てきた魔王。その魔王が手にした銃から放たれる弾丸。その一撃でスレイブの

一体がバラバラになる。

それに反応し、スレイブ達が一齐に手にした火器を向ける。

「・・・もうお前らの戦いは見切っておる。」

そして、彼は放たれた弾丸や砲撃の雨の中を舞うようになってきたのだ。

ある時は一回転し、ある時は飛び、ある時は細かい足さばきを見せながら。

そして、たまに華麗なステップを踏みながらから手にした銃や手で弾丸をまるで飛んできた蟲をはたき落とすかのように払う。

そして、弾丸を放ち、スレイブを確実に仕留めていた。

「おいおい・・・何で当たらない？」

意思のないスレイブ達に変わり、ホーンが思わずうめく。弾幕を張っているのに、まったく当たらないのだ。無理もない。

まるで実体のない幽霊に向けて弾丸を放っている気分になるだろう。

その言葉と共にベルゼブブは手にした銃から弾丸を放つ。

「穿つ牙。」

放たれた弾丸は空気を轟音と共に穿つ。そして、弾丸は轟音とともに軌道上にいたスレイブをまとめて破壊したのだ。

「散る飛沫。」

その言葉と共に再び弾丸が放たれる。

その弾丸は大きな砲弾のようなものだったが、スレイブ達の前でバラバラに拡散。

弾丸の雨をスレイブ達に降らせる。

凄まじい火力を誇る二つの弾丸に、スレイブ達の弾幕が弱まる。

その隙にベルゼブブはスレイブ達に肉薄。

手始めに一体を回し蹴りで頭を吹き飛ばす。

それを見てベルゼブブの傍にいるスレイブが十体ほど銃を投げ捨て、小型の剣と盾を取り出して、瞬時に構える。

「ほう・・・。接近戦に対応できるようになったか。」

スレイブ達は互いに顔を見合せずに、ベルゼブブに向けて盾と剣を構える。

「集団戦法……。強敵にはいい戦法だ。」

一斉に、しかも逃げ場をなくすように斬りかかるスレイブ達。

「だが……。我には無意味だ。」

しかし、それらを一斉にベルゼブブの肩や腰から飛び出した鉄球がついた鎖が吹き飛ばした。

「広範囲を一度に攻撃できる相手。それも自分中心に行える相手を取り囲むのは逆に悪手。それを学習させてやる。」

そう言いながら、腕から鋭い二股槍の先端を持つ鎖を飛びだし。一体のスレイブを貫く。そしてすぐに二股の槍が展開し、貫いたスレイブの身体に引っ掛かる。

それを見て好機と思ったのか、スレイブ達が銃の引き金を引く。

ベルゼブブは後ろに身体を翻しながら飛ぶ。そして、飛びながら鎖でひっつけたスレイブを入れ替わるように引っ張り、銃を向けているスレイブ達に突っ込ませる。轟音とともにスレイブ同士がぶつかり、吹き飛ばされていく。

鎖を引き、今度は後ろから斬りかかろうとしたスレイブにぶつかる。

弾丸を上へと舞うように交わしながら右、左と鎖を操り、スレイブ同士の激突を起こす。

そして、鎖を振り回し、周囲にいたスレイブをまとめて薙ぎ払う。一回りしたところで、鎖で貫いていたスレイブのボディが限界を迎え、粉々になる。

「……。意外と作りは頑丈なのだ。いい鈍器になった。」
ベルゼブブのコメントと共に、ベルゼブブの周囲にいたスレイブはすべて全滅していた。

残ったスレイブは既に四分の一程度に減っている。

彼らは一斉に火器をベルゼブブに向ける。

放たれる火器をマフラーが動き、全て弾き飛ばす。

「さて・・・終わりにしようか。」

その言葉と共に銃に収束されていく黒い稲妻。

「解き放つ黒き雷と闇。」

その言葉と共に放たれる黒い巨大な球体。

それが残ったスレイブ達の群れの真ん中にて炸裂し、全てを飲み込み、破壊する。

放ったベルゼブブはエッジ達の方を見て、ゆっくりと歩き出す。

その歩みを止める者は誰もいない。

「嘘だろ？おい・・・。」

ホーンは思わず後ろに下がってしまう。

「寒気すら・・・感じますよ。」

ベルゼブブの歩みの後には物言わぬ残骸とかしたスレイブ達があった。

デイーノはベルゼブブの強さに対する考えをすぐに変える事になった。

強い・・・魔力もそうだけど・・・純粹に実力がけた違いだ。

デイーノ達によって撃退できたが苦戦を免れなかったスレイブ達。新たに召喚された数はそれより多い。

それをベルゼブブはたった一人で、楽に倒してしまった。

しかも本人は無傷で、余裕もある。

「大丈夫か？」

倒れていたデイーノを助ける隊長達。

「ありがとう・・・ございま・・・隊長！」

そこまで言いかけてデイーノは隊長の後ろから迫る影に気付く。

隊長を押し飛ばすデイーノの身体を・・・異形と化したマルガの一撃が吹き飛ばす。

「デイーノ!!!」

マルガの一撃は纏っていた鎧をさらに壊しながら吹き飛ばされる。
「デイーノ！逃げる！」

そのデイーノに迫るマルガをかばおうと隊長達が立ちほだかる。

ガトリングユニット。

班の二人が手にしたガトリングから放たれる弾丸に怯むマルガ。

バスターユニット。

腕と一体化した大砲を出した隊長が止めにエネルギーを充電させ、それを叩き込む。

マルガの異形と化した身体が大きく吹き飛ばされ、身に纏っていた骨と闇をすべて破壊する。

「・・・やったか？」

中から出てきたマルガ。だが・・・その眼が赤く輝きを放っていた。

「・・・パラティン・・・！！」

マルガがさらに激昂。それとともにマルガの身体を黒い闇が覆う。そして中から現れたのは・・・人間大の異形と化したマルガ。

全身を覆う紅い血のような甲冑。その姿は・・・紅いパラティンのような姿だった。

足のローラーを駆使して、突進してくるマルガ。

右手にはアームブレイドが装着され・・・それを突き立てて突進。

隊長の身体を貫いた。

「・・・がつ・・・ぐつ。」

『隊長！！』

血まみれのブレイドを引き抜かれ、力なく倒れる隊長。

その隊長に駆け寄る2人の聖騎士。だが・・・その二人を紅いパラティンの左手に装着された大砲が襲いかかる。

通常より高い攻撃力に鎧を破壊され、倒れる二人。

「くそ・・・。」

それを見ながらも、立ち上がるうとするデイーノ。

そのデイーノに向けてマルガが大砲を構える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

デイーノに大砲を向けたまま固まるマルガ。

「？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・デイーノ・・・・・・・・。」

名前を口にするマルガ。

「・・・・・・・・おっさん？」

「ヤメ・・・ロ・・・・・・・・ヤメロ・・・・・・・・!!！」

光を蓄えながら震える大砲。それは照準を合わせようと言うよりは・・・勝手に定まる狙いを逸らそうとしているように見えた。

「ヤメテクレエエエエエエ!!！」

「解き放ちは黒き稲妻の鎚！」

光が放たれようとした時、マルガの身体を黒い電撃を纏わせた右足の蹴りが吹き飛ばす。

派手な打撃音と共に会場の壁の向こうに消えるマルガ。

「・・・・・・・・まさか、こんなにも早くゴーストの第三段階に行くわすとはな。」

蹴りを放った本人　ベルゼブブは立ち上がるマルガを見ながら

深いため息をつく。

「ゴースト？おっさんに何があつた？」

デイーノの言葉に、魔王は振り向く。・

「お前・・・あいつの縁者が？」

頷くデイーノに魔王は深いため息をつく。

「・・・・・・・・簡単でいいから、ゴーストの元になつた人のことを教えて欲しい。」

デイーノは簡単にだが、マルガの事を説明する。彼がこのコンペであるパラデインの設計者であり、その彼の息子と交流があつた事。その彼が一週間前に殺され、息子も行方不明になつている事もだ。
「・・・・・・・・ゴーストってなんだ？こつちも質問に応えたから、教えてくれ。」

魔王に対して、質問を返してくるデイーノ。彼の圧倒的なプレッ

シャーはよくわかつてはいたが、今はマルガが目の前にいる意味を知るのが勝っていた。

「・・・こちらの問いの対価か。いいだろう。」

ベルゼブブもその対価の為に応える。

「ゴースト。それは誰が知らんが死者の魂の名残・・・残留思念と死体をもとにして生み出された一種の魔法生命体だ。判りやすい魔法で言うなら・・・完全自立型の使い魔を作ったと思えばいいか。」

「残留思念？」

「ああ・・・。死に間際・・・酷い目にあつた。そう言った魂をゴーストとして利用するケースが多い。」

「流石に博識ですね。」

ベブゼブブの言葉に応えるのはエッジだった。ホーンとともに壁から出てきたマルガの隣に並ぶ。

「・・・お前達のような存在は初めてだがな。ゴーストと・・・シードも関係あるのか？」

「私の主と主の同士達が。このコンペに大きな危惧を抱いておりましてね。ゴーストを一体賜って、ぶち壊しに来たのですよ。全く・・・シードに対抗できる故に厄介な物を作って・・・。」

エッジの言葉はそこで止まってしまった。

その口をベルゼブブの弾丸を避けるために止まってしまったのだ。大きく避けるエッジ。彼がいた場所の空気が地面ごと抉れ、後ろの壁が粉々になっている。それを見てエッジもホーンも固まっている。

「こつちもわざわざ説明した甲斐がある。・・・やっと・・・見つけたぞ。」

放った本人は怒りを隠そうともしていない。

「ずっと探しておつたのだ。あんなふざけた事をしでかした奴らにな・・・。」

怒りに目を紅く光らせるベルゼブブ。

「待ち通しかつたぞ。加害者。今まで・・・ずっと被害者ばかりに

あつてきたからな!!」

ゆつくりと逃げ場を奪うようプレッシャーを放ちながら歩くベルゼブブ。

「くっ・・・切り札をもう一体だすぞ!」

ホーンはそう言つてベルゼブブの前に巨大な魔方陣を展開。

そこから浮かび上がるように現れるのはメガビースト トータスだつた。

「必殺技さえなれば・・・こいつで十分!」

トータスが口を開き、光をベブゼブブに向ける。

しかし、その口をベブゼブブの腰から発射された鎖が巻きつき塞ぐ。

そして鎖が高速で巻き取られ、それに乗ってベブゼブブが高速で接近。

トータスの巨体を蒼い炎を纏わせた右拳で殴り飛ばしたのだ。一撃で宙に吹き飛ばされるトータスの巨体。

「我解き放つは赤き魔剣。」

その言葉と共に左腕の鎖が解き放たれ、手に紅い魔剣が現れる。彼の足元には紅く輝く魔方陣が展開されていた。

「我が左手に宿る剣は蝕みの魔剣。」

トータスの上昇が終わり、重力に引かれて落下していく。

「すべてを蝕む赤き呪い。神すらも殺し、無に帰す。これ・・・神殺しの一撃。」

剣が紅く輝くとともにトータスの周りに紅い水晶が囲むように現れる。

ベブゼブブは紅い落下するトータスの身体に突きあげるように剣を繰り出す。

トータスの装甲を打ち破る剣。ベルゼブブはその巨体を突き上げた左手一本で支える。

「邪魔だ・・・逝け！」

その言葉と共に・・・紅い剣が輝きが消え、それと反比例するかのようにはトータスの身体が光になって分解されて消えてしまった。爆発も無く、トータスの身体は光となって消えてしまったのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

切り札をあつさり倒されたことに啞然となるエッジとホーン。

「・・・知っている事・・・すべておしえてもらっぞ。」

ゆっくりとエッジとホーンに迫るベブゼブブを押し返したのは・・・マルガだった。

足のローラーを全開にして突進し、ベブゼブブを弾き飛ばしたのだ。

「・・・苦い味だな。ゴーストと戦うのはいつも・・・。」

目の紅い光を修め、マルガと対峙するベブゼブブ。

「・・・・・・・・今・・・楽にしてやる。」

そう言って銃を向けた瞬間だった。

サークル・バインド

複数の電子音声とともにベブゼブブの足元に展開される魔道陣。

そこから伸びる無数の魔力の縄がベブゼブブの全身を拘束したのだ。

「・・・これは？」

軽くもがくが、魔力を高濃度に圧縮したバインドらしく簡単に引きちぎる事が出来ないようだ。

「第一級封印指定生体ロストロギア・・・通称暴食と冥府の魔王ベブゼブブ。」

拘束されたベブゼブブの元に現れたのは五体の天使。

身体を纏う黒のスキんに、白の装甲を纏った姿。

腰に巻かれているのは天使の翼を模したベルト。

フルフェイスの兜には白い翼を模した耳飾りと蒼い複眼の様な眼がついている。

背中には光輝く金属の翼。降り立つとマントのようになる。

「お前・・・封印しにきたぜ。」

手にしているのは剣が二人。杖が2人。ボーガンを手をしているのが一人。

剣を持った天使が拘束されたベブゼブブに向けて宣言しながら、腰のホルダーからカードを一枚取り出す。

それを剣の側面にある溝にスライド。データを読み込ませる。

シール。

それに習い他の四人も手にした武器に同じカードをスライドさせる。

読み込んだカードが光となって消え、発動される封印の魔法。無数の魔方陣が複雑に展開され、ベルゼブブを囲む。

「解き放つは・・・黒雷の鎚！」

しかし、地面にあったその方陣を黒い稲妻を纏った足で踏みつけて壊してしまった。

その衝撃で地面がへこみ、小さな亀裂が走り、軽く地面が揺れるほどの衝撃が来る。

「なっ？」

「・・・いきなり封印とは物騒だな。」

ベルゼブブはいきなり襲いかかってきた者達と対峙する。

「・・・さすがにでたらめだな。Sランクの魔道士でさえも簡単に封印できるのに、それを簡単に・・・。」

油断なく武器を構える天使達。

「・・・カードに複雑な術式と大量の魔力が込められているようだな。それを読みこませることで、通常なら発動に時間と魔力がかかる強力な魔法を瞬時に使えるようにしているか。斬新なシステムだな。」

「・・・エンジェルシステムを一発で理解しやがったよ。」

その言葉に剣を肩に担いだ天使が軽く呆れる。

「お前ら・・・もしかしてパラディンと対になっていたもう一つの計

画 エンジェルなのか？」

「・・・そこまで理解しているのか。だったら話は早い。」

そう言つて、剣を向けるエンジェル。だが・・・それに対してベルゼブブは背を向けた。

「悪いがそれは後にしてくれ。別の奴を相手にしないと・・・。」

そこまで言いかけて、ベルゼブブは素早く振り向き、腕をかざす。

「そんなの・・・関係ねえな。」

鎖を巻かれた腕に食い込むのはエンジェルの剣。

「その声・・・聞き覚えがあるな。」

「ああ・・・。覚えてくれていたのか。それは光栄だ。」

剣を弾き飛ばすベルゼブブ。しかし・・・彼は驚かずに拳を構える。

「あの時はよくも俺に恥をかかせてくれたな。その礼を今・・・してやるぜ！！」

ナツクル！

拳に突然強大な魔力が発生。肘からロケットのように噴射した魔力の勢いと共に拳がベルゼブブの顔面を捉える。

「ぐっ！？」

突然の強力な一撃に後ろに吹き飛ばされるベルゼブブ。

痛みに顔をしかめながら、ベルゼブブは思い出していた。

かつての事件でシードの犠牲者となったヘルス。そのヘルスがシ

ードを得てしまう原因を作った男　名前はガイ。

「なるほど・・・あの時の男か・・・」

拳を繰り出した左腕の小手から輩出されるカード。それが光となつて消えていく。

・・・小技だな。他の手足にも同じような機構が付いていると考えるべきか。

ガイは思い出してくれた事を嬉しく思いつつ剣を向ける。

「思い出してもらったようだな。」

「ああ。故に納得もしている。」

「なっ?」

そう言うガイに向けて立ち上がりつつも素早く接近し、拳を振り上げるベルゼブ。あまりの速さにガイも気付くのが遅れる。

「もっと・・・反省してこい!」

その拳がガイに向けられる。

「ぐっ?」

ピンポイントシールド!

左腕のカードを装填させ、超圧縮された盾を展開させた別のエンジェルが間に割り込みをかける。

盾で受け止められるベルゼブの拳。

しかし・・・そのまま押し切られ、二体まとめて吹き飛ばされた。「ぐっぐっぐっぐっ・・・でたらめな奴だ。」

地面を足で削りながら、辛うじて堪えるガイともう一体のエンジェル。

「・・・思ったよりやるな。」

ベルゼブは一步後ろに下がる。

彼が下がったと同時に、彼のいた場所に光の矢が通り過ぎていた。

「・・・連携もそれなりにか。」

フアランクスソフト。

杖を持つ二体のエンジェルが杖に直接カードを読み込ませて発動させる魔法。

それは・・・合計三ヶタはくだらない大量の魔力スファイアが発生する。

・・・特性は見抜いていたが・・・さすがに厄介だな。

エンジェルシステム。

カードと言う外部大容量のプログラム端末とカードリッジの数倍の魔力を内包した特殊なカードリッジシステムと言い換えた方がいいかもしれない。

プログラムの容量と処理速度は一流魔道士が長い詠唱をしないと発動できない大規模魔法を瞬時に発動、自在に操作できる。内包されている魔力もそれを十分に可能するだけの量がある。

弱点があるとしたら、それはカードを読み込ませないと発動的でできないという手間だ。

だが、それを彼らは十分に補う手段を有していた。

一つが手や足などにあらかじめ任意のカードを数枚装填。アクシヨントリガ など、任意にそれを発動するというものだ。

もう一つが連携。一人ではなく、常に複数で行動することによって、カードを読み込ませる時間を作ると言う事だ。

ゴーストや他の連中もまだだと言うのに・・・。

ベルゼブブは五体のエンジェルに苦戦を強いられていた。

マルガはその隙に残っていたパラディンに向かっていた。大けがを負った隊長を必死に助け出そうとしている彼らに向かって剣を突き立ててきたのだ。

「うおおおおおおおおお！！！」

しかし、その剣をディーノが止める。

落ちていたパラディンのシールドを持って。

『ディーノ！？』

「ぐぐぐぐぐぐぐうううう・・・！！！」

パラディンの強化された腕力で使用する盾は生身の人間が肉体強化無しで持つにはあまりにも重すぎる。

だが、彼はそれを両手で持ち、凄まじい突進に押されながらもマルガの狂剣を止めていた。ボロボロの身体から上がる悲鳴を雄叫びで押し殺した上で。

「早く……隊長を!!」

「……すまない!」

必死にディーノは盾で応戦する。

何故お前は戦う? 何故……皆を守ろうとする?

その彼の頭の中に再び聞こえてきた問い。

「ウガアアアアアアアアア!!」

マルガが左腕の大砲を盾に向け、放つ。

「ぐああああああ!!」

盾が粉々に砕け散りながら、吹き飛ばされるディーノ。

「ぐっ……うっ……」

そのディーノに目もくれず、パラディン達に向かうマルガ。

しかし、その足が止まる。

「やめて……くれ……。おっさん!!」

その足をつかむディーノがいたからだ。

「ディー……ノ?」

「もう……こんなこと……やめてくれ!! あんたが……作ったパラディンだろ? あんたがみんなを守るために……必死になって作った物だろ? あんたが……こんなこと……望んでいないはずだ」

ボロボロで涙を流しながら、必死に彼を止める。

「ディー……ノ……うっうっうっうっ……」

「このゴーストの縁者が。」

必死に止めようとするディーノを容赦なく踏みつけるホーン。

「がっは!?!」

「……へえ。まだこいつにも知り合いを思う心が残っていたとはねえ。あの方がそう言うように設定していたとはいえ……中々面白

い。」

エッジは苦しむゴーストを見て楽しんでいる。

「おま・・・えら・・・いい加減にしろ・・・!!」

ディーノは傍にあった銃を手にとり、ホーンの顔面に放つ。

「ぐっ!?!」

一発が彼の目に命中し、火花と爆発が起こる。そして、足が緩んだ隙に脱出。

「お前ら・・・おっさんの魂をなんだと思っている!?!一生懸命に生きたおっさんを踏みにじるようなことを・・・平気でしゃがって!」

「貴様・・・ぐっ?」

エッジがディーンに向けて斬りかかろうとした時だった。

彼らに向けて一斉に魔力弾が放たれ、その衝撃でエッジがよろめく。

「一体なに・・・が?」

そこには杖を構えた武装局員たちの姿。

「応援が来たか。」

「生意気な。」

魔力弾を受けたエッジが背中の中の翼から無数の刃を射出。それを局員達に向けて放った。

彼らはそれをプロテクションで防ごうとする。

「その程度では・・・足止めにもなりませんよ。」

しかし、放たれた刃はその盾を貫き、中の局員達に襲いかかる。

悲鳴すら上げる暇もなく切り刻まれる局員達。

「よくもやってくれたな。」

片目を破壊されたホーンがディーノに迫る。

「ぐっ・・・。」

そのディーノに向けても一人の武装局員が走り出す。手にした槍のような杖で突撃し、ホーンの腕に激突。ホーンはその勢いで倒れる。

「ぐおっ……。」

「大丈夫ですか？」

その局員は緑の髪をしたまだあどけなさの残る少女。その少女の顔が苦く歪む。

あまりにもディーノが負った怪我が酷かったのだ。生きているのは不思議なくらいにあちこちボロボロになっている。

「うっ……くっ……。」

それでも彼は立ち上がろうとしている。

「無っ……無理はしないでください。」

「そう言っている場合じゃねえぞ。」

ディーノの視線の先には立ち上がり、二人を睨みつけるホーンの姿。隣にはマルガもいる。

「逃げる……。」

「ええ。」

そう言いながら彼女はディーノを担ぎあげる。

「おい？」

「あなたも一緒です。私じゃ……勝てないけど、助けることならできそうです。」

「逃がすと思いましたが？」

行く手を阻むエツジ。ホーンと対峙する格好となる。

「……いい加減に倒れる。」

そんな二人を助けようと局員やパラディン達が向かおうとするが、その行く手を阻んだのは……マルガだった。

手にした大砲に集まった魔力を砲撃として辺りを薙ぐように放ち、駆け寄ろうとする者たちを一斉に吹き飛ばす。

「覚悟しなさい。」

「さらばだ。」

エツジが腕の刃で切りかかり、ホーンが右手の角を突き付けながら突進。

それを見てディーノはとっさに彼女を庇うように弾き飛ばす。

「えっ？」

吸い込まれるようにディーノの身体に食い込むエッジの刃とホーンの角。

それが身体を切り裂き、血しぶきを上げながら彼は倒れようとしていた。

それがお主の答えなのか？身を呈してまで……誰かを救うことが。

彼の行為に声の主は問う。

今際の際ディーノは当たり前のように応える。

「だってよお……。嫌じゃねえか。」

嫌だと？

「人の笑顔が……目の前で消えていくんだぜ？救えなかっただけで、その人だけじゃねえ、笑顔を奪った人もその人の周りからも笑顔が消える。そんなの……嫌にきまっているだろ？」

人を救う現場で彼は人の命の重みをよく知っていた。

そして、一人がいなくなると言う喪失の深さを……マルガの死で思い知っていた。

それが……答えだと言うのか？笑顔の為に前は戦っているって？

「……そう言えば……おっさんにも聞かれたよな。なんで人を救う仕事をしているのだったよ。」

それは二か月前にマルガに聞かれた問い。

格闘技者として高い実力を持つのにレスキュー隊にいた理由だ。

それに対してディーノは応える。

「俺は……少しでもみんなが心の底から笑顔になれるために……命だけじゃなくて心も救って……笑顔になるためにやっているんだ。」

マルガに対しての答え。それはマルガがいなくても変わらない。

むしろ強くなった彼の応え。

「だがよ・・・死んでしまつたら・・・意味・・・ないよな。情けないぜ。こんなことでしか人を救えなかつた。」

.....

デイーノの答えに声の主は言葉を失っていた。

「ちくしょう・・・。おつさんを止めらなかつたし・・・まだ・・・まだしたい事がたくさん・・・。」

死なせない。あなたを・・・絶対に死なせません。

デイーノの言葉に声の主ははつきりと断言した。

あなたが・・・父上の言った希望の苗だと言つた理由がよく判りました。あなたは希望。もっと大きくなり、皆を手を差し伸べる事ができる大きな希望です。

デイーノの目の前に現れる蒼い小さな龍。

「蒼い・・・龍？」

私は決めました・・・。あなたを・・・私の主に！！

それは突然のことだった。

『ぐあ！？』

蒼い一撃に薙ぎ払われ吹き飛ばされるエッジとホーン。

そして、エッジとホーンの致命的と言える一撃を受けたはずのデイーノはたっていた。

血まみれのデイーノを守るようにして空中でとぐるを巻くようにしてあらわ得たのは蒼い龍。

それを見たガイ達が動揺を示す。

「なっ・・・あの龍は研究所の？」

なんだ？あれは・・・かなりの力を・・・感じる。
ベブゼブブもその龍を注視している。

蒼い龍の出現に、場は静まり返っていた。

「我が名は・・・ガロヴィンド。」

蒼い龍は頭をディーノに向けて名を告げる。

「汝・・・我と契約し、力を得るか？」

突然の事に驚きながらも、ディーノは頷く。

「汝の名を告げよ。」

「俺の名はディーノ。ディーノ・グローディアス」

そう言いながらディーノは右手を蒼龍ガロヴィントに向ける。

その右手に触れたガロヴィントは瞳を光らせる。

それとともに二人の間に紅の小さな宝玉が現れ、それがディーノの中に吸い込まれて消える。

「契約は成った。今より私は主の盾であり、矛であり、そして・・・
鎧となるっ！！」

その言葉と共に蒼い龍が光に包まれる。

それとともに周りにあつたパラディンの鎧や数々の武器が蒼い龍に引き寄せられ、身体に吸い込まれていく。

そして光が晴れると、蒼い金属製の殻のような物に覆われたガロヴィンドの姿がいた。まるでロボットのような龍。腹や爪、角は銀色に輝いている。

蒼い龍が姿を消し、小さな箱のような物に変わる。蒼い龍の頭部を模したその箱をガロヴィン度は手にして腰に当てる。

腰に巻かれるベルト。そしてディーノの手に現れる紅い宝玉。

「変身！」

そう叫びながら、ディーノは紅い宝玉をベルトの龍の口にくわえさせる。

それと共に、ディーノの全身に現れる無数の魔道陣。

現れる無数の部品。それが組み合わさり、ディーノの身体に装着されていく。

黒いスーツの上から到着されていく蒼と銀の鎧。

頭は龍の頭を模した物になっており。龍の口に当たる部分がバイザーになっており、そこから紅い目が光を放っている。

左手は銀の盾が腕に装着され、銀の装甲に肩まで覆われ、右手には紅い宝玉の付いた小手が付いていた。

彼と助けた少女の武装局員の周りを守るように先ほど現れたガロ
ヴィンドが現れる。

「……俺は……お前の心を救って見せる。」

救世の蒼い竜騎士の誕生であった。

「……オリジナルパラディンが覚醒したというのか？」

蒼い龍騎士となったディーノの登場に、辺りは騒然としている。

「こつちもそろそろ動くでしょう。オリジナルエンジェルの力・
見せてもらうぜ。」

その様子を壊れた屋根の穴の中から見下ろす男。

手にしているのは紅い翼の天使を模したベルト。

使い方は説明したとおりだ。お前なら……使いこなせ
るだろう。

それを腰に装着する。

「プレッシャーを与えるのがうまいなミカエル。」

男はベルトに対して苦笑いを浮かべながらカードを手にする。

「変身！」

腰に装着したベルトにカードを読み込ませる。

それと共に赤き翼が舞った。

蒼い竜騎士の覚醒共にそれは紅い羽とともに舞い降りた。

身に纏っているのは黒のインナーに赤と金の鎧を纏った天使。

肩の装甲は翼のように。手甲も足も翼を模し、足は鳥の足をイメージしている。

頭は炎の鳥と天使をイメージしており炎の鳥をイメージした兜に、天使の羽飾りが左右に付いた格好となっている。

彼の左腕には炎の鳥が描かれている円形の盾。右手にはナックルガードの付いた長剣を手にしていた。

背負った紅と金の色の付いた翼からは光の粒子と共に紅い羽が降り注ぎ、ベブゼブブを囲んでいたエンジェル達に触れた途端に爆発を起こす。

「ぐあっ?」

次々と起こる爆発に翻弄されるガイ達はとっさにベルゼブブから離れる。

ベルゼブブはマフラーを翻し、降り注ぐ羽をすべて吹き飛ばす。

そして、彼は静かに、そして優雅に降り立つ。

「私の名はミカエル。」

紅い翼の天使ミカエルはホーンとエッジに向かって指をさしていた。

「さあ・・・裁きの時間だ。」

裁きを司る紅い天使が降臨。

二体の出現が。闘いが終結に向かいつきっかけとなる。

聖騎士と蒼龍 転（後書き）

オリジナルライダー。ようやく形にできました。色々な物を参考にして、こっちが妄想していたものを組み合わせようやく完成です。

話の流れも難しく、転の話では事態があっちこっちに二転三転してしまうというので、もしかしたら読みにくいかもしれません。次で終結させます。

新しくあらわれた二体の仮面ライダーをよろしくお願いします。

ちなみに二体の大本は龍はもちろん竜騎、紅翼はブレイドです。

ヒロインがまったく出ていないというものの疑問かもしれませんが、終結編で出そうと思います。

この話のあと・新しい話に変わっていきます。

聖騎士と蒼龍 結（前書き）

エクシリアを買いました！！

やってみて・・・主人公二人のやばさを知りましたよ。

しっかりしたかわいい弟君と美人で格好いいけど天然のお姉さん。
いい感じですよ。

うまく小説の執筆と並行して進めていきたいですね。

聖騎士と蒼龍 結

蒼い龍騎士となったデイーノは己の身体を見て驚きを隠せないでいた。

「なんだ・・・これ？」

「あの・・・。」

そのデイーノの背中に話しかけるのは先ほど助けた武装局員の少女。

振り返り、デイーノはその安否を確認する。

「大丈夫だったか？えと・・・。」

「わっ・・・私はヒルデ・ブリュ スター三等空尉であります。」

「そっ・・・そうか。俺は・・・デイーノ。デイーノ・クローディアス 三等陸士。」

そう言いながら、彼は後ろを見る。

「パラディイイイン！！」

魔力が充電された大砲を向けたマルガの姿がそこにはあった。彼に向けてそれ放たれる。

かなり長く集束されていたのだろう。オーバーSランクの威力の集束砲撃が広範囲でしかも、殺傷設定でデイーノ達に向けて放たれる。

彼は後ろにいるヒルデを見る。ヒルデだけではない。倒れている武装局員達にもそれはむかっている。

逃げるわけにはいかない。

デイーノはそう決意し、左手を見る。

「・・・いくよ。ガ口。」

その言葉にどこからともなく声が聞こえてくる。

「それは我の愛称か？」

「ああ。今決めた。」

「さようか。まあ・・・悪くはないか。なら・・・力を貸そう。」

デイーノはマルガが二か月前に作っていた三本のベルトの事を思い出し、その中の一つと、今身につけているベルトが同じ事に気づき、その理由を察する。

「……そうか、お前……。おっさんが作っていた三本のベルトの内の……。」

ガロヴィンドがマルガを父上と呼ぶ理由。

それはマルガが彼らを生み出したから。

察しがいいな。我らは創造主たるあの方を父と呼んで今でも尊敬している。

「……いいのか？おっさんを倒す事になるぞ？」

父上の死なら……。すでに看取っている。あれはその魂を穢れた操り人形にされているだけだ。そんなのを……。ほっておけるか？

「……そうだな。俺もそう思う。」

そこまで言つてデイーノは気を改める。

「いくよ。おっさんの魂と意思でこれ以上笑顔を奪わせない！！」

ああ……我が主！

デイーノの纏っている足にローラーが出現する。そして、それが高速で回転し、デイーノはマルガへと突進していく。

マルガはそれに対して手にした大砲を再びデイーノに向けた。

「派手だねえ。」

それと見ていたミカエル。

「おい。なんでお前がそのベルトを持つている？」

そのミカエルに剣を付きつけながら問うガイ。

「何故と言われても……。こいつに選ばれたとしか応えようがねえな。」

それに特にビビリもしないミカエル。

「ぶざけやがって。まあいい……。そのベルト回収させて……。」

アクセル。

電子音声とともに剣から展開された光のカードそれをくぐりぬけるようにミカエルは動き、動きを加速させガイを剣で斬り飛ばす。

「ぐああ！？くそ・・・。」

「・・・まったく我を忘れるな。」

斬り飛ばされた先にいたのは魔王だった。

その頭を右手でのアイアンクローにてつかむ。

なっ・・・何だこいつ・・・バカげた握力を・・・！？

ガイのヘルメットに食い込み爪。ひびが入っていき、ヘルメットが悲鳴を上げる。

「ぐっ・・・。」

とっさに足のカードホルダーを起動。

キック×2

地面をけり両足の蹴りで魔王と蹴り飛ばそうとする。

「甘い。」

しかし発動の前に、ベルゼブブはガイの身体を振り回し、それを片手で投げ飛ばす。

「ぐああああっ！？」

「強力な一撃が来ると言うのが判りやす過ぎる。もっと相手の動きを封じるなど工夫しないと我には当たらんぞ。」

他の二体のエンジェルが杖を手にベルゼブブに向かおうとする。

「悪いが俺が相手になってやる。」

その行く手を阻むミカエル。手にした剣で二人を切りつける。

トライデントキャノン×2

翼を展開させ、とっさに間合い取りながら杖に装填されていたカードが起動。合計六本の魔力砲をミカエルに向かって放たれる。

ショートジャンプ。

しかし、ミカエルの足に装填されていたカードが起動。彼の姿は一瞬にして二人のエンジェルの後ろにいた。

パンチ、フレア。

「爆炎翼」

手に装填された二枚のカードが起動。強化され、翼を模した爆炎を纏った拳。それが一体のエンジェルを爆発と共に吹き飛ばす。もう一体のエンジェルがそれに気づき、杖から魔力刃を発生させて切りつけようとする。

チャージ、アロー

「紅槍！」

しかし、左腕の盾から放たれる巨大な魔力の矢が阻む。巨大化した魔力の矢をエンジェルは魔力の刃で防ぐがそのまま押し切らせて、爆発と共に倒れる。

「ぐっ……。そっ……。」

ガイはあっさりやられた2人を見て危機を覚えていた。そんな彼に迫る魔王。

「さがれガイ！」

チャージ、ペネトレイト、スプリット。

立ち上がるガイを庇うように手にしたボウガンに三枚のカードを読み込ませたエンジェルがいた。

「スターダスト・レイン。」

三枚の効果が合わさり、ボウガンに急速に集まっていく魔力。それを上空に向けて放った。

上空で炸裂し、降り注ぐ光の矢。まるで豪雨のように隙間なく圧倒的な量で光の矢が降り注ぐ。

「ぬっ？」

それをとつさに後ろに避けてかわす魔王。

彼がいた場所には貫通性を高められた矢が地面に深い穴を作っていたのだ。素早く後ろにかわすベルゼブブ。

「うまい使いかただな。あれはさすがに防げんし、かわしきれなかった。」

数発当たってしまったのか、彼の身体を覆う黒い殻に所々に傷が付いている。

魔力を急速に集めるチャージにてスプリット似て拡散できる弾丸の量を増やし、その弾丸の威力を貫通力の強化の効果があるペネトレイトで上げる。

その結果生まれたのは小さいな貫通力に特化した魔力弾の雨。防ごうにも貫通力の高さが防御を貫き、回避にも豪雨のような弾幕がそれを不可能に近い状態にする。

「・・・そう言う使い方があるのか。」

ミカエルもそれを見て驚いている。

「・・・フェイズ。助かったぜ。」

「思ったより全然効果なかったが・・・お前から礼を聞ける日が来るとは思わなかったから良しとする。それより撤退だ。」

ボーガンを手にしたエンジェル　フェイズはガイを助け起こす。「このシステムの改良の必要な点が判ったからな。」

三枚のカードを読み込み同時に発動させたボウガンに亀裂が入り、小さな爆発と煙を上げている。

それ以外の二人のエンジェルも鎧にダメージを受けており。亀裂が走っている。

「・・・チィ。実戦テストは終わりかい。あわよくば封印したかったのよ。」

ガイは毒づきながらカードを剣にスライドさせる。

リターンポイント。

それと共にガイの足元に魔道陣が展開。

そこに三体のエンジェルが集結する。

「まだ本番じゃねえ。首を洗ってまってやがれ。」

ガイの捨て台詞と共に五人の姿は消える。

突撃するディーノは放たれる砲弾を交わしながらマルガに肉薄しようとしていた。

「させませんよー!」

そのディーノの突進を止めたのは、エッジ。空中から素早く接近。エネルギーを纏った状態で突進してきたのだ。

「ぐっ。」

真正面から左腕の盾で受け止めるディーノだが、あまりの突進に押される。

「ぐっぐっぐっ。。。」

足のローラーが空回りをしながら、その拮抗し始める。

「邪魔・・・するなああああああ!!..!」

「なっ・・・なんてパワー!?!」

その拮抗はやがて押し返す方へとシフトしていく。

「させん!」

拮抗の中に割り込んでくるのはホーン。

横から突進して角を付きつけようとする。

しかし、そのホーンを吹き飛ばしたのは・・・黒い鉄球だった。

「・・・ようやく、こいつらを喰らえるな。」

腕から鎖につながった黒い鉄球を飛ばした魔王がゆっくりと歩いてくる。

「なっ・・・くそ・・・あの天使どもはいないから・・・。ぐあ!?!」

それを見て焦りを見せるエッジにも横からミカエルの蹴りを受けて吹き飛ばされる。

「・・・余計な事をしたか?」

「いえ。ありがとうございます。」

「あっ・・・ああ。」

ディーノのストレートな礼に面を喰らう格好となったミカエル。

「魔王さんも先ほどの事も含めて・・・本当に助かりました。」

「・・・魔王にも礼とは・・・罰があたってもしらんど。」

その礼を受けつつも、あまり言わない方がいいとくぎを刺すベルゼブブ。

「魔王であっても人の好意に礼を言って罰を与えるような、心の狭い神様ってこっちはいやですよ。」

「なら・・・一応受け取っておく。災いにならなければいいのだが？」
三人は立ち上がっていくホーンとエッジ、そして砲撃を放つてきたマルガと対峙する。

「・・・すみません。おっさんは俺とガロで止めさせてくれ。」
その言葉に首をかしげるミカエル。

それに対してベルゼブブは納得したように頷く。

「とても苦い味になるぞ？それでもいいのだな。」

「・・・でないと、おっさんの子であるガロも・・・納得しないし、俺も納得しない！」

迷いのない一言に、ベルゼブブは軽く驚く。

すぐに驚きを改め、少しまぶしそうにディーノを見る。

「・・・余が魔王なら・・・お主はまさに・・・勇者か。」

「えっ？」

「いいだろう。お主の勇氣と・・・温かく真つ直ぐな心は我にも響いた。露払いは任せてもらおうか。」

魔王傍にいたミカエルにも話しかける。

「お主も無粋なことはいらないよな？変身も今回が初めて故に無茶はしないと思うが・・・。」

「・・・気づいていたのか？」

「まだ、その剣も改良が必要であろう。一度に使えるカードは二枚三枚一度にはまだ器が耐えられぬようだしな。」

ミカエルは魔王の見解に、動きを止め、やがて諦めたようにため息をついた。

「・・・恐ろしい洞察力だな。確かに・・・この剣は未完成だ。だが・・・決め技自体は一応用意している。」

一枚のカードを腰のホルダーから取り出して見せるミカエル。

「・・・凄まじい魔力がこめられておるな。なら・・・あのデカイのを相手にしてもらえぬか？良的になる。」

「・・・お前にあいつが倒せるのか？」

ミカエルは速度に特化したエッジを指す。

「大丈夫だ問題ない。ただ・・・そこそこ速いだけだ。」

「来るか・・・。」

ホーンは左手に紅い波動をためながら駆けだすミカエルを睨みつける。

「だが・・・堂々正面からとはいいい度胸だ・・・な？」

余裕を持ったホーンは次の瞬間言葉を失った。

シャドーコピー。

駆けだしながらミカエルが手にしたカードをスライドさせると同時に発動したのは分身の魔法。

駆けるミカエルが一気に十人に増える。

「おっ・・・おのれ！こうなったらまとめて・・・。」

左の波動を放とうとしたが、その前に一体のミカエルが斬りかかる。

それを皮切りに、一気に他の分身も斬りかかってきたのだ。

「ぐっ・・・はっ・・・なっ・・・これは幻影ではなく・・・実体だというのか？」

縦横無人に斬りかかるミカエル達に翻弄されるホーン。三体同時に斬りかかれ、大きく後ろに下がったところで、カードの効果が切れてミカエルは一体だけになる。

「・・・審判の終わりがやってきたようだな。」

腰のホルダーからとりだしたのは、天使の羽とリングの意匠が描かれたカード。

それを剣にスライド。データを読み込ませる。

ファイナル・バニッシュ

カードの効力が発動すると同時に翼が光輝き、背中に天使の輪のようなリングが二重に展開される。

カードから展開された魔方陣が炎となり剣に収束されていく。集ま
つていく炎の量は尋常ではなく、漏れ出る力だけで、軽く地面を削
り取っている。

「ぐっ……。」

とっさにホーンが左手の波動放ち、ミカエルを止めようとする。

しかし、ミカエルは手にした剣でその波動を切り払う。

そして、剣を右肩に担ぎ左手で十字を切ると、目の前に十字の紋
章が洗われる。

「終焉の十字加。」

十字の紋章がミカエルの身体に宿り、全身を黄金の光が包み込む。
翼を広げ、背負ったリングから力が放たれ、高速で突進するミカエ
ル。

そして、剣を振りかぶりすれ違いざまに切り裂く。

「がああああああああ。」

十字に切り裂かれたホーンは切り口から炎を吹き出しながら絶叫。

ミカエルは後ろを振り向きもせず罪状と……判決を告げる。

「人の希望を踏みにじり、あまつさえ死者の心を弄びし者。お前に
下る判決は……これだ！」

ミカエルが指を鳴らす。それと共に十字の切り口が光を放ち、ホーンは爆散した。

「しかし・・・これも負荷がすごいようだな。」

必殺技を放った後の剣を見る。刀身がボロボロになっており、所々亀裂も走っている。

要改良ですね。

「・・・面倒くさいがしかたないか。」

リターンポイント

その言葉を残し、ミカエルはカードをセット、その場から姿を消した。

後に残った紅い羽は地面に舞い落ちたと同時に紅い光となって淡雪のように消えた。

ホーンが倒れたのをエッジは見ていた。

「ぐっ・・・まさかこんなにあっさり。」

動揺を示したいエッジだが、それを許さない相手が彼の目の前にいた。

「・・・強力だが、剣がまだ持たないようだな。」

それは魔王ベルゼブブ。

エッジと対峙しつつもミカエルとホーンの戦いを見る余裕すらある。

おそらくホーンと一緒にでも確実に敵わない。

撤退ですね。

エッジは翼を広げ、この場からの離脱を試みる。

だが、その彼を不可視の壁が阻む。

「なっ・・・これは結界？いつの間に・・・。」

「お前を逃がすつもりはない。」

足元に紅い黒の魔方陣を展開させたベルゼブブが冷徹に銃口を向

ける。

「穿て。」

「くっ……。」

とっさに避けるエッジ。その速度は瞬間移動したかのような速い。「その程度の攻撃、当たるわけないでしょう。」

そう言っではいるが、焦って必要よりはるかに長い距離を飛んだ事からしても彼に余裕は全然ないようだった。

「……速いな。だが……お前の強みは我には意味がない。」

「言って……くれますね。」

エッジは余裕がない状態で挑発を受け。高速でのベルゼブブに斬りかかる。

ベルゼブブの殻に浅い傷が入る。

「ふん。意味がないって言っても、私の速さには……なっ？」

エッジが言葉を失ったのはベルゼブブの身体に傷を入れた腕の刃が粉々になったからだ。

「この程度の傷を与えるのに獲物を失うと言うのでは話にならないな。」

「

「くっ……この……。」

格の違い。実力だけでなく、存在その物に大きな差があるように思えた。

「……今回は特別だ。我の切り札をもう一つ見せてやる。」

「解き放つは白き神槍。」

呪文と共に左足が白い風と共に戒めが解放される。

「我が左足に宿る槍は必中必貫の神槍。」

左足先が槍のように鋭くなり、スライドした脛の殻は白い電撃と風が吹き荒れ、左足全体を纏う。

「ひとたび放たてば稲妻のごとく相手に喰らいつき、貫く……」
れ……神々の切り札。」

「ぐっ……。」

「飛び上がるベルゼブブ。」

エッジは姿が消えるほどの動きでランダムに動きまわり、それをかわそうと試みる。

しかし、それは無駄な試みだった。

左足が向けられた瞬間、動きまわっていたはずのエッジの身体に刺さるようにして固定される白い光の槍。

刺さった槍は展開され、円錐状になる。

「なっ……に?」

エッジに固定された槍に向けられる左足。

ベルゼブブの全身が高速で回転し、左足を穂先とした白い槍と化していた。

その足がエッジの身体に刺さった槍に吸い込まれるように刺さ、その体をぶちぬいた。

白い光の残光を纏わせながら、地面に降り立つベルゼブブ。

空中では身体に大穴があいたエッジが空中に固定されていた。

「こっ……これが魔王の力……だとおおおおお？」

全く歯が立たなかったベルゼブブの実力に絶望の声をあげるエッジ。

「その断末魔……お前達の主へ轟かせながら……逃げ！」

「ああああああああつああつあ……！！！」

白い残光を振り払うように空を切ったと同時にエッジは爆散した。

マルガの全身から放つ黒い闇が触手のように伸ばされる。それをローラーによる高速移動をかわしながら、ディーノはマルガの頬を殴りつけた。

「ぐっつっつっつうう……。」

高速の突進からの拳によるめくマルガだが、堪えてディーノに大砲で殴りかかる。

「ぐっ！？」

そして、マルガは手にしていたアームブレードでディーノに斬りかかる。

それをディーノは左腕の盾で受け止める。

「おっさん……。」

「ディーノオオオオオオオオ！！！」

父上……。

雄叫びと……纏っている甲冑の目の部分から漏れる涙。

それを……二人の心に突き刺さる。

「うおおおおおおおおおお!!」
右拳に蒼い炎と稲妻が纏われる。

そして、それをディーノは雄叫びと共にマルガの胸に容赦なく叩きつけた。

碎かれる胸部の装甲。そして吹き飛ばされるマルガ。

「パラディイイイーン!!」

胸の装甲を破壊されながらも、マルガは拳銃を構え、それをディーノに向けて放つ。

放たれる半実体の魔力弾にディーノは受けた部分に衝撃を受けるが、ずっとその場に立ち続ける。

拳はただ・強く握りしめられていた。

弾丸を受けながら彼は歩き出す。

弾丸を受けながらも歩みを止めないディーノに狂ったように弾丸を撃ち込み続けるマルガ。

そんな彼に接近し。ディーノは拳を振り下ろす。

「グアアアアアアアアアア!!」

それに負けじと殴りかえるマルガ。

しかし、いくら殴られてもディーノはその拳を身体で受け、そしてそのまま相手を殴る。

細かく震えるほど強く握りしめられた右拳でマルガを殴り返したのだ。

「ぐおっ……。」

マルガがよろめくたびに、その右拳は振り下ろされる。

何度も受けマルガの足が震えだす。

「ぐおおおおおおおお!!」

雄叫びとともに地面を踏み砕き、最も力を込めた右拳を叩きつけるディーノ。

その一撃にマルガの仮面が破壊され、倒れる。

仮面の下にあったのは・マルガの素顔。

理性のない瞳から涙を流しながら虚空へと手をのびしながら、

「アギア・・・アギア・・・。」
「・・・くっ・・・。」

デイーノ！目をそむけてはならぬ。

ガ口の叱咤はデイーノの背けていた目をマルガに再び向ける。

「アギアアアアアアアアアア」

マルガは絶叫しながら手にた大砲に魔力に急速に集めていた。

終わらせてやってほしい。父上の気高き願いと誓い、そして息子への愛をこれ以上汚したくない！

「・・・わかった。」

デイーノの右腕から光の剣が伸びる。

やり方は・・・判るか？

「やり方は・・・頭の中に思い浮かぶから・・・大丈夫。」

デイーノはベルトの龍頭の部分を押す。

それはまるで龍が口にくわえた宝玉を飲み込むような仕草だった。

イグニッション・ファイナル

それと共に右手の光の剣が大きくなり。腕全体を飲み込みながら、巨大なランスとなる。

背中から歴大な蒼い魔力の奔流が翼のように噴き出す。脚にはスピナが展開。そこにも蒼い光が羽のように噴き出している。

彼は巨大な槍となった右腕を引く。

反対に左手は前にかざし、そこから龍鱗の盾が展開される。

「うがああああああつあああああ！！」

そのデイーノに向って放たれる集束された放射型の砲撃。

それに向かって蓄えたバネを開放、右手を突き出しつつ。ディーノが駆ける。

通常をはるかに超える速度で駆けるロードスピナ。その突進をさらに背中から噴き出した魔力の翼が加速させる。

その加速は一瞬にて、音速を突破するまでに高められる。

次の瞬間・・・彼の右手はマルガの胸を貫き、そのまま壁にめり込みながら縫い付けられていた。

「がっ・・・はっ・・・？」

あまりにも速い突進は、砲撃を一瞬似てぶちぬき、そのままマルガを貫いたのだ。

はたから見たら、消えたと認識した時には轟音とともにマルガが壁に縫い付けられていたとしか見えなかった。

闇が光へと分解され始める。

光となつてマルガは消え始めていた。

「・・・ようやく・・・解放されたよ・・・」

そのマルガの瞳には理性の光が戻っている。

「多くの人を・・・殺してしまったようだな。これでは地獄行きはまぬがれぬよ。」

「おっさん・・・。」

「しかし・・・可能性として考えてはいたが・・・お前がガロヴィンドの相棒になるのを見て・・・驚いたよ。」

その彼を看取るように蒼い龍もその姿を具現化させる。

父上……。約束……。必ず果たします。

「ああ。俺たちはアギアを助ける。ガロに託したおっさんの願いも・
・必ず遂げて見せる。だから・安心してくれ。」

デイーノの言葉にマルガは安堵の笑みを浮かべる。

「しかし・二度・ガロに看取ってもらえると言うのも変な物だ
な。そう思うだろ？ ジュエル。」

振り向くとボロボロの白衣をライフルを持ったジュエルがマルガ
の傍に来ていた。彼だけではない。他のパラディンや無事な魔道士
達もそこにはいた。

「……マルガさん……。」

ジュエルはマルガの手をとる。

「……ふふ。今度は多くの人達に看取られると言うのか。」

それを見て、マルガは泣きそうな笑みを浮かべる。

「ジュエル……うまくやれているようだな。この調子で……頼む
ぞ。」

「はい！」

「デイーノ……。ガロと一緒に頑張ってくれ。お前たちなら……こ
の力の意味はわかっているはずだからな。」

「はい。」

父上も……安らかに……。

それに満足したマルガの視線が黒き魔王を捉える。

彼は何も言わず手で十字を切り、異形の姿なのにもかかわらず、
不思議と優しさが伝わる頷きをする。

みんなを……よろしく願います。

彼がどういった存在か、先の戦いとその仕草だけで直感的にマル
ガは理解する。

だからこそ……視線と念話で彼に託した。

それを受け取った魔王は少し固まり、小さく頷く。

マルガはそれに満足したのか、天を見上げる。

「本当なら・・・まだ・・・したい事はたくさんあった。しないといけない事はまだ・・・たくさんあった。アギアも・・・助けないといけないのに・・・私はもう・・・終わりだ。」

消えていく光の中、彼は最後に無念を語る。

「だが・・・今それを託せた。それだけでも、私にとって救いだ。」
完全に光となって消えるマルガ。

ありがとう・・・みんな・・・頼んだよ。

その言葉を残して・・・。

それを見て・・・ジユエルは堪えていた涙を爆発させるように流す。
デイーノも仮面の下で嗚咽を堪えていた。

嗚咽が聞こえるのを見て、ベルゼブブは意心地の悪さを感じていた。

彼はマルガの事をしらない。

だが、彼がどれだけ慕われていたのかだけは判っていた。

涙を流す義理はないが・・・ゴーストとなったマルガと言う男に
対して、彼は尊敬の念を込めて簡略な祈りをささげる。

この場にいるのは・・・無粋だな。

背を向け・・・何事もなかったかのように魔王はその場を去る事にする。

「・・・待てよ。」

しかし、その足を止めたのはデイーノだった。

マスクをとり、涙をぬぐいながら魔王と対峙する。

「あんた・・・なんで助けてくれた？俺達管理局は・・・お前を第一級封印指定のロストロギアとして敵対する形になっている。それを・・・どうして？」

「・・・。。。。。」

魔王　ベルゼブブはその問いにしばし黙り、そして短く応えた。

「魔王の気まぐれだ。それ以上も・・・それ以下もない。」

突き放すような言葉。それでもディーノは言葉をかけようとする。だが、それを阻むようにベルゼブブは言葉を続ける。

「故に・・・礼をされるようなことは何もしていない。」

魔王は皆に背を向ける。

「でも・・・。」

「我は魔王だ。正義の組織が魔王に制裁を下しても、感謝を送ることはあつてはならない。間違つた事は何も言っていないはずだ。」

魔王はそのままその場を去ろうとする。

魔王の言葉に場にいた皆は何も言葉を発することはできない。

「それでもよう・・・。」

ただ一人・・・ディーノを除いて。

「あんたが俺たちを助けてくれた事実は変わらない。それに対して礼を言わないのは筋が通らない！だから・・・ありがとうな。」

「・・・。」

再び立ち止まることになるベルゼブブ。

「ヤツには驚かされるな。」

「・・・私の足を二度も止めるか。さすがだ。勇者よ。」

「・・・・・・勇者？」

ベルゼブブは振り返りつつ、ディーノを指さす。

「お主のことだ。蒼き龍の勇者「ブレイブ」よ。」

「・・・へっ？俺？「ブレイブ」って？」

啞然となるディーノ。

「礼が言いたいのなら、代わりにこっちが即席で考えた二つ名とその姿の名を送つてやる。この魔王が直々に付けた名だ。使うがいい。」

「驚き戸惑つディーノを見て満足したベルゼブブはマフラーを蟲の羽に変化させて空を飛ぶ。」

「・・・我としたことが・・・らしくないことを・・・。」

飛び立つベルゼブブの背に向けて、やけくそ気味の叫び声をあげ

たのはディーノだった。

「ああ・・・もう上等だ！今度会った時、そのまま名乗ってやるから覚悟しとけよ！！」

・・・面白い奴だ。次会う時の楽しみが出来てしまったよ。

ディーノと言う男を気に行った彼はどこか満足した様子で姿を消した。

これはのちに地上本部襲撃テロとされ、大きな事件として扱われ、大きな犠牲と被害を出した痛ましい事件として管理局全体を震撼させることになる。

この事件で覚醒した蒼き龍の勇者の名は畏怖され始めた魔王の直々に付けた名ということですぐに浸透してしまったという。

聖騎士と蒼龍 結（後書き）

なんとか形にできました。

あと・・・この事件の後日談を書いて次のステージに進みたいと思います。

バ ハルト・・・実ははやてに目をつけられている。

ディーノとの接点とバ ハルトと表、裏の顔でも接点ができたという点が次のステージのキーとなります、

結成、特務六課 凶悪犯罪特殊捜査班 (前書き)

バ ハルト「うむ・・確かにカオスだ。」

長いトンネルを抜けてやっとできました。新しい話。

新しいステージに入ります。

新しいキャラが出てきます。

ここから

結成、特務六課 凶悪犯罪特殊捜査班。

聖王教会にて一人の青年がカリムに呼び出されていた。

「……一体なんのようだ？」

都市の頃は十代後半。おそらく二十歳前。真面目とは縁遠いなれなれしい口調。黒を基調とする騎士の衣装も着崩し、その上から紅い革のロングコートを羽織っている。ぼさぼさの銀髪。赤い瞳の顔は野生みを帯びているが、どこかニヒルな笑みが似合う青年だった。左腕は大きなガンドレッドのような物で覆われており、フィンガーグローブをしている右腕とは違って、一切肌は見えない。

「まったく、相変わらずですね。」

それを見てシスター・シャツハは呆れていた。それを見ていたカリムはくすくすと笑っていた。

「本当にアコズと仲が良い理由がよく判ります。いつも弟が迷惑をかけているみたいですし？」

何しろ彼は幼馴染で年上で、兄貴分であるアコズと教会内で色々といたずらをしており、今でも色々悪い遊びをやっている仲だ。そんな彼らを鉄拳で教育したのがシャツハ。

そして言葉と無言の威圧で逆らえないようにしたのが……カリムだった。

「わりい。でっ……俺を呼び出したのはなんでだ？」

「……あなたに出勤をお願いしようと思つて。」

「出勤？騎士団のはみ出し者の俺を？」

「……はみ出し者っている自覚はあるのですね。」

彼は騎士団の中ではみ出し者で有名だった。規則は守らない、協調性がないなど……騎士らしくない青年。

「まあ……実力の高さは折り紙つき。捜査能力も極めて高い……ただ……協調性がないのがねえ……。」

「ほんとう……に。やんちゃが過ぎるところがあるといつのでしょ

うか？人当たりはいいけど、騎士の規則や礼義がねえ……。」

「……本人を前にそんなこと言うんじゃない。」

言いたい放題の姉代わりの二人に彼は深いため息をつく。

「それより……何で異動なんだ？一体どこに？」

男の問いに二人は表情を改めて問う。

「地上本部で起きた事件はしっているわね？」

「……知らねえわけねえだろ？」

地上本部で起きたテロ。そこには聖王教会の人間も多数巻き込まれていた。そして……その中にはパラディンの装着者として選ばれ、その事件で命を失った男の友もいた。

その上シードに関係する事件でも男は身内を失っていたのだ。

それを思い出したのか……怒りを微かだがあらわにする男。

それは獰猛な獣、または悪魔を思わせる激しく、恐ろしいものだった。

「すみません。配慮が足りなかったわね。」

「……いや。こつちもをわりい。しかし、その話しが出るっていう事は……あの事件を追えるのか？」

「ええ。お願いできないかしら？私達の妹分が結成させる部署なんだけど？」

その部署についての説明を受け、男は……めんどくさそうな表情をする。

「はやて……さんの部署か……。あの人……少し苦手なんだよな。」

はやての部署と言う事を知り、表情をひきつらせる男。

「苦手？それって……照れているの間違いじゃないの？結構気があっているように見えるけど？」

「……って、なんであの狸女と気なんてあっていねえよ。」

カリムのからかい交じりの言葉に、少しだがむきになって否定する男。その顔は少し赤いのをカリムは見逃していない。

それをシャツハすらも笑みを浮かべるが、すぐに表情を改める。

「それで、この話を受けるの？」

男はその問いに関してとはとくに答えは出ていた。

「はい。騎士・・・ハイル・ネ・レッドファンク。このたびの異動・
・謹んで受けさせていただきます!!」

ハイルの言葉に、二人は安堵した様子を見せる。

「はやてによりしく伝えておいてね。」

「・・・・・・・・出来れば、伝えないでくれ。俺は俺で勝手に・・
」

「だめよ。あなたを指名したのは、彼女だもの。」

その言葉にハイルは顔を真っ赤にしながら、顔をひきつらせる。

「・・・・・・・・やっぱり今は無しに・・・・。」

「音声了承はすでにとっています。それに書類や引越準備も、
実は手配済み。もう決定は覆せないわよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ハイルは天を仰ぎながら思っていた。

カリムとはやてが仲が良い理由。それは相手の逃げ道を封じて、
自身の思い通りの道へ向ける事に長けている事がとても似ているか
らなのかもしれない。

その目的は善意だろうが、やり方が少々えげつない。

「・・・・・・・・わかったよ。」

それ故に、ハイルはカリムには頭が上がらない。そして・・・は
やてにも。

そんな形で半ば強制的にはぐれ騎士が参戦することになった。

そして次の日。

ティアナが新しく創設される部署に向かっているところから再会
と出会いが始まった。

「・・・・・・・・今度はどんな人達と組むことになるのやら。」

彼女は魔王と直接の接触を持った事のある数少ない人間。

それに優秀な執務管であることと、過去に機動六課にいたということから彼女も新しく設立された部署に招かれた。

「・・・特務六課・・・」

シード事件の解決のために八神はやてによって設立された組織。過去に機動六課にいた人物たちも召集し始めている。

ティアナと後で来る事になるがフェイトも合流する予定になっている。

「捜査アドバイザーに外部から人を呼んでいると聞いているけど・・・どんな人なんだろ？」

「あれ？ティアナさん？」

廊下を歩いている彼女に話しかけてきたのは、本部内で有名になってしまった青年だった。

「デイーノ君？」

茶色の制服を着たデイーノが肩に御供のガロヴィンドを乗せてながらティアナの傍にやってくる。

「久しぶりね・・・。えっと・・・。」

デイーノの肩の上にいるガロヴィンドの方に視線が向けられる。

ガロヴィンドもティアナの視線に気付き、宙に浮きながら挨拶をする。

「お初にお目にかかります。ティアナ執務管。名前は・・・名乗らなくていいですか？」

「ええ。もう有名人だからね。あんたらは・・・。」

2人は歩きながら、近況を報告しあっていた。

デイーノの方はゲンヤを初めとする多くの人達のおかげで、何とか地上勤務にとどまる事ができ、その過程でこの機動六課の主戦力として配属される事になった。

ガロヴィンドは準ロストログア扱いで、その力はマスター登録されたデイーノしか発揮できないことなどだ。

ティアナは、シード事件がミッドだけでなく、他の次元でもひそかにだが発生していること。

そして・・・その解決を謎の黒の怪人が行っている事。

「それって・・・あの魔王ですか？」

シードと戦っている黒の怪人、それに該当する相手は一人しかない。

「・・・それ以外に考えられない。どうやってか知らないけど、シードの活動を感知できるみたいで、彼がいつも先に事件を処理している様子があるわ。昨日も第二世界でシードの活動と、あいつがそれを倒したのを確認したわ。」

「・・・」

「・・・シードは何かしらの手段で人間を怪物化させられた存在。それを自ら進んで狩っている理由がまだ判らないのよね・・・」

ティアナの言葉に思うところがあるのか、ディーノは思案する表情を浮かべている。

「・・・魔王と会った感想はどうだった？」

「・・・ティアナさんが言っていた印象が良く判るような気がします。問答無用で畏怖してしまうくらいの底知れなさをもっていました。でも・・・悪ではないと思います。」

「悪じゃない？」

「・・・シードになっていた人を・・・被害者って言っていました。ずっと加害者を探していたと・・・彼は言っていました。」

「・・・」

シードになった人をベルゼブは被害者として扱っている。それを倒すのは決して愉快なものではないはずだ。

「・・・多分、おっさんをこの手で倒した俺と同じ気持ちなんじゃないかと思います。程度までは判りませんが、決して小さくない痛みをこらえて・・・犠牲者であるシードを倒していると。出ないと・・・あの二体のロボットに対して見せた怒りが・・・説明付きません。」

「・・・そう・・・かもしれないわね。」

ベルゼブの尊大な態度とそれに見合う畏怖するような気の中から見え隠れする深い悲しみ。

その一端を、ディーノは推察していたのだ。

「……凄まじい実力と変わっているが空気を読める性格を持った存在と思っていたが、主はそこまで考えていたのか？」

ガロヴィンドの方もディーノの意見に軽く驚いている様子だ。

「考えていたというよりは……直感に近いよ。まあ……直感次いでだけど、あの魔王は少なくともその力を身勝手な事に使うことはないと思っっている。ガロも気付いていると思うけど、すごく気高いみたいだし。」

「……。」

前あつた時と別人みたいね。

ティアナは以前にスバルに紹介してもらった時よりもディーノは精神的に強く、そして鋭く成長していた。

蒼龍の勇者「ブレイブ」か……。

ベルゼブブがディーノとガロヴィンドに送った二つ名。それも地上を中心に有名になりつつある。

あの事件の唯一の希望は……勇者が生まれた事だという人達も少くない。

あのベルゼブブが認め、名前を送った初めての相手。第一級封印指定生体ロストロギアとして危険とされている魔王ベルゼブブの存在が大きいだけに、その二つ名の重みも大きい。

「あべし!?!」

だが、その勇者が突然開いたドアに鼻柱をぶつけて悶絶しているディーノだと知る者はあまりいない。

「……本当に勇者なのかな？」

先ほど見せた鋭い洞察とあまりに間が抜けている光景のギャップに真面目に考えているのが馬鹿らしくなったティアナ。

「すまん。大丈夫か……って……。」

開けた相手にティアナはさらに驚く事になる。

「……なんで……あんたがここにいるのよ？」

「……あの事件以来か。それほど時は立っていないが久しいな。」

ドアを開けて出てきたのは、捜査員の茶色の制服を着たバ ハルトであった。

「……はあ！？なんで、民間人のあなたもスカウトされたの？」

これは捜査員の制服を着ている事に対するバ ハルトの答えに対するティアナの反応であった。

「……八神殿に目をつけられてしまったようだ。」

「目を付けられたって……一体あんた何をしたの？」

バ ハルトは深いため息をつきながら……その一部始終を話すことになった。

「……さて……説明をしてもらいたい。」

地上本部襲撃という前代未問のテロが起こってから一週間後。

バ ハルトは地上本部にいた。

「唐突やな……。」

ついでにいえば……そこにいるはやてを問い詰めていた。

やや面倒くさそうなため息と共に一枚の書類を持って。

書類に書かれていたのは司書であるバ ハルトの地上管理局の嘱託署員として捜査員として登録することであった。

「何故……我がここの職員になっておる？司書のはずの自分が何故？」

「事件のあとな。あんさんに解いてもらった問題あったやん。」

あの簡単な問題か。簡単すぎて五分で終わったぞ。

「あれ……実は試験なんよ。」

「……なんだと？あんな簡単な奴がか？」

その言葉を聞いて言葉を詰まらせるはやて。

「……いや、簡単っていうけどあれ……地球で言うところの東大入試並の難しさがあったんやけどな……。」

「……。」

我とした事がぬかった・・・。

簡単に解ける。しかし、誰もがそうであるとは限らない。バハルトの失敗はそれを失念していたところにあるう。

しかし・・・それにしても能力があまりにも高く、そしてうっかり過ぎである。

「それに・・・ある推理小説の話で、犯人やその手口を聞いたやん。」

「ああ。聞かれたな。」

「あれな・・・実は半年前に起こって迷宮入り寸前だった事件やったんよ。」

「・・・なんだと？」

「助かったわ。バハルトさんの推理のおかげで迷宮入りにならずにすんだわ。犯人も証拠も全部みつかったし・・・。」

「・・・。。。。。」

バハルトは頭を抱えてしまう。

こやつ・・・試しおったな。

そこでバハルトはもう一つ思い出す。

「まさか・・・推理小説といって、他にも色々意見と言ったと思うが・・・あれもまさか？」

バハルトの顔を伝う汗。

にっこりと笑顔のはやて。

「おかげで地上本部を悩ませていた難事件の大半が解決へ向かってるわ。」

「・・・。。。。。」

思わず天を仰ぐバハルト。

何気ない会話の中にあつたいくつもの難事件。それを簡単に推理して見せたバハルトは己の優秀な能力とすっかりさをこれほど呪った事はなかった。

「あんさんの優秀な能力は出会った時からうすうす感じていたんや。うまく発掘されたと思って諦めてな。」

「……そのようだのう。」

観念するしかなかった。

「もちろん司書としての仕事もそのまま続けえもらっていいよ。無限書庫からのこちらの転送ポーターも申請済みやから移動時間はゼ口に近いなる。どちらにいても私達もすぐこれるさかいに。まあ……給料は今の三倍以上にはなる上に解決次第ではさらに上がるし……食堂……ただになるで？」

「……恐ろしいまでの良い待遇だな。どの部署に所属させるつもりだ？」

転送テレポーターをわざわざ設置してくれる上に収入を三倍。おまけに司書としての仕事を続けながらの上に、暴食の君に食堂無料と言ふ無謀な計らいというのだから、待遇は過度に破格と言えよう。それだけ熱心にバ　ハルトを引き抜きにかかった理由があるはずだ。

「……あんさんもまきこまれたあの一週間前の事件。あの事件をきっかけに、ミッドチルダで強行捜査、および事件の対処をするための部署が設置されることになったんや。」

「……伝説の機動六課の様な部署のことか？」

機動六課。J・S事件を解決させたという伝説の部署。試用期間ということもあり、一年で解散してが、そこで発掘された人材は今でも管理局で活躍しているという。

バ　ハルトの目の前にいるはやてがそのトップを務めていたのだ。「……一応、それに近い形だな。シードの事件、魔王の出現などの厄介で危険すぎる事件を追う事になる。そのためにできる限り優秀な人材を組織の内外から探していたんよ。」

「……私はその目になつたと？」

「そういうこと。あんさんには捜査アドバイザーとして現場検証や、捜査の方針のアドバイスをお願いしたい。まあ……資格なら安心して、この前暇つぶし代わりに解いてもらった問題は全部……そのための資格の試験やつたし……。」

事件の後、事情聴取の待ち時間の間にはやてが暇つぶしに解いてもらった問題の数々。

「……あんな簡単な物で資格が取れるのか？」

暇つぶしにはなつたとバ ハルトは思っている。十枚程の試験を彼は暇つぶしの二時間で全部解いて見せたのだ。

「……もう一度言っておくけど、それはあんなだけやし。それに・何も勉強していない状態で執務管試験を全問正解して……フェイトちゃんやティアナがものすごく苦労したというのに……」

彼が解いた試験の中にははやてがふざけて入れた執務管試験も入っていた。勉強をせずに一発合格することは不可能と言われた執務管試験。恐ろしく高い倍率で、頑張って勉強しても……何度も落ち続け、努力が報われなかった人間も数多い試験だ。

だが……その努力を意識してもいないのに、彼は簡単に踏みこむ結果を出してしまったのだ。天才と言うのもおこがましい程の異常な知能だ。

「……」

判っているだけでも破格のスペックを持つバ ハルトの獲得に、はやても満足そうだ。

こちらとして情報は集まると言う利点はある。……だが、正体がばれると言うリスクを考えると……。

メリット・デメリット、それにリスクも合わせて検討したバ ハルト。

その思考時間その物は一瞬だったが、その間に普通の人間なら一時間は熟考している程の内容の思考を彼はしていた。

その上での結論。

「……幾つか条件がある。」

「……」

そして、それを聞いたティアナと復帰したディーノの反応が無言

であった。

「・・・お前たちもユーノさんと同じ反応をするのだな。そんなに変か？」

彼はユーノにもスカウトされるにいたった経緯を話していた。そして、その最初の反応が無言だったのだ。

「・・・ユーノさんもきつとどこから突っ込めばいいのか判らないだけだと思っわよ。」

ティアナも突っ込む気が無くなったのか投げやりに応える。

「バ ハルトさんって・・・すごいのが判ったけど・・・同時にかなりの天然。」

ディーノに至ってはバ ハルトに対する新たな認識が加わったようだ。

「・・・はあ・・・でも・・・本当のことなの？」

「・・・大したことはしていないのだがな・・・。」

「でも・・・一緒に働けるなんて・・・楽しそう!!」

何がすごいのか全く分かっていないバ ハルト。その凄さに対して色々な意味で疑心暗鬼のティアナ。気の合うバ ハルトが来たことにテンションを上げるディーノ。

三人はそろって歩き始めた。

やれやれ。見知った顔が増えたな。

昨日の出来事を思い返すバ ハルト。

最初に出した条件。

「あくまでも非戦闘員として参加すること。戦いはあまり好きではない。」

まずはベルゼブブとして参加しやすい状況を作る事ために、戦闘を極力避ける条件を出した。

はやての視線は竹刀を構え、バ ハルトの後ろにいたシグナムに向けられる。

「・・・まあいいやろ。でも・・・結構できると私は見てるんやけ

ど？」

その言葉と合図にシグナムが逃げ場ない鋭く、深い踏み込みとともに竹刀を振り下ろそうとする。

「冗談を……。そんな大したものではない。」

だが、その竹刀は振り向きもしないバ　ハルトに触れる直前で止まる。

それが己の意思ではないのか、驚きを隠せないシグナム。その彼女に今頃気付いたかのようにバ　ハルトは振り向く。

「……………」

「おや？シグナムさんですか？何をしているのですか？」

「……………いや……………」

驚きを無理やり押し込め、平然を装うシグナム。それはまるで驚いたら負けだと意地になっているかのようだった。

「それより……………他の条件だが……………」

幾つかの条件を提示して、それをすべて了承されていく。

「よし。なら……………ここに世話になる。よろしく頼む。」

「こちらこそ。」

すんなりと交渉が進み、満面の笑みで握手をするはやて。

「よろしく。」

「ああ……………」

シグナムとも握手。

「では……………明日また来てな。その時、試験の面接と、それ以外に他のみんなとも顔合わせしておくし。」

「わかった。」

不意打ちで実力を測られたな……………。

バ　ハルトは二人と新たな部署に向かいながら昨日のシグナムの一撃を思い出していた。

不意打ちとはいえ・・・いい一撃だったな。

何もしいふりを装うことはできた。

だが、バ ハルトの実力の片鱗を彼女達が察している様子があったので、バ ハルトはあえて反撃をしておいたのだ。

彼としては、本気はまだ出していない。

盟約として非戦闘員となっているはずなので実力は隠し通すことはできるだろう。

「エデン」の動きが活性化している。こちらも一人では限界がくるだろう。

バ ハルトははやて達の提案をうけたのは、これからの戦いを見越してのことだ。

地上本部を襲うという暴拳をやってきた相手。

そして、それを皮切りにシードだけでなくアーマードも暴れるようになったのだ。

アーマードは売却され、色々な犯罪組織に僕として使われている。自ら虎の穴に入ったというわけだ。さて・・・虎兇を得られるが勝負だ。

そこまで考えていたところで、バ ハルトは足を止めた。

主様。シードの反応が出ました。

ヘルの通信を受け魔王は軽いため息をつく。

「すまぬ。トイレに行ってくる。2人は先に行ってもらいたい。」
そう言って彼はトイレに向かう。

お前の通信と言う事は・・・昨日と同じ別世界か。座標を教えてください。

わかりましたが・・・今から向われるのですか？

何・・・トイレに行くくらいの時間ですべて終わらせる。念話で話しをしながら、彼はトイレの個室へと姿を消していった。

ティアナとディーノが事務室に入ってきて、まず目に入ったのは開いた窓枠にひっかけられた縄つきのかぎづめだった。

どうしてそれが窓枠にひかかっているのか？

それは誰かがそこから縄を使って降りたか、登ろうとしたからだ。そして……今回は登ってくるようだ。

「……あら？」

上ってきたのは銀髪をした男。騎士団の制服の上から赤いコートは音ている

「……。。。」

三人はそろって見つめ合う。

「……まあ……お邪魔します。」

『っておい!!』

気まずい均衡をわざわざぶち壊して入っていく変な男にそろって突っ込みを入れる二人。

「入ってはいけねえ理由はないはずだぜ。何しろここに世話になる身だしよ。」

「世話につて……。」

「これを見せれば文句ねえだろ？」

懐からカードを取り出し、二人に見せる。

男の名前は……ハイル・

「……本物のようね？でもどうして……。」

「騎士なのにロープを上るのがうまいねえ。こっちもレスキューの訓練でよくやっていただけ、現役のみんなにも負けないくらいにすごいと思うよ？何か訓練でも」

ティアナの質問の前に先手を打って色々聞きに来るディーノ。あまりの唐突さにハイルも怯んでしまっていた。

「そっ、そうか……？それは……まあ悪い気がしねえな。つて
いうかな……最初に聞くのがそれか？他に聞くべき事があるはずだが？」

「……まったくよ。どうして、窓から入ったの？ここが一階にあ

るのならともかく？」

ティアナがボケた事を聞くディーノに呆れながらも、本来聞くべきところを聞く。・

「……見つかったら面倒臭い連中がこの建物の中にいるからだ。」

「面倒くさい連中？それって一体……。」

ハイルがぼやいていた面倒臭い連中は誰か2人が思案しかけていた時、その正解達がすでに行動を起こしていた。

「やべっ？」

何かにきづき、飛び退くハイル。彼のいた処にハンマーが振り下ろされる。その一撃は容赦なく床にめり込んでいる。

「……ちい……相変わらず勘のいいやつだな。」

ハンマーを振り下ろしていたのは一見すると赤髪の少女に見えるベルカの騎士……ヴィ タであった。

「……もう見つかったの……？」

「ああ……。よくも……私が楽しみにしていた定食のプリンを食べたな？」

『……』

そんなしょうも無い理由で！？

「喰い物の恨みは怖いんじゃボケ！！」

手にしたハンマー　グラーファイゼンの薙ぎ払いを必死になつてかわす

「やっと見つけたぞ……。」

そして……部屋にピンクの長い髪をした一人の修羅が入ってくる。貴様……また私達のシャワーを覗いたな？」

レヴァンディンを抜き放ったシグナムは殺気全開でハイルを睨みつける。

「……」

そして、それを知ったヴィ タを含めた三人が向ける視線は……
軽蔑以外何物でもない。

これで罪状は盗み食いに加え、覗きが加わった。

「だから！それは事故だって。前もそうだっただろ！！どうしてかわからんが、これはこういう星の下で生まれているみたいでどうしようもないって！！」

「最低……。」

「私刑も仕方ないかも……。」

デイーノとティアナのその言葉でハイルは場に己の味方がいなくなつた事を知る。

「しかたない。こうなれば……明日への逃亡を……ぶへっ！？」
窓から飛び降りて逃走を図ろうとする彼。だが、全身を黄緑色のバインドで縛られ転倒してしまう。そのバインドは強力で、彼の足元に大きな魔方陣が展開されている程の物。故に。強引に抵抗してもちぎれない。

「……逃がすと思つていますか？この……変態さん？」

そこにはとても素敵な黒い笑みを浮かべながら窓の外で浮いているシャマルの姿があつた。

『……チエックメイト……』

修羅とかけた三人に追いつめられたハイル。

「……あわわわわわ……。」

絶体絶命の状況で、さらに一人、追加がはいつた。

「おお……ここでよかつたか。」

トイレを済ませたという事になっているバ　ハルト。

「ん……？」

全身を魔方陣が展開されるくらいに強力なバインドで拘束されたハイルと武器を持って追いつめる三人の怖い顔をした女性。

それをどうでもいよいよに見るティアナと、どうしたものかと慌てているデイーノ。

その光景を見たバ　ハルトはどのように理解した物かと考える。

「……。」

頭の中にある数ある書物と今の光景で合致する物を思い出してい

く。

そして・・・答えが出る。

「・・・この人を生贄に・・・何の儀式をやるつもりだ？」

あまりも・・・見当違いの答えが。

「・・・はい？」

「・・・むう。書物で生贄を伴う儀式を色々と知ってはいるが・・・人間を生贄にする儀式は初めて見る。うん・・・興味深いな・・・。」

バインドされたハイルを含めた皆が啞然としている中、興味深々で生贄と勘違いしているハイルの方へ駆け寄り、まじまじと観察するバ　ハルト。

「・・・拘束されているという事は・・・本人の意識とは無関係。なるほど、罪人の処刑を兼ねた儀式ということなのか？そうなる・・・罪人の命を神に該当する存在にささげるということになるのか？拘束し・・・鈍器で気を失わせて・・・剣で首を断つというわけか・・・なるほどなあ・・・。」

凶器を持つデイ　タとシグナムを見て、勝手に処刑方法まで作ってしまっている。

「ちよつ・・・何？なんで俺・・・死刑執行されることになってんだ？いきなりのカオスに混乱するハイル。」

「おや？何も罪がないとでもいうのか？」

「そつ・・・それは・・・。」

罪はあった。ゆえに彼は拘束されているのだ。

バ　ハルトの思考の中には勘違いからとはいえ、中途半端に正解まで含まれているので実に厄介。

「主の罪状は後で聞くとして・・・。」

彼は椅子と共に紙とペンを用意。座り込んでじっくりと彼が儀式と認識した出来事を観察する体勢に入る。

「中断してしまつてすまなかつた。さあ・・・儀式の再現を続けてくれ。安心しろ野暮なことはしない。まあ・・・後で色々と思つから覚悟はして・・・。」

『いや・・・だから儀式でもなければ、死刑執行でもないから!!』
勘違いが酷い方向へ向かいそうなので、ハイル以外の皆が一斉につつ込みを入れて止めにかかる。

「あんたの言うとおりにしてしまったら俺は死んでしまうかもしれないわああああ!!」

そして、勘違いのままでは死んでしまうかもしれない罪人ハイルは魂の底から・・・突っ込みと救済と言う名の叫びをあげていた。

「・・・なんなの？このカオス過ぎる状況は？」

そして遅れてやってきたジュエルが訳のわからない状況になっている場に言葉をうしなっていた。

「なっ・・・なんでスカルエツティがここに!？」

色々な意味でいやな顔とそっくりなジュエルを見たティアナの悲鳴。

その悲鳴を聞いて一斉に武器を構えるシグナムとヴィーダ。

「ちよっ・・・この人は違う。」

「そうそう。この人は・・・」

それを見て必死に止めようとするシャマルとディータ。

「・・・ああ。まだ自己紹介がまだだったね。私は・・・。」

「どうでもいいから、これを解いてくれ。」

さらなるカオスが降臨する形になる。

こうして特務六課・・・凶悪犯罪特殊捜査課に四人の男が集った。

バ　ハルト、ディーノ、ハイル、ジュエル。この四人のチームが事件解決に大きな貢献をもたらす事になるとは本人達を含め、このカオスな場にいた皆は誰も思わなかっただろう。

「うむ・・・確かにカオスだ。」

『いや!そうだったのはあんなのせいだから!!』

バ　ハルトのぼやきに、ジュエル以外の皆が一斉につつ込んだのは言うまでも無い。

「なんや騒がしいな?」

はやてはため息をつきながら、書類整理を進める。

「・・・何があったのかな？」

その傍ではフェイトも首をかしげる。そこははやての執務室。

その隣の部屋に特務六課・・・凶悪犯罪特別捜査室を置いている。

壁のドアを開ければすぐにそこに行ける。

「・・・さあ？結構な暴れ馬も投入したからそのせいかな。」

「・・・？」

暴れ馬と言う言葉に心当たりのないフェイトは首をかしげ、その彼をよく知っているはやては苦笑する。

「それで・・・例の彼・・・バ　ハルトさんを口説くことができたのですね。」

「・・・うん。」

バ　ハルトの名を聞き、浮かない表情のはやて。

「どうしたの？」

「・・・我ながらとんでもない人物を発掘してしまったなと思ってな。」

はやては昨日のこの部屋で起きた出来事をフェイトに話す。

交渉が終わり、部屋を出るバ　ハルト。

そのあと、はやてはシグナムの方見る。

「さて・・・どうして肝心の實力はどうやった？」

「・・・。。。」

その言葉と共に・・・破裂音。

見れば・・・シグナムが手にしていた竹刀が粉々に砕けていた。

「・・・えっ？」

突然の出来事に啞然となるはやて。

一方のシグナムの方は苦い顔をしている。

「これが答えです。」

根元から粉々になった竹刀を見てはやては深いため息をつく。

「・・・何が大了たことないや・・・。どう少なく見積もっても・・・近接技能は達人級なのは間違いないやん・・・。」

ユーノからもらった書類を見るはやて。内容はバ　ハルトの仕事内容だ。

「それに・・・この書類を見ても魔道士ランクはオーバースランクの可能性が極めて高い。」

四ケタ以上の同時多数の検索を無限書庫のそれこそ限り無しと言わしめるほどの膨大な書物の中から短時間で、しかもデバイス無しで行える実力。

それは膨大な魔力とその繊細な制御能力、そして異常なまでの情報処理能力がなければまずできない異常な実力だと言えた。

その実力を隠すように彼は魔道士ランク試験を受けていない。

「本気のあいつと戦ってみたいか？」

バトルマニアであるシグナムにバ　ハルトの戦いを望むか聞いてみる。

「・・・そう言う気持ちはもちろんあります・・・。」

だが、シグナムの返答は少し意外なものだった。

「でも・・・勝負になるかどうかと言われれば・・・自信がありません。」

異常なまでに、底知れない実力。戦ってみたい気持ちと・・・言いしれない畏怖をシグナムは同時にかんじていた。

「・・・シグナムにそう言わしめるか・・・。これはとんでもない相手を発掘してしまつたみたいやな。」

あの条件。先手を打たれたになるか・・・。駆け引きに関してはやはり私よりも一枚上手のようやな。

「・・・それはとんでもないわね。」

フェイトの評価も同じだった。

「戦いたくないっていうのは・・・己の実力を隠しておきたいということなのかな？」

「戦闘員としては使えんけど、それ以外でも十分な期待があるのは違くないけどな。」

「・・・でも執務管試験を一発で合格か・・・はは・・・なんだかばからしくなってる。」

フェイトは優秀な執務管だったが、何度かその試験を落とした上でようやく試験に受かった経緯がある。

その努力をあざ笑うバ　ハルトの頭に少し憂鬱になってしまふのは無理ない。

「・・・本当・・・未知数の奴を入れてしまったと、少し後悔している節はあるわ。」

そういつつもはやてはバ　ハルトの加入に大きな手ごたえを感じてもいる。

後方支援、捜査だけでなく、もしかしたらいざという時でも切り札になるかもしれない。

機動六課時代に、公開意見陳述会のスカルエッティ一味の事件の際に六課の本部も襲撃されて、多くの負傷者と当時保護していたヴィイオをさらわれたという苦い過去があった。

その非常時の守りに・・・彼は期待できた。

切り札は多いほうがいいしな。

この時はやてはまだ知らなかった。彼女の想像をはるか斜め上を行き、恐ろしいまでに強力な魔王という名の切り札を得ていたことに。

そんな二人の元に通信がモニターの展開とともに来る。緊急の案件のようだ。

「突然失礼します。第一管理世界にシード出現。」

「・・・なんやて？被害は？そして・・・対応できる部署は？」

「それなんです・・・謎の黒い怪物が現れ、犠牲者が出る前に終わりました。戦闘時間にして・・・一分もかからなかったそうです。」

「・・・・・・・・・・。」

シード出現と、素早すぎる解決。それにめまいのような感覚を覚えるはやて。

「なら・・・現場検証にいくで。さっそく集まった四人を呼んできて。」

凶悪犯罪特別捜査班―顔合わせの日。大変力オスな状況で出くわした連中に出動がかかることになった。

結成、特務六課 凶悪犯罪特殊捜査班。（後書き）

新キャラ・・・ハイルの登場です！モチーフは二人のキャラを合成してみたつもりなんですがね・・・うまくいけるかどうか？

おまけ・・・別世界へ向かっている最中の会話。

ハイル「・・・はあ・・・。」

ディーノ「どうしたの？いきなりため息について。」

ハイル「・・・おれ・・・この部署でうまくやっていけるのかな？」

ディーノ「あつたばかりなのに鬱になるのが早いつて。なんで・・・。」

先ほどの出来事を思い出すディーノ。ハイルの自業自得とはいえ、彼は悲惨な目にあっていた。あまりの caos なことに恐怖すらも体験したのだ。」

それを察し、ハイルの肩をたたくのはジュエル。」

ハイル「・・・あんだ・・・いい人だな。」

caos な中で・・・一つの友情が生まれた瞬間であった。

こんなかんじて一つの友情が生まれた状態で次の話を進めていきます。

次回「チームの形」

バ ハルト「うむ。こう動けば皆の力は発揮できそうだな。」

ハイル「本当にそう動いていいのか？」

バ ハルト「そのほうがお主は動きやすいのдар？ひとつ条件はつけるがな？」

動き出した新しいチーム。アドバイザーのバ ハルトはその力をさっそく発揮する。その動きにはやては満足そうな笑みを浮かべるのであった。

バ ハルト「しかし・・・私の事件の後始末というのも・・・変な気分だ。」

もちろん、その事件の当事者が捜査に加わっていることなど・・・誰も知らない。

9 / 2 2 訂正しました。

主人公紹介（前書き）

ここにて主人公の設定を載せたい共います。
またいろいろとが改正すると思いますがよろしくお願ひします。

主人公紹介

人物紹介

バ ハルト・スクライア 年齢（戸籍状では20歳）実際は不詳。
誕生日も判らず。

見た目のイメージ・・・漫画、ドラゴンクエスト、ダイの大冒険
の大魔王バーン。角と目は封印の術式が書いてあるバンダナにて隠
している。

身長 190センチ

体重 150キロ

体格 やせてるように見えてかなり筋肉が付いている。他の人い
わく・・・脱いだらすごいです。

また体格の割に体重が異様に重いのは・・・彼は普通の人間ではな
いからです。

現在の獲得資格・・・無限書庫司書。 管理局員囑託・・・ランク陸
戦A扱い

捜査官、監察官、執務管補佐、看護師免許。 医師資格。 教師免許。
自動車免許、飛行機免許、調理師免許、衛生士免許、建物建築免許、
SPライセンス・・・など

他にも持たせたら面白い資格を募集中。 大抵の資格は彼は一日で獲
得するスペックを持っていますよ。

性格・マイペースかつ、冷静。どこか淡々としており、それが尊大に見えてしまうところはあるが、鋭い観察眼と大きな器量をもっている。だが、ずれているところあり、特に日常は天然気味。

基本的に彼は・・・優しいが、ずれているところが本当にたまに傷。

技能・高速思考と龐大な知識と経験「神域の図書館」

恐ろしいまでの知能を誇り、難関と言われた執務管試験を何も勉強せずに一発で、しかも十分で解いてしまうほど。また、記憶喪失でもあるのだが、彼の頭の中にはあり得ない程の多くの知識や経験が入っており、問題を解く際も一役買っている。ある事がきっかけでそれを認識するようになり、これと無限書庫を合わせれば、大抵の事は判ってしまう。

格闘技能・・・少なくとも達人級。流派は・・・「魔王流」デーモン・アーツ。

大食い・・・暴食の君にフードファイトを挑む無謀な者は誰もいない。

魔道士ランク・オーバーSランクは確実。

肉体・・・彼とその相棒であるヘルしか知らないことだが・・・彼の身体には心臓が三つ付いており、腕を斬り落とされてもすぐに生えてくるほどの極めて高い再生能力を持っている。額の目は千里眼と解析、周囲の探索に加え、催眠術やマインドシヨックを与えるなどの色々な力を秘めている。そして・・・かなりの怪力で、車くらいなら魔力強化せずとも持ち上げる。

設定・本編の主人公にして、作者もすべてを把握できない最強の力オスな存在（笑）

十年前、第二世界にある古代ベルカの魔王の遺跡にあった冷凍力プセルに入っていたところをユーノに見えられ、保護される。

当時は十歳くらいの子供で、記憶もなく、頭に角、額に三つ目の目、それに加え銀色の目という特徴に加え、赤と青というオッドアイであったことから（普段はバンダナで目の色も普通の黒い目になっている。）ユーノは古代ベルカにて世界を滅ぼそうとした魔王にゆかりがあると推測しているが、まだ推測の域でしかない。

話し方こそ、ユーモラスだが、大きく感情を出すことはしないで、落ち着いており、どこか冷めている部分もあって、ユーノは心配していたが、彼を司書として招待し、他の人とうまくやっているところをみて安堵している。

彼がベルゼブブへの変身能力に目覚めたのは五年前。相棒であるヘルの覚醒と共に彼は一部の記憶と共に変身するようになった。

戻った記憶は倒すべき存在であるシード。暗躍する謎の存在がいる事。

故に本人はこの力を得た理由は全く知らない。

それでも、彼が戦っているのは記憶の手がかりを追うためと、シードのもたらず悲劇を見過ごせなかったからだ。

高い戦闘能力は失われた記憶の中にあつた圧倒的な経験と変身時の能力の開発に熱心に取り組んだ彼の努力から来るもの。

そして彼は変身能力から、自身が人間ではない別の存在ということを確認している。故に人と距離を置く部分もある。（恩人であるユーノに心配掛けないよううまく折り合いはつけている）

そして変身して戦う際も魔王を名乗り、恐怖の対象と自らなることで、事件に誰も深くかかわらせないようにして、影でシードと戦ってきた。

故に管理局も彼の存在をシードの活動が活発になった最近まで知る事ができなかった。

魔王・・仮面ライダー ベルゼブブ。

スペック・・パンチ力 6トン

キック力 10トン

ジャンプ力 100メートル

ダッシュ 不明

ベルゼブブの基本フォーム。腰にある封印された赤い災いの石の封印を解くことで変身する。

それぞれの四肢に神具を持っており、それを發揮させて必殺技を放つ。

右腕・・蒼炎の大斧。（真名は不明。）

必殺技はバニッシュャ・エンド。斧とかした右手による手刀で空間ごと相手を断つ。

左腕・・紅氷の魔剣

必殺技はカラミティ・クライシス。左腕から伸びる剣を相手に突き刺し、その呪いで中から消滅させる。

右足・・黒雷の鉄槌。

必殺技はミッシヨミルクラッシュ。重力と黒い電撃による全てを

打ち砕く必殺キック。その威力は小型の隕石衝突と同規模だと言われている。

左足・・必中の神槍

必殺技はグングニル・スラッシュ。二段構えで足から放たれる一の槍は必ず相手を貫き、固定し、足その物を槍とかす二の槍にて相手を防御の上から貫く。

銃・・名前不明。いまだに力を完全に発揮しきれていない謎の神具。

鎖・・・名前不明、四つの武具や変身ベルトを拘束、封印している鎖で、それを相手の拘束する事が出来る。全身から放たれ、両手の指からの鎖は特別で、対象人物の記憶の書き換え、データの改ざんや読み取りの力を持っている。サイコメトリの力も備えており、この力は変身まへも使用可能で彼自身の肉体の秘密を隠すのに一役買っている。

主人公紹介（後書き）

書いていて・・・かなりめちゃくちゃな主人公になってしまいましたね。完璧すぎる能力とずれている部分。

これだけでは・・・あまり親しみはわきませんねえ。

それだけではいけないと思い主人公が抱えているものを少しだけですが書かせてもらいました。

これを題材とした話も考えていますので・・・楽しみにしてください。

チームの形。(前書き)

ベルゼブブ「OHANASIIしょうか？」

さて・・・管理局の白い魔王と同じセリフをついに言わせてしまいました。

誰に対して・・・OHANASIIをしようとしたのか・・・読んでみてください。

チームの形。

そこは第二世界の街中だった。

しかも裏路地ではなく繁華街の真ん中。

そこに虫型のシードが現れたのだ。

巨大なカマキリと人間の融合体のようなシードは人を喰らい始め、出現と同時に二人をその鎌の餌食にした。そして、三人目を喰らおうと、鎌を振り下ろした瞬間に、黒い怪人が現れ、その鎌を鎖でがんじがらめにして受け止めていたそうだ。

「……長時間の戦闘ではなかったみたいだからそんなに荒れていないと思っていたが……間違いだったようだな。」

カマキリのような怪物と黒い怪人との戦闘時間はわずか一、二分程。

終始……黒い怪人が圧倒して終わったようなのだ。爆発の余波を抑えるためにとっさに展開された結果。

だが、爆発は防いでも人的被害をなかった事にはできなかった。

「……」

泣き崩れるのはシードの犠牲になった人の遺族なのだろう。

その人の肩に手を置き、もう一人涙を流している。

「……また防げなかったか。」

その光景を見て、言いしれぬ苦みを感じるバ　ハルト。

如何しても……犠牲はでてしまうな。

私もセンサーを改良し続けているのですが……中々。

主の憤慨に応えるヘル。

バ　ハルトは崩れ落ちた人を見て考え込んでいる様子だった。

「……身近な誰かを失う痛みか……。我もその痛みを

感じた事があったのかな？犠牲が出た事に対する認識はできても……

・心の痛みというのがわからん。

無表情ではったのだが、どこか悲しみをたたえた目をしている。

「主？」

「いや、ひとりごとだ。引き続き警戒を頼むぞ。」

御意。

ヘルとの会話を終え、バ ハルトは現場へと向き合う。

「……ひでえな。」

「うん。」

事件現場を訪れたハイルとディーノ第1声がこれだ。

ボロボロになった道路や車、建物をみればそういいたくもなるだろう。

ジュエルは現場をしばし観察してみる。

「でも……考えて戦ってくれたみたいだね。あの必殺技……使っていないみたいだし。」

「破壊も、多分シードによるものが大半か……。」

ディーノが爆発後の焦げた地面と血まみれの地面の間を見て観察を始める。

「なるほど……人を庇ってからあまり人のいない処へと吹き飛ばし、そこでダメージを与えたんだ。」

「……判るのか？」

「こう見えてレスキュー隊にたから。簡単な現場検証ならしたことあるんだ。」

そう言いながら、どのような戦いが行われたのか検証していた。

「……。」

流石に驚いたぞ。

ディーノが簡単にだが、出した事件の検証結果にバ ハルトは驚きを隠せない。

まるで当事者のようにその状況を的確に再現して見せたのだ。

「・・・そうなると大体・・・戦闘時間は40秒ですね。」

「はや!?!」

「・・・信憑性はたかそうね。」

ティアナもその検証に立ち会っており、その正確さにおどろきながらも同意する。

「最後の必殺技は多分・・・左足の槍を簡易的に放って相手をけり上げる形で倒したと思う。まあ・・・データが正しいのならばだけど。」

「・・・まったくもってその通りだ。」

止めの技が間違っていないのも、戦闘時間も、当事者であるバハルト本人がよく知っている。

「・・・鑑識はまかせてよ。色々と気なるデータもあるし。」

ジュエルはあちこちに落ちている血痕や破片をチェックし始める。その中ハイルは野次馬の中でそくさと立ち去ろうとする男を見つける。

「・・・さて俺は・・・。」

それを見てふらりとどこかへ行くこうとするハイル。

「ちよつと・・・どこへ行くつもりなの?」

それを止めようとするティアナ。

「別にどこだつていいだろ?」

「あのね・・・。」

ティアナの追及を振り切り出ようとするハイルにティアナが声を荒げようとした時だった。

「いいだろう。たのむぞ。」

「へっ?」

ハイルの行動を後押ししたのはバハルトだった。

「気になるところがあつたのだろ?色々と探ってみる。」

「なっ・・・あんた・・・何を?」

「時間は二時間程なら取れる。それ以降は向うに戻るから一端戻ってこい。一時間後と集合時間直前に連絡を入れる。捜査の状況はそ

れで報告。最終的には戻ってから詳しい報告をもらうぞ。」

「……ああ。」

「ティアナ殿。それでいいか？」

「えっ……でも……。」

納得しきれない部分はあるティアナだったが、反論するにもとつさに思い浮かばない。そこにバ　ハルトは続けた。

「……ここならそんなに危険もなかるう。それにハイル殿の実力も測りたいのだ。何を見つけ、そこから何を見つけてくるか興味もあるしこのう。ハイル殿もそれでいいか？」

「……。」

それはハイルの好きに動く許可を出す代わりに、それなりの成果を求めるといふ物。

ハイルは頭をかきながらため息をつく。

これは……参ったな。バ　ハルトと言う人……ボケた人と思っていたが、その認識……改めておいかないといけないようだな。

バ　ハルトの指示は過去のハイルの活躍を見たうえでのものだ。普通の上司なら強引にでも同じ枠にはめようとするとところを反発してきたハイルだったが、それ故にバ　ハルトの指示は新鮮であった。締めるところはきっちり締めており、放置していないという点もバ　ハルトのやり手な部分を感じさせる。

俺の実力を見越したうえでかよ。プレッシャーに発破までかけやがって……。個の人もはやてさんと同じか……それ以上だな。「ああ。そうさせてもらう。」

「なら……これは受け取ってくれ。拝借してきたものだ。急げよ。」ハイルに投げてよこされたのは小型で特殊な念話での通信機。念話を妨害される中でも長距離通信ができる優れ物だ。

「……わかった。逆に何かあったら連絡入れるぜ。」

それはハイルからしたら最大級の返事ともいえる。

「楽しみにしている。いそげよ、とつさに追跡をかけているのはい

いが、効果範囲があるだろうに。」

そこまでお見通しですかい。

ハイルは恐ろしい物を感じながら、男の後を追う。

「さて・・・我也聞きこみに入ろうか。」

「私も行くわ。」

バ ハルトの聞き込みにティアナが同行する。

この人・・・変わった人の使い方をするわね。

彼女自身がバ ハルトと言う人間を見定めるために。

2人は事件の目撃者からの証言をとっていた。

「・・・今回、魔王名物の名乗りは短縮してみたよね。」

ティアナは証言の中から、ベルゼブブが現れた時の名乗りを短縮していたという証言を得ていた。

「今回は時間にあまり余裕がなかったのかしら？」

「その可能性が高そうだな。」

実際・・・戦闘時間はトイレに行くという時間しかなかったからな。

バ ハルトとしては恐怖を植え付けるための名乗りはしたかったのだが、実を取らないといけない場合もわきまえている。

「今回のシードの犠牲者・・・大体推察は付いたぞ。」

「えっ？ そうなの？」

「ああ・・・過去のデータから見ると言うのは暴食を司るということだ。そして・・・無差別に人を食ったのは・・・人その物の何かに飢えていたと推察できる。」

「飢えていた何か？」

「・・・愛か・・・きずなだ。」

その推理を聞いたティアナの顔から血の気が失せる。

「・・・なんでそうなるの？」

「・・・被害者の証言でもあつただろ、私を見て・・・私を知つて・・・私を・・・一人にしないで・・・」ってな。」

聞きこみに回った証言をティアナも思い出していた。

「見せてもらったシードの資料から推察した結果だが・・・疑問も残るな。」

「それって・・・魔方陣から唐突に転送されてきたという話のことね。」

今回現れたカマキリ型のシードは人が街中で変身したのではなく、転送魔法で送られてきたという目撃証言がある。

・・・転送魔法の痕跡はあつたよ。

その二人の会話に割り込むようにジユエルから念話での通信が入る。

距離は短距離型・・・おそらくこの街全域から転送できる程の物だと考えられる。詳しく調べないと正確な距離は判らないけど・・・

「・・・そうか。そうなる・・・このシードは第三者が送り込んだ可能性が高いのかな？」

・・・うん。そうなる。少なくともあのシード、まともに魔法を使えるほどの理性は残っていなかったみたいだし。

「・・・」

その事実に関してはバ　ハルトは痛いほど判っていた。

嫌な予感が当たっていたな・・・。

付きつけられた事実に苛立ちがこめられ、手にしていた報告書のバインダーに亀裂が入り、すぐに割れてしまった。

「!?!」

簡単に割れない強化プラスチック製のバインダーを握力だけで割ってしまったことにティアナは軽く驚く。

「・・・これは・・・テロだ。」

「・・・テロって・・・」

「どういった手段か判らないが・・・シードを使って無差別にテロを

仕掛けた連中がいる。おあつらえ向きなシードをあらかじめ作ったのだからな。暴走したシードの力はヘタな魔道士よりもよっぽど強力で凶悪……。使い捨てもでき、インパクトも被害の大きさも、長引く時間もかなり長い。まさに……。最悪の手段だ。」

「……なるほど。でも……。あくまでも推測だけよね？」

「ああ。だが……。そろそろ重大な証拠がやつてくるころだと思う。」

「？」

こちらハイル。その推測……。当たっているぜ。

「やはりか。お前が追っていたのは……。。」

そこまで気付いていたんかい。まあ……。きつちり捕まえた。

「こちらに連れてきてくれ。丁重におもてなししてやる。」

「……。。」

ハイルを単独行動させた意図によく気付いたティアナ。

「あなたは……。すべてわかっていたというの？判っていて……。それを抑えるために先手を打ったと？」

バ ハルトはその問いに関して、淡々と応える。

「……。そうであってほしくない予測が当たっただけだ。考えうる中で、最悪の部類に入る予測だったのだから。」

「……。。」

ティアナはそこで、バ ハルトがこの現場についた時点である程度の方針を立てていた事を知る。

幾つかの可能性を考慮し、集まってくる証言、証拠などをもとに、それをさらに固めていき、そして……。確信できる答えを短時間で出したのだ。

この人……。すごい。あの時の天然力オスに全然見えないくらいに。

捜査アドバイザーとしてチームに入ったバ ハルト。

彼ははやての期待を超える実力を発揮し始めていた。

四人はハイルと街にある管理局の支部で落ちあっていた。

「しかし・・・想像以上の成果を上げてくれるな。」

「いつ・・・いや・・・そう褒めるな。俺としては・・・こんなこと・・・
当然で・・・。」

くそ・・・騎士団では叱られて当然だったのに。・・・褒められるというのは・・・慣れねえ・・・むズかゆい！！

「って・・・ジュエル。何だ其のほほ笑みは？」

「いい上司が見つかってよかったなと思っただけだ。気にしないでくれ。」

褒められて照れているハイルを見てジュエルは正直な感想を言うのける。

「てめな・・・。あつてまだ一日も立っていないのに、何だ其の言葉づかいは？」

「遠慮なく言っただ方が良いのは間違いないみたいだからね。そっちはそういうタイプだし、合しているのだよ。」

すっかり心安い仲となったジュエルとハイル。

「やれやれ・・・今更だけどジュエルも結構毒を吐くね。」

「そうだな。穏やかそうな物腰にだまされたぜ。」

「・・・ふふふ。だまされる方が悪い。」

自然とディーノもその輪の中にいた。

「・・・。」

それを見て満足そうなバ　ハルト。

「・・・いい感じだと思っっているの？」

「ああ。まあ・・・衝突も覚悟していたのだが・・・三人の相性が想定外に良かったみたいだ。いい意味で外れてよかったと思っっている。」

「・・・その言葉から見ると。捜査前に三人の履歴は閲覧済みみたいね。」

「当然だ。どう言った性格なのかも、大体把握した。その上、どんな実力を持っているのかも判ったしな。」

当然と言つてのけた彼にティアナは内心ため息をついていた。

当然って・・・それだけであれだけの確な指示を出せるあんたがすごいわ。

すごいと思わせたバ ハルトは鼻をひくひくさせながら、視線を食堂へと向ける。

「・・・うむ。いい匂いを嗅いだら腹が減つたのう。少し食堂で食事でも・・・。」

「またんかいこの腹ペコ大王!」

でも・・・やっぱズレてる・・・。天然だわこの人・・・。

「腹が減つたら戦できぬであろう?」

「あなたの食欲見てら、戦始まる前に食料が尽きるわ!!第一満腹まで食べたら逆に本末転倒じゃないの!」

ティアナは彼の評価をどう見ようか四苦八苦しているのであった。

「安心しろ・・・この食料を全て食べ尽くしても・・・満腹にはならんぞ。満足はしてもな。」

「・・・あんたどういう胃袋してんのよ?」

「解剖して見てみるか?案外普通だと思つが。」

「・・・そこまでして見た無いわ!!ってどうかあんたどこまでボケれば気がすむの?」

「・・・ボケているのか?そう言つつもりはないのだが?」

「・・・ああ・・・もう・・・馬鹿に付ける薬がほしい。」

そして、彼女は気付いていない。

いつの間にか遠慮なく、バ ハルトに突っ込みを入れている自分に。

そんなやりとりをしながら、取り調べ室に入ろうとした時だった。バ ハルトの表情がいつもの淡々としたものではなく、鋭い物へと変わっていた。

「・・・伏せろ!!」

「きゃあ!？」

バ ハルトがそういいながら、隣のティアナを地面に伏せさせる。それと共に巻き起こる爆発。取調室が吹っ飛んでしまった。

「うああああああ!？」

崩壊に巻き込まれ、姿を消す三人。

「……間抜けな奴……処分つと。」

爆発と崩壊の中から現れたのはキノコのような姿と人としての四肢を備えた異形。

目はないように見えるが、きのこのような頭は、バ ハルトの方を見る。

「あれは……シード?しかししゃべるなんて……。」

「……おやおや。こんなところに目撃者がいたのね……仕方ない。」

キノコとなった頭。その傘に当たる部分から黄色の胞子が放射される。

「ぐっ……。」

とつさにクロスミラージュを起動させたティアナがスフィアを放つ。

しかし、彼が全身から放出する胞子に触れた途端、拡散してきえてしまった。

「無駄だよ。魔道殺しの技なんだから……。」

「チィ……仕方ない。魔法がだめなら……これは……どうだ!？」

胞子に向かって掌底を放つバ ハルト。その掌圧で……胞子が吹き飛ばされる。

「えっ?何……それ?」

驚くキノコシード。その隙を見逃すティアナではなかった。

「油断したわね!」

キノコシードの顔面に命中するオレンジのスフィア。魔法に対しても高い防御力を誇るシードも流石に顔面に攻撃を喰らって平気な訳がなかった。

「ぐあつ?・・・ぐつ・・・この!?!」

キノコシードが指を鳴らす同時に、胞子は一斉に爆発する。

壁や床が崩落し、凄まじい轟音が辺りに響き渡る。

しかし・・・爆発が収まっても、彼は殺気を修める事はしなかった。

「・・・逃げがさない。」

それはその爆発で二人を仕留められなかった事をよく知っているからだ。

「・・・時間は稼げそうだな。」

バ ハルトはティアナを抱えながら上を見上げていた。

「・・・あんた、出鱈目で結構大胆なのね。」

爆発が起こると同時に、バ ハルトは思い切り床を踏み碎いて、ティアナごと自ら下に落ちたのだ。

「今はその称賛を喜んではいられないのが残念だな。急いでここを離れる。」

「・・・相手は追いかけてくるか?」

「少なくとも、今のごまかせる程度の相手ではない。しかし・・・意思を持つシードとはな。」

バ ハルトはともかくとして、ティアナもまともな人間としての理性と変身能力を残したシード遭遇した事がある。

「・・・逃げ回って応援を待つのが吉ね。でも・・・あの三人は・・・」

「・・・少なくとも一人は無事だろう。あいつがいるから対応はできているはずだ。それに他の二人も程度や種類は違うが、それなりの修羅場をくぐりぬけている・・・あの程度で死ぬとは考えにくい。」

三人の安否に関して、生きていると断言して見せるバーハルト。

「それに、この程度で死んでは・・・おそらくこれからは無理になる。」

「……どういうこと？」

「……我々セカンドに盾突くなんて面倒臭いな……。」「キノコのシードが二人を見つけて降りてくる。」

「面倒臭がらずにとっととやれ。流石に応援が来たら厄介だぞ？」その隣にはカメレオンの姿をしたシードの姿がある。かれもキノコと同じく言葉を話している。

「くっ……。二体に……。」「

「もう一人いる……。」「

そして、そこに鼻を模したシードまで登場する。音も立てずにいつの間にか現れた事にティアナは寒気を覚えた。

「……セカンドと言うのか？お前達のような存在のことを……。」「

「……面倒臭いな。説明……。だが……。大体正解とだけいつてやる。冥土の土産代りにもっていきな……。」「

キノコシードが面倒臭そうに手からキノコを出現。それを投げつけようとした時だった。

バ ハルトは不敵な笑みを浮かべて、ティアナに目配せをする。

それが何を意味するのか。ティアナはすぐに察し密かに魔法を発動させる。

「……冥土に土産を持っていく必要はなくなったな。」「

「どりゃああああああ!!」「

その場にローラーで突進してくる蒼い人型が一体。

派手な音と共に傍にいたカメレオンシードを殴り飛ばした。

「ぐあ!?!」「

「大丈夫ですか?」「

蒼い人型は蒼龍の勇者……。ブレイブ。ディーノが変身した姿だった。

「……。くっ……。この……。」「

キノコシードは手にしていたキノコをディーノに投げつける。だが……。ディーノに届く前にそのキノコは打ち抜かれて爆発。

「・・・備えあれば憂いなしってね。」

銃弾が撃ち込まれた廊下の奥から現れたのは黒と銀色のパラディンが立っていた。手にしているのは銃剣型のデバイス。

「念のために専用のパラディンを制作しておいてよかったよ。」

それを着こんでいるのは・・・どうやらジュエルのようだった。

「くっ・・・いいのか？お前達の仲間がここに・・・って？」

キノコシードがバ　ハルト達を人質にしようとするが、彼らの姿が霧のように消える。

「・・・しまった・・・幻影だと？」

「・・・入れ替える時、こっちの突撃に合わしたというわけか？派手な音に足音をかき消すといい・・・。」

カメレオンシードはバ　ハルトの機転に舌を巻いていた。ティアナに簡単な念話で幻術で二人を入れ替えたのだ。ステルスとなった二人の足音を派手な登場をしたディーノがかき消してくれるのも計算したのだ。

「・・・はえ・・・すごいなあの人・・・。」

「おかげで遠慮なく戦闘に持ちこめる。」

銃剣を構えるジュエルに、オウルシードが羽を模した手裏剣型のデバイスを投げつける。

「ぐっ？」

「なめないでもらいたいな。ファーストの暴走体とは違って・・・こちらは魔法やデバイスも使いこなせる。常人よりもはるかに強力な力をもっていてな。」

カメレオンシードがヨーヨー型のデバイスを手にする。

そして。キノコシードはキノコを模した杖を手にしていた。

「・・・不味いな・・・。」

こいつら・・・勝手が違うようだな。

デバイスを手にした三体のシードが攻撃しようとした瞬間、紅い羽が舞い落ち、それが次々と爆発。三体を足止めした。

「この羽は・・・ミカエルか？」

崩壊した取調室のあつた穴から現れたのは紅い翼の天使・ミカエルだった。その腕には取り調べるはずだった男を抱えている。ミカエルはディーノ達の傍に降り立ち、そしてゆっくりと男を下ろす。

「怪我をしている。手当はしているが・・・早く病院に連れて行つた方がいい。」

そう言いながら彼は剣を抜き放ち、シード達へ向かおうとする。しかし、それを止めたのはディーノだった。

「・・・ハイルは？・・・取り調べ室には俺達の仲間がいたはずだ。あいつは・・・大丈夫なのか？」

ハイルと言う名前にミカエルは軽いため息をつく。

「・・・彼かどうかは判らないが紅い髪をした奴なら、下で伸びている。酷い怪我はしていないようすだったが？」

「そうか・・・ありがとう。」

それだけ聞き、ディーノはミカエルの隣に立つ。

「一応・・・味方でいいみたいだね。」

その後ろからジュエルも銃剣を構える。

「・・・これで数は互角・・・。」

いきなりの乱入にシード達は戸惑う。

そして・・・そこにさらなる乱入がやってくる。

突如床を突き破って現れる無数の鎖。

「なっ・・・うあああああああああああああ！」

それはキノコシードを縛り上げ、床の下に引きずり込む。

「えっ？」

そして、引きずり込まれてから少しして・・・。

床をぶちぬきながらキノコシードがボロボロになった状態で上がってくる。

「がっ・・・あっ・・・。。。」

「・・・毒は流石に喰らいたくなかったので、吐き出せてもらった。我はそんなに悪食ではないのでな。」

キノコシードが出てきた穴から飛び上がったのは……魔王
だった。

「……忙しい故に……今回も名乗りは省略させてもらおう。」

『名乗り省略するんだ！？それ今回もって？』

彼の名乗りを聞いたことがあるディーノ達は一斉に心の中で突っ
込む。

「ぐっ……てめえ……。」

「……なるほど。お前らはエデンとつながりのある組織……ア
レンストのメンバーか。」

『なっ……。』

「……まさかシードを制御する術を身につけていたとは思わな
かったぞ。自らそれを取り込むためとは言えな……。」
どうして情報を持っているのか？

他のシード達は一斉にキノコシードの方を見る。

彼は……メンバーの中で一番動揺しているようすだった。

「なぜだ……？俺は喋っていないのに……？」

「……まあ……もう少し他のメンバーにも……OHANAS
Iしようか？」

暗い声と共ににじり寄る魔王。暗いオーラを纏い、殺気と重圧を
三人のシードに向ける。

それは……管理局で密かに有名になっている白い魔王と同じか、
それ以上の恐怖。

あまりの迫力に三人のシードは後退を余儀なくされる。

『うっ……。』

明らかに三人は怯えている。

「安心しろ……今から、ちょっとお前達に魔王と言う名の恐怖を……
……たっぷり味あわせてやるだけだ……。」

『いや……全然安心できませんよ。というか……ちょっと
なの？たっぷりなの？一体どっちなの？』

その場の皆が一斉に心の中で突っ込みを入れる。

そして・・・同時に皆は彼が魔王と名乗り、それがあっているのか納得する。

恐怖を彼はうまく操っているのだ。

訳が判らないというのも、相手から見て未知と言う形で恐怖を加速させている。

それが本人のボケだとしてもだ。

「さあ・・・ん？」

ゆっくりと迫る魔王。その眼前に唐突にそれは現れる。

「・・・何者だ？」

装飾のないがスマートで、其れなりの厚みも兼ね備えた黒い鎧。

兜はV字の見開きがあり、そこがほんのり赤く輝きをはなち、ガゼルのような細く縦にまっすぐ伸びた二本の角を持っていた。

右手には無骨な大剣。左手には巨大なカイトシールド。そして鎧の間隙からは黒い瘴気が漏れ出していた。

「・・・黒騎士様？」

「・・・ニゲロ・・・。」

片言でシード達にそう言うと、黒騎士は目の前にいた魔王に唐突に斬りかかる。

それをベルゼブブは左手から伸ばした紅い魔剣で受け止める。

「・・・ほう・・・。いい太刀筋だな。」

「・・・サスガ二魔王トナノルダケノコトハアル。」

「・・・その様子だと・・・ゴーストか？だが・・・その体は・・・？」

黒騎士の身体から聞こえてくる駆動音。それは機械の作動音であった。

「・・・中々ややこしいのを生み出したようだ・・・な！」

右手を大斧に変えて、ベルゼブブは黒騎士に斬りかかる。

それを盾でいなしつつ、黒騎士は下がる。

「・・・騎士なら名を名乗れ・・・。余は暴力と冥府の魔王・・・。ベ

ブゼブブ・・・。」

「・・・ワレハ・・・亡霊の鋼鉄騎士団・・・双角ノ剣・・・グリーズ。」

「・・・亡霊になっても・・・騎士道精神は・・・忘れていないと見える。」

正々堂々としたグリーズに、敬意を見せる魔王。

他のシード達はディーノ達と対峙しながら、撤退の機会をうかがう。

「・・・今回ハ・・・挨拶ダケだ・・・。手合ワセハ・・・マタノ機会・・・。」

その言葉が合図だった。

彼らのいる方に向けて砲撃が放たれたのだ。

「・・・手配がうまくい。仕方ない、便乗させてもらうか。」

不意を突かれた砲撃は魔王とグリーズの間に着弾し、爆発を起す。

その爆風に紛れてグリーズと襲撃してきた三人のシードは姿を消す。

そして・・・魔王とミカエルも去っていた。

「・・・どうやら・・・嵐は去ったみたいだね。」

しばしの静寂をえて、ジュエルは変身を解除する。

「それよりも手当てをしないと・・・。」

傷は浅いわけではないみたいだな。速く搬送したほうがいい。

変身を解かないままディーノは男の手当てをし、ガロは容体をみている。

「それは僕がやる。ディーノとガロはそのまま救助活動を。」

「ああ・・・。」

「俺も・・・手伝うぜ。」

そんな彼らに向かってきたのは服がボロボロになったハイルの姿
「・・・無事でよかった・・・。といたいけど、そっちも休んで！
むしろ怪我人だから。」

「だがよ・・・。」

「怪我人は足手まといになる。良いから俺に任せて！」

ボロボロで助けようとするハイルを強引に止め、ディーノは救助活動にはいる。

「・・・治癒はまかせろ。」

いつの間にか戻ってきていたバ　ハルトはハイルに治癒を施す。

「すまねえ。」

「いや・・・無事でなによりだ。」

こうして・・・彼ら四人の初めての出勤は終わりを迎える。

この程度はまだ序の口だとそろって皆は知っている。

「・・・これはとんでもない事件を追う事になりそうね。」

ティアナは被害状況の確認をしながら、相手となる敵の恐ろしさを実感し始めていた。

「私もパラディンを着る必要があるそうね。このままじゃあ・・・どちらにしても戦力不足。」

たった数人で、管理局の支部を襲撃してくる相手。まともに彼らと戦うには強力な魔法か、パラディンによる強化が必要不可欠だった。

魔王の介入がなかったら・・・激しい戦闘が行われ、さらに被害が増していたはずだ。

「でも・・・また魔王の介入？どうして・・・あんなに早く介入を？」

ティアナの疑問は魔王の介入の速さとの確さに軽い疑問を覚えていた。

彼女はこの先魔王と何度も遭遇することになる。

そして、その中で彼女は疑問を深めていくことになる。

チームの形。(後書き)

四人の初仕事・・・シリアスな意味で混沌としてしまいました。

バ ハルト「・・・さすがに気疲れしたぞ。」

ヘル「大変ですね。新しいお仕事。」

バ ハルト「明日は普通に司書として働きたいのだが・・・気になるからこまめによることにはなりそうだな。」

そう言いながらバ ハルトは家で大量の食事を平らげていた。

特務六課に入ったバ ハルト。フォースにも介入させまようか？
色々と反則になるとは思いますが。

そして次回・・・新キャラ登場です。

????「・・・私は・・・誰だ？」

その登場人物は色々な意味で迷子です。ついでに言えば・・・人でなし。

タイトル「魔王、首なし騎士と出会う。」

バ ハルト「・・・どこのホラーだお主？」

????「ホラーって誰のこと？」

バ ハルト「お主のことだ・・・あ・・・また首取れたぞ？」

????「・・・ああ・・・視界が回る〜!!」

お楽しみに!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7280v/>

仮面ライダーベルゼブブ

2011年9月27日03時13分発行